

平成30年度
ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉 川 大 学
大学 FD 委員会
大学院 FD 委員会

はじめに

—FDの組織的推進をめざして—

玉川大学は、ファカルティ・ディベロップメント（FD）をマイクロ、ミドル、マクロの三層の立場から推進しています。マイクロ・レベルのFDの目的は、教員個々の授業と教授法の開発にあります。通常、多くの大学でFDの名のもとに行われるのがこうした活動です。本学でも、大学FD委員会が中心になって行うFD活動はマイクロ・レベルが中心です。一方、ミドル・レベルは教務主任等によるカリキュラム・プログラムの開発が目的です。教務委員会における全学カリキュラムの見直しや各学部の教務担当者会における専門分野のカリキュラム改善のための作業がこれに該当します。さらに、マクロ・レベルは、管理者による大学組織の教育環境および教育制度の開発が目的です。こちらもミドル・レベルと同様に、そのための具体的なFD研修会等が開催されるわけではありません。現行の大学部長会や大学院研究科長会の一環として定期的に行われる教育研究活動等点検調査委員会などの作業がFD活動に相当します。

ミドル・レベルとマクロ・レベルのFD活動は、その性格上、全学的な視点と学部的な視点が要求されますが、マイクロ・レベルのFDは、長いあいだ各教員の努力義務のように理解されてきました。したがって、ワークショップや講演会の参加についても教員の自主性に委ねられ、学部や全学が一体となって授業や教授法の開発に取り組んできたとは言い難い状況にありました。しかし、平成19年以降、本学では、複数の学部で、また教学部教育学修支援課が中心となって積極的に授業改善に取り組んでいます。特に、平成26年度以降は文部科学省の教育再生加速プログラム（AP）の採択を受け、アクティブ・ラーニングやルーブリック等に関する講演会やワークショップを開催し、アクティブ・ラーニングの推進と学生の学修成果の可視化に努めています。また、ファカルティ・ディベロッパーを各学部1名配置する計画が平成30年度のワークショップをもって完了し、7名を認証することができました。

今後も引き続き、個々の教員がファカルティの一員として有機的にFDにかかわれる体制を堅持していきたいと考えています。

大学FD委員会・大学院FD委員会委員長
教学部長 中村好雄

目 次

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会	
(1) 委員会の目的	1
(2) 委員構成	1
(3) 今年度の活動計画および課題	1
(4) 活動状況	2
(5) 活動の成果	5
(6) 今後に向けて	5
2. 学部の活動	6
3. 教師教育リサーチセンターの活動	68
4. ELFセンターの活動	70
5. ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」	81

II 大学院 FD 活動報告

各研究科の活動	110
---------------	-----

III 教員研修

新任教員研修会

(1) 研修プログラム内容	119
(2) 配付資料・参考資料	121
(3) 実施の成果	122

参考資料

1. 大学 FD 委員会の議事内容	126
2. 大学院 FD 委員会の議事内容	128
3. 「授業評価アンケート」用紙	129
4. 玉川大学 FD 委員会規程	131
5. 玉川大学大学院 FD 委員会規程	133

※本文中の記載内容について

・ 役職名称は、平成 30 年度当時の記載とした。

I 大学 FD 活動状況と今後の計画

1. 大学 FD 委員会

(1) 委員会の目的

本委員会は、本学教員の教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的としている。また、FD 活動を行う目的を、以下のとおり明確にしている。

- ① 玉川大学の教育理念を実現するため。
- ② 21 世紀の玉川教育を支える教員を育成するため。
- ③ 大学大衆化時代に対応するため。
- ④ 競争優位性（受験生の大学選択等）を確保するため。

(2) 委員構成

委員等	所属	氏名
委員長	教 学 部 長	稲 葉 興 己
委 員	FDer	小 島 佐 恵 子
委 員	文 学 部	長 谷 川 洋 二
委 員	農 学 部	宮 田 徹
委 員	工 学 部	黒 田 潔
委 員	経 営 学 部	伊 藤 良 二
委 員	教 育 学 部	高 平 小 百 合
委 員	芸 術 学 部	林 三 雄
委 員	リベラルアーツ学部	梶 川 祥 世
委 員	観 光 学 部	小 林 直 樹
委 員	ELFセンター	チャイクル, ラサミ
事務担当	教学部教育学修支援課	山 崎 千 鶴
事務担当	教 学 部 教 務 課	光 森 多 佳 子
事務担当	教師教育リサーチセンター	奥 田 晴 美
事務担当	教育企画部教育企画課	金 子 勲
事務担当	人 事 部 人 事 課	後 藤 洋 子

(3) 今年度の活動計画および課題

昨年度に引き続き、Tamagawa Vision 2020 の Action Plan 2018 に沿って取り組んだ。すなわち、

1. 各分野の学問分野に応じた教授法の研究開発の開始
アクティブ・ラーニングをテーマとした研修会を開催する。さらに、研修会を学外にも公開していく。
2. 双方向型授業、問題解決型授業（PBL）の研究会発足
アクティブ・ラーニング・ハンドブックを大学ホームページ上に公開できるよう、内容を検討する。
3. 全授業科目の成績評価分布を公表する
シラバスの成績評価基準のみならず、シラバス作成マニュアルを更新する。
4. FDer の養成プログラムの作成と実施
各学部の FDer 候補者を選定し、学内にて FDer 養成講座を開催する。
5. 玉川大学教職員 Credo の草稿の作成
引き続き、本学 Credo の素案を検討する。

(4) 活動状況

<平成 30 年度>

4 月 9 日	教員対象 Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催（24 日まで計 5 回）
4 月 12 日	ティーチング・アシスタント(以下、TA)研修会「効果的に授業を支援するための TA の役割」（講師：教育学部 小島佐恵子）開催
4 月 25 日	第 1 回 大学院 FD 委員会 開催
4 月 27 日	第 1 回 大学 FD 委員会 開催
5 月 16 日～18 日	第 8 回教育 IT ソリューション EXPO に職員派遣
5 月 19 日	JBUG9（Blackboard ユーザ会）に職員を派遣
5 月 24 日	TA 研修会「ファシリテーターの役割」（講師：TAP センター 川本和孝）開催
6 月 10 日～11 日	大学教育学会第 40 回大会「AI 時代を生きるための教養教育」（筑波大学）に職員派遣
7 月 6 日	第 2 回 大学 FD 委員会 開催
8 月 16 日	第 2 回 大学院 FD 委員会 開催
8 月 31 日	Blackboard Inc.主催の「Teaching & Learning Forum 2018 Tokyo」（ベルサール八重洲）に職員派遣
9 月 4 日	私立大学情報教育協会主催「教育改革 ICT 戦略大会」（私学会館）に職員派遣
9 月 27 日	教員対象 e-Education システム Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催（28 日まで計 3 回）
10 月 8 日	教員対象 e-Education システム Blackboard@Tamagawa 操作説明会を開催（28 日まで計 4 回）
10 月 15 日	教員対象 e-Education システム Blackboard@Tamagawa 活用相談

	窓口を開催（19日まで計10回）
10月29日	ループリック ワークショップ「ループリック評価スタートアップ—評価の原則から組織での活用まで」（講師：高知大学 俣野秀典）を開催
10月29日	教員対象学 e-Education システム Blackboard@Tamagawa 活用相談窓口を開催（31日まで計6回）
11月13日	ヴィエムウェア株式会社主催「vFORUM 2018 TOKYO」（ザ・プリンスパークタワー東京）に職員派遣
11月27日	第3回 大学FD委員会 開催
11月30日	大学教育学会「大学教育学会 2018年度課題研究集会」（長崎県 長崎国際大学）に職員派遣
12月11日	日商エレクトロニクス株式会社、ヴィエムウェア株式会社主催「VDI もオンプレからクラウドに VDI サービス on Microsoft Azure」に職員派遣
1月16日	科目担当者対象アクティブ・ラーニング ワークショップ「多人数授業におけるアクティブ・ラーニングの活用」（講師：東京大学 吉田壘）を開催
1月22日	第4回 大学FD委員会 開催
2月9日	株式会社大塚商会主催「実践ソリューションフェア 2019 東京」（ザ・プリンスパークタワー東京）に職員派遣
2月22日	2018年度 大学教育力研修 開催 基調講演「障害のある学生への合理的配慮 制度改正により教職員に求められること」（講師：信州大学 高橋知音） 分科会① アクティブ・ラーニング ワークショップ「グループ学修を評価する - 実技・実習を中心に」（講師：関西福祉科学大学 久保田祐歌） 分科会② ELF センター教員によるコンテンツ科目の英語化ワークショップ「「教育法入門：プロフェッショナルラーニングコミュニティにおける教師としてのアイデンティティ形成 Introduction to teaching: The development of teacher identity in professional learning communities」（講師：ELF センター レイクセンリング, アンドリュウ） 分科会③ LMS を活用したアクティブ・ラーニング授業ワークショップ（講師：帝京大学 渡辺博芳） 分科会④ ループリック ワークショップ「ループリック評価スタートアップ—評価の原則から組織での活用まで」（講師：高知大学 俣野秀典） 分科会⑤・⑥「アクティブ・ラーニングについての各学部事例報告」

2月28日	FDer 養成講座を開催（講師：愛媛大学 中井俊樹、芝浦工業大学 榑原暢久 奥田宏志）【3月2日まで】
2月28日	法政大学情報メディア教育研究センター主催「情報メディア教育研究センターシンポジウム 2019」（法政大学 市ヶ谷キャンパス）に職員派遣
3月13日	玉川大学 AP フォーラム 2018 「学修成果の可視化 何を、何によって、どのように測定するか」 開催 基調講演 「学修成果測定の可能性と陥穽」（講師：早稲田大学 吉田文） 事例報告① 「玉川大学における学修成果の測定方法とこれから」（講師：玉川大学 稲葉興己） 事例報告② 「大阪府立大学における学修成果可視化の試み」（講師：大阪府立大学 畑野快） 事例報告③ 「高大社をつなぐ学びの可視化を探る－PROG から見えてきた客観的評価の可能性－」（講師：河合塾 成田秀夫） パネルディスカッション （パネリスト：早稲田大学 吉田文、大阪府立大学 畑野快、河合塾 成田秀雄、玉川大学 稲葉興己） 平成 31 年度新任教員研修会 開催
3月7日	平成 31 年度非常勤教員研修会 開催
3月22日	第 3 回 大学院 FD 委員会 開催
3月22日	

その他、学生による授業評価アンケート、第三者によるシラバス確認など、例年どおりに実施した。授業評価アンケートは、US 科目については教学部教育学修支援課が、各学部開講科目については開講学部が実施した。第三者によるシラバス確認は平成 16 年度開講科目より実施しており、ある程度定着したと考えてよいであろう。シラバスを前半（履修登録に資するために公開するもの）と後半（履修登録をした学生のみ見られるもの）に分け、前半については科目開講年度の前年度 1 月に全科目を確認、後半については、春学期科目は前年度の 3 月、秋学期科目は当該年度の 8 月に確認している。また、科目の特性により確認する点が異なることから、教育職員免許状取得に関わる科目については教師教育リサーチセンターが、また、それ以外の科目については教育学修支援課が確認を担当した。

また、10 月のルーブリック ワークショップおよび 2 月の大学教育力研修は、平成 26 年度に採択された「文部科学省 大学教育再生加速プログラム (AP)」の取組として実施した。大学教育力研修の午後には分科会を行っているが、今年度は 6 件の分科会を開催した。

非常勤教員のみを対象とした研修会も AP の取組の一環である。当該研修会は平成 27 年度より実施しているものであるが、それまでは本学の教育方針や今後の方向性などは専任教員に対

してのみ情報共有が図られてきた。しかし、非常勤の教員であっても本学の教育方針に基づいた教育および授業を行うことを求めており、今の本学の取組について説明する機会を設けた。

なお、これまでも実施しているものであるが、Blackboardの一層の活用を目指して、教員を対象にその操作説明や活用方法の相談の機会を多く設けた。同時に、ICT教育に関する学外でのセミナー等に参加する機会を増やした。今後の取組の参考としたい。

(5) 活動の成果

今年度の活動計画に基づき、活発な取組をすることができた。昨年に引き続き、特にICT教育に関する他機関が開催する関連研修会等には職員も多く参加し、教職協働を実現すると同時に、教員と職員が同じスタンスに立ってFD活動を推進することができた。

また、前項のとおり、APに沿って複数の研修会等を開催した。これらは、アクティブ・ラーニングの活用と学修成果の可視化を目的とするものであり、一定の理解は得られたものと考えている。2月に開催した大学教育力研修については今回から学外にも公開し、24名の参加があった。

また、2月28日(木)から3月2日(土)にて、学内でFDer養成講座を開催した。当該講座においては、愛媛大学の中井俊樹教授、芝浦工業大学の榊原暢久教授を講師に招聘し、本学のFD活動に沿った内容とした。受講者は次年度の各学部FD担当8名であった。その他、すでにFDer認定を受けている経営学部の伊藤良治准教授にもお手伝いをいただいた。受講者全員が全プログラムを終え、玉川大学FDerを各学部1名以上、配置することができた。講座を受講することで、FDerの役割を理解できただけでなく、学部のFD活動の課題に気づくことができたという感想があった。一方、FDerとして認定を受けたことで、学部のみならず、大学全体のFD活動の意義や目的の見直し、また、マイクロレベルだけでなく、ミドルレベルからマクロレベルまでのFDの一体的な取り組みへの必要性にも気づいた。

(6) 今後に向けて

次年度においても、他機関主催の関連研究会等には積極的に参加し、関係教職員への情報提供を行いたい。また、学内で開催する研修会等についてもAPの取組を中心に、アクティブ・ラーニングをテーマとしたワークショップ、ループリック指標による評価に関するワークショップ、非常勤教員対象研修会等は継続して開催していく。大学教育力研修については次年度以降も学内の教員のみを対象とするだけでなく、学外にも公開する予定である。

また、FDerを各学部に配置することで各学部のFD活動が一層活発になることも期待できる一方、大学として、今後FDをどのように進めていくのか、FDerにどのような役割を担ってもらいたいのかを明確にする必要性も出てきた。大学FD委員会を中心に検討していく。

2. 学部の活動

平成 30 年度における各学部 FD 活動の状況を一覧にする。

	各学部 FD 委員会 の構成人数	各学部 FD 委員会 の開催回数	学生による授業評価アンケートの実施			学部研修会
			実施時期	専任 対象	公表	
文学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web) *1	学内外実施
農学部	9 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施
工学部	6 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学外 (Web) 学内 (冊子) *2	各学期終了後 学内実施
経営学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後 *3	全員	学内外 (Web)	学内実施
教育学部 (通信教育 課程含)	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後 (通信教育課程は スクーリングの都度)	全員	学内	学内実施
芸術学部	7 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内	学内実施
リハビリ 学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	—	学内外実施
観光学部	5 名	2 回	春学期終了後 秋学期終了後	全員	学内外 (Web)	学内実施

*1: 文学部における学生によるアンケート結果の公表は英語教育学科で実施する予定である。

*2: 学生による授業評価アンケート結果は、学外向けには総括内容を大学 HP (Web) で、
学内向けには全内容の詳細を冊子として 8 号館玄関ロビーにて、それぞれ公表している。

*3: 対象全科目を春学期、秋学期いずれかで 1 回実施 (重複実施はせず)。

※ユニバーシティ・スタンダード科目についての学生によるアンケートは別途実施している。

§ 文学部

1 FD 活動への取組理念・目標

大学に対する社会からの期待とニーズの多様化と、大学生の学力低下という現実に対応すべく、FDによる教育力の向上によって、時代に即した、そして普遍性を兼ね備えた大学教育を実現すべく努力することを、文学部のFD活動への取組理念とする。就労意識の変化に対応した学生へのキャリア教育ないし就職指導も、大学にとって重要性を増しているのに加え、文学部では比較文化学科が英語教育学科に、人間学科が国語教育学科に移行する過程にあり、FDの重要性はより増している。

このような現状の下、一人ひとりの教員が学部のディプロマ・ポリシーに則りFD活動に臨み、教員全員が主体的にFD活動に参加し、組織的なFD活動を実現することを目標としている。

2 学部におけるFD活動の組織構成と役割

文学部長および主任会（教務主任、学生主任、国語教育学科・人間学科主任、比較文化学科・英語教育学科主任）のもとに、文学部FD委員と、国語教育学科・人間学科、比較文化学科・英語教育学科のFD担当（国語教育学科・人間学科は文学部FD委員が兼務）の合計7名で文学部FD委員会を組織している。

3 平成30年度の活動内容

(1) 授業設計・成績評価ミーティング（国語教育学科）

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする初年次教育の科目である「一年次セミナー101・102」は、まとめ役を座長として授業の計画・内容・成績評価に関する合意形成を目的とした会議を毎回1時間ほど、毎月2回行った。

② 到達目標

授業担当者間において、科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

それぞれの教員の授業内容の報告とそれに対する意見交換、授業改善の提案、成績評価に関する検討、他科目との連携の可能性の検討、外部講師の積極的な利用などを行った。さらに、授業の成果の一部をコスモス祭で展示・発表するための準備や、文学部の4年生（教員内定者、民間企業内定者、地方公務員内定者）を招いてのキャリアについてのワークショップの準備についてどう学生を活動させるかについても議論した。

④ 評価

学生による授業評価のアンケートによれば、春学期に関しては、大学、学部・学科、クラスになじむのに効果があったようだ。『大学生生活ナビ』の有効な利用方法については検討する必要がある。教員志望の学生が多いためTAPによるリーダー講習なども取り入れていきたい。大学共通カリキュラムを基本に、学科独自の内容へとどのようにアレンジ

していくかという点、授業時に学生たちをいかに主体的に活動させるかという点について、今後もお検討を要する。

(2) 授業設計・成績評価ミーティング（国語教育学科）

① 概要（目的を含む）

複数教員が授業担当をする科目である「言語表現入門 A・B」について授業の計画・内容・ルーブリック作成・成績評価に関する合意形成を目的とした会議を平均月 1 回（各 1 時間ほど）行った。

② 到達目標

授業担当者間において、科目の教育目標達成のための合意形成を得る。

③ 活動内容

それぞれの教員の授業内容の報告とそれに対する意見交換・授業改善の提案・試験問題作成・成績評価に関する検討などを行った。

④ 評価

「言語表現入門 A・B」は 4 クラスに分けているが授業内容と試験・レポート課題を統一し、また共通のルーブリックによる成績評価を行っているので、十分な FD 活動に基づいていると考えられる。ただし、学生による授業評価のアンケートは行っていない。

(3) 学生による授業評価アンケート（比較文化学科・英語教育学科）

① 概要（目的を含む）

英語教育学科が開設している授業について、授業評価アンケートを実施した。個々の教員が、担当する授業を点検し、改善するための指標を得ることが目的である。

② 到達目標

教員の意図・認識と学生の受け止め方・実態との間にどのような違いがあるかを検証し、次年度の授業改善に具体的に活かす。

③ 活動内容

実施時期：秋学期

対象科目：英語教育学科の教育課程表にある科目のうち、US 科目およびセミナーを除く科目で、実際に開講されたものを対象とした。ただし、今年度一杯で比較文化学科が廃止される見通しであったことや、次年度から新教育課程表に基づく教育が展開されることに伴い、次年度も開講される英語教育学科の科目（現行の教育課程表に基づいて開講される科目）に絞った。そのため、最終的な対象科目は 11 科目で、クラス数が 15 クラス、受講者数は 319 名であった。

集 計：業者に委託して、各クラス別、カテゴリー別、全体の 3 レベルで集計する。集計結果は平成 31 年 3 月末に完成する予定である。

フィードバック：対象科目の各授業担当者にはアンケート原票、クラス別集計結果およびカテゴリー別集計結果をフィードバックし、全体の集計結果は大学ホームページ上に公開する予定である。

④ 評価

アンケートは予定どおり実施したが、上述のように現在集計の作業を行っているところであり、結果はまだ出ていないため、平成 31 年 4 月以降に総括を行いたい。

(4) 海外留学プログラムの英語運用能力に関する効果の検証

① 概要（目的を含む）

英語教育学科では、2 年次秋学期から 3 年次春学期にかけて留学することを卒業要件の一つとして定めている。そこで、留学制度の効果のうち、特に英語運用能力の向上について検証するため、留学前後で IELTS の受験を実施している。IELTS (International English Language Testing System) とは、英国や米国を含む世界 140 カ国 10,000 機関が認定する、海外留学に必要な英語運用能力を測定するのに適した英語運用能力判定テストである。IELTS の受験にあたり、平成 29 年度に引き続き、平成 30 年度も学部等改革推進制度の支援を受けている。

② 到達目標

- ・ 留学前の学修が、留学先大学での学びにどのように役立っているのかを把握する。
- ・ 英語運用能力の 4 技能について、留学前後でどのように変化するのかを客観的な指標をもとに把握する。
- ・ 上記の結果をもとに、英語教育学科の授業およびカリキュラムを改善する。

③ 活動内容

当初は留学からの帰国から間もない 7 月 28 日（土）に IELTS の実施を予定していたが、台風接近により延期せざるを得なくなり、再調整の後、10 月 13 日（土）に実施した。その結果をもとに、英語教育学科第 2 期生（平成 28 年度入学生）の留学前と留学後の IELTS スコアを検証した。

④ 評価

第 1 期生と同様に、第 2 期生も 4 技能別スコアおよび総合スコアの全てにおいて留学後のほうが高いことが分かった。その一方で、第 1 期生と比較すると、その伸び幅は全体的に小さかった。その中でも、特にライティングとリーディングのスコアの伸びは小さかった。こうした違いが偶然により引き起こされた実施時期の違いによるものなのかなど、さらに慎重な分析が必要である。

(5) 学外セミナー等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

他大学での FD 活動の取組方法やその成果についての情報を収集し、文学部の FD 活動に活かすため、学外で開催されるセミナーに教員を派遣する。

② 到達目標

文学部専任教員の 20%を何らかの学外 FD 研修会に派遣する。

③ 活動内容

1. 第 24 回 FD フォーラム（公益財団法人 大学コンソーシアム京都主催）

開催日：平成 31 年 3 月 2 日（土）・3 日（日）

派遣：1 名（英語教育学科）

2. 第 25 回大学教育研究フォーラム（京都大学高等教育研究開発推進センター主催）

開催日：平成 30 年 3 月 23 日（土）・24 日（日）

派遣：5 名（国語教育学科 4 名、英語教育学科 1 名）内 4 名はポスター発表

④ 評価

参加者数延べ 6 名は学部専任教員の 24%であり、数値目標は達成した。派遣先で得た知見を今後学部、学科の FD 活動に還元していきたい。

(6) 授業参観

① 概要（目的を含む）

文学部教員の授業力向上のため、授業参観を実施した。授業公開をする教員は、参観者からの意見を聞き、互いに議論することによって授業方法の改善に役立て、参観した教員は、他の教員の授業方法を参考にして自分の授業改善に結びつける。

② 到達目標

参観を通して授業実施者と参観者のそれぞれが自らの長所、短所を自覚し、授業力を向上させる。

③ 活動内容

実施時期は春学期および秋学期であり、人間学科、国語教育学科、比較文化学科、英語教育学科の全授業を公開対象とした。

④ 評価

授業参観の実施授業は春学期（受入）1 件、参観者数 1 名；秋学期（受入）1 件、参観者 1 名であった。参観後、担当教員から、異なる視点から学生や指導方法をみてコメントをもらうことで、授業を考え直す機会になったとの感想も寄せられており、授業参観が今後の授業改善に役立ったものと判断することができよう。

とはいえ、昨年度同様、依然として授業参観活動は低調のままである。その原因には複数の要因が関わっているため、活性化の方策を見いだすことは容易くないが、今後も原因を一つひとつ見極めながら見直しを図っていきたい。

4 昨年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

- 1) FD 研修の企画：具体化には至らなかった。
- 2) 学内外の FD 関連の研修会への参加、そしてそこでの研究発表：目標は達成された。
- 3) 学生一人ひとりの基礎学力の正確な把握：複数の検定試験を利用するなどして客観的データを蓄積することができた点では、目標は達成された。
- 4) 新入生に対する大学での学修へのスムーズな導入：各担当を中心に新入生と接する教員同士で計画を立案・実施し、振り返りを行いながら次年度の実施計画を立案することができている点において、目標は達成されたものとする。
- 5) 適切な授業方法と成績評価方法の検討：各授業において検討を重ねている点において目

標は達成されたものとする。

6) カリキュラムの点検：目標は達成された。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

従来活動の継続とその活性化をさらに推進する。特に文学部における FD 研修の機会を設けて、学部の課題を検証することを課題としたい。

国語教育学科では一年次セミナー以外の科目では授業評価アンケートを行っていない。学科科目の開設が学年進行のため開設授業数が少ないこと、アンケート項目・集計の仕方・利用方法について十分な検討を経ていないこと、また学科で予算措置して実施する場合の費用対効果が十分に見通せないことなどの理由による。今後の検討課題としたい。

§ 農学部

1 FD 活動への取組理念・目標

玉川大学の教育理念に基づいた教育を実現するため、農学部教員にとっての学生の学修レベルの理解を向上させ、授業の内容および方法の改善、研修会への積極的な参加を、大学 FD 委員会と協調して促進する。農学部では実験実習科目が多いことから、講義科目との連携によって、学生が主体的に学修できる教育環境の充実を考える。専任教員および非常勤講師は学生による授業評価アンケートを実施し、授業改善への意識を高める。さらに授業評価の結果を振り返り、改善方法を検討して教員間で共有できるようにする。学部内では、主任会メンバーを中心に各教員との情報交換を行い、学修環境の向上に努める。これらを通して、教員は自らの教育力向上に対する意識を高め、社会に貢献できる卒業生を農学部として育成するために組織的な FD 活動を推進する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

農学部長、生産農学科主任、生産農学科副主任、環境農学科主任、先端食農学科主任、学生主任、教務主任、総合農学研究センター副主任および農学部 FD 担当の計 9 名が中心となり、農学部全教職員が目標達成にあたる。

3 平成 30 年度の活動内容

(1) 研修会

① 概要（目的を含む）

農学部では以下の研修会を実施した。

1) 「農学部-ハラスメント防止研修会（桑島英美弁護士）」平成 30 年 11 月 29 日

2) 「農学部-障がい者に対する合理的配慮についての研修会（安藤正紀先生）」

平成 30 年 12 月 20 日

3) 「農学部-メンタルケアを必要とする学生のための研修会（神谷路子先生）」

平成 30 年 10 月 25 日

全ての研修は農学部、農学研究科全教員を対象とし、教職員の業務環境の最適な維持ならびに学生、大学院生への研究と教育活動における適切な接し方、障がいや心に不安を抱えた学生への配慮や適切な指導について学ぶことを目的に実施した。

② 到達目標

1)については、教職員間のハラスメント防止、2)については、障がいのある学生への合理的配慮と対応、3)は、メンタルケアを必要とする学生の理解と支援のために行った。

③ 活動内容

1)は、セクシャルハラスメント、パワーハラスメント、アカデミックハラスメントの、大学でおきる可能性のある事例について、桑島英美弁護士から話を聞いた。学校法人として安全配慮義務、環境配慮義務、教育を受ける権利・学問の自由・研究の自由を保障しつつ、ハラスメントが起きない体制を、職場の責任者が具体化する必要がある。雇用

機会均等法や妊娠・出産に関するハラスメント防止措置として法的整備は進んでいるが、セクシャルハラスメントは全国の大学でなくなるらない。職場の上下関係や大学の師弟関係、教員と職員、正規職員とパートでは、被害者がはっきり嫌と言えないことがあり、女性同士や男性同士でも加害者になり得る。LGBTについても正しく理解し、大学内でセクシャルハラスメントが起きないための話を聞いた。またアカデミックハラスメントやパワーハラスメントについても、優越的地位や指導的立場の違いがある大学という環境において、起こりやすい事例を紹介してもらった。大学教員のアカデミックハラスメントの特徴として、本人が自覚していない、大学の中にハラスメント的な風潮があるなどが挙げられた。加害者は有力で有能と評価されていることが多く、被害者は被害を公にできない。ハラスメントの加害者または被害者にならないために、相談できる場を探す（上司、人事、外部の相談機関、弁護士）、まわりがハラスメントを見過ごさないようにするなど聞いた。

2)は特別支援教育の実務および研究に長年携わっている本学教職大学院の安藤正紀先生に、障がい者に対する合理的配慮についての研修をしてもらった。障がいのある学生は、出来ることまたは出来ないことの違いや程度がさまざま、個別に対応する必要がある。しかし、大学生の場合には教員が全てを見てあげることができないので、学生の仲間によるピアサポートやさまざまな学修支援が必要となる。障がいによって学修が困難になる場合、見る、聞くなどの入力できていないのか、知り得た情報の意味づけ、整理ができないのか、話す、書くといった出力に問題があるのかを、個々に知る必要がある。そのためには、大学生活において個別面談は重要で、その中で特性を見いだせるようにする。その観察の視点としては、心の安定・不安定さ、問題が生じるときの環境の特定、時間の特定が重要である。学生の障がいまたは能力の違いによって、修得不可能な学修方法があり、多様な学修方法を授業の中に導入できると良い。そのために「what」・「how」・「why」の原則によるUDL (Universal Design for Learning) に基づいた多様な授業方法を、アクティブ・ラーニングとして取り入れる。タブレットやアプリ、e-ラーニングなどさまざまなIT技術を導入したAssistive Technologyを活用する知見を示してもらった。

3)では、保健センター健康院の神谷路子カウンセラーに、メンタルケアを必要とする学生への対応を話してもらった。神谷先生の研修は3回目になり、以前の研修では、近年の学生の精神的発達の特徴とその対応方法を聞いていた。そこで今回は心に不安を抱え学修意欲が低下し休学をしてしまった学生が、大学へ復学する際の対応の注意点について話を伺った。学生への対応方法としては「どうして欲しいか、またはして欲しくないか」を聞く、不調を感じたら休むことを約束してもらう、具合が悪そうに見えたらそれを伝える、というのがあった。伝える際には「アイメッセージ」といって、私を主語にした言い方が効果的である。復学学生への支援としては、十分に意欲が回復していること、学期中の修学が可能なことを確認する。支援のための具体的な情報を知らせてもらい、教職員が共有して円滑に進められるようにする。学生が安心してコミュニケーションのとれる関係をつくることが重要である。また、実験や実習、演習など形式の異な

る授業における配慮を、予め相談しておくというのであった。

④ 評価

1)については、毎年同様の研修を行っている。全国の大学でハラスメントに関する不祥事はなくならず、しばしば報道されているのを目にする。大学教職員間のハラスメントは、研究室の環境や優越的地位の違いが要因となって生じるケースが多い。誰もがハラスメントの加害者にも被害者にもなり得ることから、自分勝手な判断をなくし、職場環境を冷静に見直して、ハラスメントのない大学を目指すことが確認できた。

農学部の学修環境は、講義だけでなく、実験や実習、卒業研究など、学生と接する場面が多様にある。学生の特性もさまざまであり、同じ授業内容や教授方法を全ての学生が同様に解釈できるとは限らない。特に障がいのある学生に対しては、その能力や特性に応じた多様な教授方法を必要とすることが2)の研修によって理解できた。さらに障がいのある学生同様、メンタルケアを必要とする学生に対しても、学生の要望、要求、特性を理解した上で、できる支援を教職員が共有してつくり上げていく必要が3)の研修で確認できた。学部内での学生支援の強化と教学部、学生センター、保健センター 健康院との連携による全学的な支援を構築する必要が考えられた。

(2) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

授業改善のために、農学部開講科目の担当教員（専任および非常勤講師）に協力を求め、講義科目と実験・実習科目の受講生30名以上の必修科目を中心に、授業評価アンケートを実施した。

② 到達目標

授業の状況把握により講義技法や情報伝達の仕方、教育設備の向上に活用し、授業改善を達成する。また、大学HP上に結果を公開することで受験生および関係者に対し、授業の健全性をアピールする。

③ 活動内容

春学期44科目、3,352名、秋学期50科目、3,103名に対して授業評価アンケートを実施した。

授業評価アンケートを集計後、結果をアンケートの原本とともに各教員に送付した。アンケートの振り返りを行うため、アンケート項目のチェック、改善内容について記載してもらった。さらに、大学HPに学部、学科単位での集計結果を公開した。

④ 評価

アンケートは各学科の必修科目を中心に講義科目と実験・実習科目で実施した。領域の実験・実習科目は30名以下の場合もあった。全体的に授業外での学修時間（設問2）が、講義科目において低かった。実験・実習科目ではレポート課題があるため、2～3時間の学修時間が確保されていた。これは例年同様であり、講義科目における授業外の学修時間の確保が課題である。授業の進行速度が速いという科目がいくつかあった。教員の授業に対する取組（設問13～15）は、科目によって低いものもあったが概ね良好であ

った。分野 III（設問 18～21）および総合評価の分野 IV（設問 22）はいくつかの科目で低いものもあったが、概ね評価が高く、全体として良好であった。農学部改組後の学生が 2 年生になり、新カリキュラムのアンケート対象科目が増えた。新学科のカリキュラムでは選択科目が多く、学生の興味に基づいて履修科目が選択されているので、授業評価は高くなったと考えられた。しかし、100 名を超える大人数の授業では評価にばらつきがあり、学生の能力に応じた授業展開の難しさを表している。全体として講義科目に比べ、実験・実習科目での総合評価が高かった。授業改善に向けた取組として、アンケート結果のチェックと改善内容の記述をしている。授業評価アンケートの学生記述欄から、授業の改善点を見出すことができた。

表. 平成 30 年度の授業評価アンケート集計結果（6 学科のアンケート実施科目すべて）

（春学期・講義科目）

分野	設問	平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全く思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	23.4%	49.6%	24.3%	2.3%	0.3%	2
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.0	8.5%	19.1%	37.8%	28.4%	6.3%	4
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	17.5%	35.5%	40.0%	5.6%	1.4%	3
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.8	20.3%	42.3%	32.3%	4.5%	0.6%	5
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.9	28.3%	40.8%	27.3%	3.0%	0.5%	7
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.8	27.4%	38.5%	25.4%	7.7%	1.0%	22
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	22.5%	34.9%	26.2%	14.0%	2.4%	44
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったか	4.0	35.5%	37.2%	22.6%	3.8%	0.9%	11
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	38.8%	37.4%	19.5%	3.3%	1.0%	7
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.1	39.2%	36.1%	20.8%	2.8%	1.1%	9
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.1	36.0%	39.0%	21.6%	2.5%	0.9%	9
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	30.6%	35.3%	29.5%	3.5%	1.0%	34
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.9	30.2%	37.0%	28.3%	3.6%	0.8%	2
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.0	32.1%	40.7%	24.2%	2.4%	0.6%	0
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	40.9%	37.5%	19.9%	1.3%	0.5%	3
	18 この授業の内容をよく理解できた	3.8	22.1%	42.2%	28.6%	6.1%	1.1%	3
	19 この授業の内容に興味・関心が持てた	3.9	30.9%	37.1%	26.2%	4.7%	1.1%	2
	20 自分で調べ、考える姿勢が身についた	3.8	25.1%	38.4%	31.8%	4.0%	0.6%	3
	21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた	4.0	32.2%	40.5%	24.2%	2.6%	0.5%	1
総合評価		平均値	強く思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	全く思わない	無効回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.0	34.3%	38.9%	23.1%	2.8%	0.9%	6

(春学期・実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	やや思う	どちらとも	あまり思	全く思わ	無効 回答数	
			5	4	3	2	1		
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	44.2%	43.8%	11.1%	0.7%	0.2%	1	
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.3	18.6%	22.8%	33.2%	23.0%	2.5%	1	
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	22.6%	30.7%	36.3%	7.0%	3.5%	3	
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.0	29.7%	45.2%	22.0%	2.5%	0.6%	2	
	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.0	34.5%	36.3%	23.1%	4.7%	1.5%	3	
II	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.8	30.1%	34.7%	22.0%	10.8%	2.4%	10	
	2)多かった 1)少なかった				92.2%	7.8%	42		
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.8	28.1%	35.5%	25.9%	9.1%	1.4%	16	
	2)難しかった 1)易しかった				87.0%	13.0%	38		
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったですか	4.0	34.3%	38.9%	21.8%	4.1%	1.0%	1	
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	37.3%	38.7%	19.7%	2.7%	1.6%	2	
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	4.0	35.1%	37.3%	22.3%	3.1%	2.2%	2	
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	47.1%	34.0%	15.2%	2.8%	0.9%	5	
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.8	27.3%	37.5%	23.4%	1.0%	0.8%	0	
	2)多かった 1)少なかった				96.6%	3.4%	36		
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習)への取り組みを促しましたか	4.2	42.3%	38.1%	16.6%	2.3%	0.7%	0	
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	39.4%	38.9%	19.0%	1.6%	1.0%	0	
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.3	49.1%	35.8%	13.3%	1.0%	0.9%	3	
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.1	30.5%	49.5%	18.2%	1.5%	0.4%	0
		19 この授業の内容に興味・関心が持てた	4.2	42.3%	38.1%	16.6%	2.3%	0.7%	0
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		4.1	36.5%	40.4%	20.9%	1.7%	0.5%	0	
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.3	49.4%	36.4%	12.9%	1.0%	0.4%	0	
総合評価		平均値	強く思う	やや思う	どちらとも	あまり思	全く思わ	無効	
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.3	48.5%	34.6%	14.9%	1.6%	0.5%	1	

(秋学期・講義科目)

分野	設問	平均値	強く思う	やや思う	どちらとも	あまり思	全く思わ	無効 回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	3.9	23.6%	45.3%	26.7%	3.5%	0.9%	2
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	2.9	8.4%	17.4%	39.5%	27.4%	7.4%	2
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.6	17.7%	34.3%	40.7%	5.9%	1.4%	6
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	3.8	20.9%	40.3%	33.9%	3.9%	0.9%	8
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	3.9	28.1%	41.7%	27.5%	2.5%	0.3%	2
	6 授業の進行速度は適切でしたか	3.8	26.3%	39.0%	27.5%	6.4%	0.7%	14
	2)早かった 1)遅かった				86.3%	13.7%	54	
	7 授業内容の難易度は適切でしたか	3.6	21.7%	34.9%	30.7%	11.3%	1.5%	23
	2)難しかった 1)易しかった				93.7%	6.3%	84	
	8 教員の声や話し方は明瞭で聞き取りやすかったですか	4.0	33.6%	38.4%	24.1%	3.5%	0.3%	8
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.0	36.2%	37.2%	21.8%	4.0%	0.8%	8
	10 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)や板書が授業の理解に効果的でしたか	4.1	37.5%	36.9%	21.6%	3.2%	0.8%	6
	11 授業内容は系統的によく整理され準備されていましたか	4.1	34.2%	39.1%	24.3%	2.1%	0.2%	10
	12 課題、レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	29.6%	33.7%	33.4%	2.5%	0.7%	19
	2)多かった 1)少なかった				82.6%	17.4%	34	
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習)を促しましたか	3.9	27.8%	37.2%	29.1%	4.2%	1.7%	5
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.0	32.0%	37.4%	26.3%	3.3%	0.9%	1
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.1	37.9%	36.5%	23.8%	1.4%	0.5%	3
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	3.8	22.8%	39.8%	29.4%	6.6%	1.4%
19 この授業の内容に興味・関心が持てた		3.9	27.3%	39.4%	27.5%	4.7%	1.2%	2
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		3.8	23.4%	37.9%	32.8%	4.4%	1.5%	4
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.0	31.5%	39.3%	26.0%	2.3%	0.8%	2
総合評価		平均値	強く思う	やや思う	どちらとも	あまり思	全く思わ	無効
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.0	32.5%	38.4%	24.7%	3.3%	1.1%	16

(秋学期・実験・実習科目)

分野	設問	平均値	強く思う	やや思う	どちらとも思えない	あまり思わない	全く思わない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
I	1 あなたはこの授業に意欲的に取り組みましたか	4.3	45.5%	42.1%	10.8%	1.2%	0.4%	0
	2 あなたがこの授業1回分の授業外に学習(予習・復習・課題)した時間はどれくらいですか	3.5	23.6%	23.3%	33.7%	16.9%	2.5%	1
	3 この授業のシラバスはあなたの受講に役立ちましたか	3.7	24.3%	32.5%	34.0%	6.6%	2.6%	3
	4 あなたはこの授業の目標を把握できていましたか	4.1	33.3%	42.4%	21.3%	2.3%	0.7%	1
II	5 授業はシラバスに沿って進められましたか	4.1	36.0%	39.5%	20.9%	2.7%	0.8%	3
	6 実験・実習内容の量は適切でしたか	3.9	30.7%	36.1%	24.2%	7.5%	1.6%	10
	2)多かった 1)少なかった					92.5%	7.5%	22
	7 実験・実習内容の難易度は適切でしたか	3.8	29.4%	36.8%	24.0%	7.5%	1.6%	10
	2)難しかった 1)易しかった					98.2%	1.8%	26
	8 実験や実習の方法や作業の説明は明瞭で分かりやすかったですか	4.1	37.5%	38.2%	20.5%	3.4%	0.5%	8
	9 教科書、プリント、参考文献などが授業の理解に役立ちましたか	4.1	40.7%	34.8%	21.7%	2.4%	0.5%	5
	10 映像視覚教材(パワーポイントなど)や実験材料が授業の理解に効果的に活用されていましたか	4.0	34.6%	37.5%	23.6%	3.3%	1.0%	1
	11 実験・実習がスムーズに進められるよう、材料や器具が十分準備されていましたか	4.2	42.5%	35.6%	18.9%	2.6%	0.5%	3
	12 課題・レポートの量は授業内容を理解する上で適切であったか	3.9	32.7%	34.8%	25.6%	5.7%	1.2%	13
	2)多かった 1)少なかった					97.4%	2.6%	19
	13 教員は効果的に学生の参加(質問、発言、自主学習、実験・実習)への取り組みを促しましたか	4.2	43.0%	33.1%	21.5%	1.7%	0.7%	2
	14 教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか	4.1	42.0%	33.7%	21.4%	1.8%	1.2%	0
	15 教員は熱意を持って授業していましたか	4.2	45.5%	33.7%	19.0%	0.8%	1.0%	1
	III	18 この授業の内容をよく理解できた	4.1	34.0%	41.1%	21.7%	2.7%	0.5%
19 この授業の内容に興味・関心を持った		4.2	41.9%	35.5%	19.8%	1.9%	1.0%	1
20 自分で調べ、考える姿勢が身についた		4.2	41.4%	35.4%	21.1%	1.5%	0.6%	1
21 この授業を通して新しい知識や考え方が習得できた		4.2	44.6%	37.2%	16.7%	1.0%	0.6%	2
総合評価		平均値	強く思う	やや思う	どちらとも思えない	あまり思わない	全く思わない	無効回答数
IV	22 この授業を受講して有意義であった	4.2	46.7%	33.1%	18.2%	1.2%	0.8%	6

各学科の授業評価アンケート結果は、玉川大学 FD 活動のホームページで見ることができ
る。(https://www.tamagawa.jp/university/introduction/outline/u-fd/

questionary/report_agr)

(3) 教職員を対象とした公開授業

① 概要(目的を含む)

教員の講義力・教育力向上を目指し、授業参観を実施した。今年度は秋学期の4科目
を対象とした。

② 到達目標

公開授業の実施意義を各教員が理解するとともに、教授方法などを参考とする。授業
内容や授業規模に対する設備施設活用を考える。

③ 活動内容

教員相互の授業参観を実施すべく、全学の専任および非常勤の教員に対して授業を公
開した。

④ 評価

授業参観への参加は、まったくなかった。教員相互の啓蒙的意識を高めることが必要
であり、実施に際しての周知、実施方法の検討が求められる。

4 昨年度(平成29年度)に提案された予定・課題の達成度について

農学部では今年度「ハラスメント防止研修会」「障がい者に対する合理的配慮についての研
修会」「メンタルケアを必要とする学生のための研修会」を実施した。参加率は全ての研修で

約 90%であった。ハラスメント防止研修は毎年実施している。これまでは教職員と学生間のアカデミックハラスメントやセクシャルハラスメントを中心に研修を行ってきたが、今年度は教職員間のハラスメントに焦点をあてた。年々ハラスメントに関する意識は向上している。

障がい者に対する合理的配慮の研修会は、発達障がいを含めた精神障がいの学生が増えているという現状に対応するために行った。こだわりが強かったり、思い込みが激しい学生への対応をどのようにすれば良いかという質問があったが、学生個々の特性であり無理に修正することは不可能で、学生ができる能力を活かして指導するしかないとのことであった。学生にとっても教員にとってもストレスにならない指導方法を見出し、学修を支援できることが必要だと感じたが、授業担当教員だけの対応は難しく、教職員間で十分に連絡を取り合い、教学部、学生センター、保健センター 健康院との連携の中で進められる仕組みが成熟することが望まれる。

メンタルケアを必要とする学生は顕在化しており対応が必要な中で、農学部ではここ数年研修を繰り返し行ってきた。成績不振や学生間のトラブル、大学外での私生活の問題など原因はさまざまあるが、不安、うつを発症してしまった学生に教員が直接対応できることは限られ、専門家によるケアや治療を必要とする。今回の研修では復学時の学生に対応する注意点を伺った。学生への接し方や話しかけ方にポイントがあることが分かった。復学の前に学生と面談をして、支援の方法を十分に話し合っておくことが大事であると分かった。

学生による授業評価アンケートは、春学期および秋学期の学期終了時に実施した。学生の授業外での学修時間が、講義科目において低かった。また受講学生数の違いによってアンケート評価にばらつきがあった。総合評価は全体的に良好であった。担当教員には授業評価アンケートの集計結果をチェックし、授業改善について記述した。授業資料の内容や量についての改善ポイントが記載してあった。多すぎるあるいは足りないと、授業によって異なっていた。また、授業の進行速度や、小テストの頻度についての記述もあり、授業改善を進めるための振り返りが行えた。

例年のこととなるが、授業参観への参加数は極めて低い。授業改善の一つの方法として、授業参観への参加は教授法を学ぶ良い機会である。授業参観に参加したことのメリットを学部全体として考え、授業改善の検討方法や同僚評価の仕組みを構築する必要がある。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

- ・ FD に関する各種研修会（学内、学外）への参加の啓蒙的活動
- ・ 基礎学力不足の学生の把握と分析
- ・ 障がいのある学生、メンタルケアを必要とする学生の適切な指導対応
- ・ 新カリキュラムの適切な運営と点検
- ・ 授業評価アンケートの授業への還元方法の検討
- ・ 教員相互の授業参観の組織的な取組
- ・ 大学院 FD 委員会との連携強化

§ 工学部

1 FD 活動への取組理念・目標

工学部全教員が Tamagawa Vision 2020 を共有し、「全人教育の下、人間力を備えたモノづくりの実践的技術者を育成する」との工学部の理念・目標に向けて、教育内容・教育環境の向上をはかることを従来通り継続している。

上記に従い、工学部の FD 活動は数年来継続的に実施されてきており、以下に記載する「FD 活動への取組理念・目標」は昨年度まで報告している内容と同等である。

平成 25 年度入学生に適用されたカリキュラム改定では、入学生の学力不足対応のため、1 年次には専門科目を入れずに基礎教育を 3 学科共通で用意した。同時に平成 25 年度入学生から 16 単位キャップ制および GPA による警告制度・卒業要件が適用された。さらに、平成 26 年度入学生に適用されたカリキュラムでは開講科目数が削減された。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設され学部 4 学科体制となり、平成 29 年度には情報通信工学科が新設され学部 5 学科体制（一部教員は学科併任）となった。

学科の新設やそれに伴うカリキュラム数の増加、また各年度に更新されたカリキュラム更新という複雑な状況下において、工学部全教員が学生の学修の現状を適切に理解することが工学部全体としての FD 活動への取組理念・目標である。さらに言えば、既に 4 年以上が経過した 16 単位キャップ制および GPA 警告制度における学生の学修状況の分析、その結果と課題の把握と共有、次期へ向けてより効果的で充実した指導の在り方の議論・検討等は、工学部の FD 活動への取組理念・目標の継続的再検討に必須である。これらを適切に議論・検討することは、工学部の過去と現在と未来において最重要課題である。この課題解決のための工学部の FD 活動は、「工学部 FD 研修会」、「授業評価検討会」、「授業評価アンケート」および各学科や各専門科目担当教員間で 1 年を通して頻繁に行われている様々な会議体等において恒常的になされている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

前述したように、昨年度まで報告している内容と大きな変更はない。

工学部 FD 活動の多くが ISO9001 教育クォリティマネジメントシステムの運用・継続によるものである。平成 26 年度からは、機械情報システム学科、ソフトウェアサイエンス学科、マネジメントサイエンス学科の工学部 3 学科で ISO9001 運用を実施することとなった。また、平成 27 年度にはエンジニアリングデザイン学科が新設されたことにより、ISO9001 運用は学部 4 学科へと拡張され、平成 28 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けた。さらに、平成 29 年度には情報通信工学科が新設されたことにより、ISO9001 運用は学部 5 学科へと拡張され、平成 29 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けた。

ISO9001 教育クォリティマネジメントシステム運用は平成 15 年度より継続されてきて、既に 15 年目となる。長年の ISO9001 教育クォリティマネジメントシステムの運用・継続により、工学部所属教員の意識も高まり、その FD 活動はほぼシステム化されている。各学科主任と教務担当を中心としてこのような自己点検がほぼ完全に周回してきたことは、

ISO9001 が滞りなく認証されたことにより明らかである。そこで今般、日本規格協会による ISO9001 審査・認証を一旦停止し、ISO9001 運用により培われた工学部独自の自己点検を実施することとなった。しかしながら、ISO9001 運用に依っていた工学部の FD 活動の組織構成と役割について、重要と思われるマネジメントシステムを残した上でそのまま継続することとしている。平成 29 年 10 月に全学科が ISO9001 認証継続を受けたことにより、その認証は平成 30 年 10 月まで有効であり、上記の自己点検は平成 30 年 10 月以降に開始されたこととなる。したがって、平成 30 年度においても、ISO9001 教育クォリティマネジメントシステムとその自己点検実施は運用・継続中である。

以上のように、工学部では全学科において ISO9001 運用とその自己点検実施の流れの中で FD 活動の多くが実施・継続されている。そこでは、学生による授業評価アンケート、教員による授業改善計画・実行・点検、授業参観、工学部 FD 研修会の実施などが、各学科会、各学科授業評価検討会、教務担当者会、工学部授業評価総合検討会、主任会等の組織構成によって相互に確認・補完し、運営されている。ISO9001 運用にかかる組織構成と役割は、工学部発行「教育クォリティマニュアル」において記述されていたが、そこに掲載されている組織図は以前より報告しているため、今年度は割愛する。

現状では、毎年のカリキュラム改定、16 単位キャップ制・GPA 警告制度への移行・新学科学生動向等、教育システム上見逃せない課題が多いため、工学部全専任教員参加による工学部 FD 研修会の年 2 回開催を平成 24 年度以来継続しており、このことが工学部の最重要の FD 活動となっている。

3 平成 30 年度の活動内容

平成 30 年度工学部 FD 活動計画にそって、その詳細について以下のように記述する。

(3-1) 工学部 FD 研修会

① 概要

工学部最重要 FD 活動の一つである。春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）にそれぞれ開催された工学部 FD 研修会のまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・工学研究科長・FD 委員において保管）の目次を図 1 および図 2 に示す。テーマと目的及び発表者等は図 1 および図 2 に記載のとおりである。春学期（第 1 回）・秋学期（第 2 回）の大きな違いは、学習状況分析結果報告が、春学期（第 1 回）は学部全体・各学科・数学/物理学であるが、秋学期（第 2 回）は学部全体・各学科・専門科目であり、後半の数学/物理学が専門科目になることである。

FD に関することであれば、発表担当になった教員の話す内容の設定は自由である。単に型にはまった発表では工学部としての将来の発展は見込めない。学生に創造性を課すように、各教員が自らの感じるところ、考えるところを創造的に自由に発表し、そこから活発な議論が生まれることが期待されている。

② 到達目標

工学部教員団が、全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようになること、教員

の自己省察に資する内容となること、そして、工学部としての将来の発展のための活発な議論が生まれること、である。

③ 活動内容

報告内容はまとめ冊子（工学部長・各学科主任・教務主任・学生主任・工学研究科長・FD 委員において保管）を参照されたい。ここでは各報告の概要について簡単に記述する。

2018年度(平成30年度)第2回 工学部FD研修会

【解説/まとめ付】

日時：平成31年3月14日(木)9時00分～9時56分
場所：8号館 第2会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有
目的：① 1年生においてはGPA・単位取得率による成績の過去の比較
② 2年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去の比較
③ 以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を踏みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること
内容：① 学習状況分析結果報告(学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目)
② 授業評価アンケート結果報告
到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようにすること。

プログラム

1. 本年度秋学期学習状況分析結果報告
 - (1) 機械情報工学/情報通信工学科 教務担当 宮田 成紀
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 大竹 敬
 - (3) マネジメントサイエンス学科 教務担当 三木 秀夫
 - (4) エンジニアリングデザイン学科 教務担当 黒田 深
 - (5) 学部全体の状況 教務主任 山崎 浩一
2. 最近の専門科目受講者動向
 - (6) 機械情報工学/情報通信工学科「テ-クニ-入門」 大森 隆司
 - (7) ソフトウェアサイエンス学科「工学基礎I」 樋田 栄揮
 - (8) マネジメントサイエンス学科「ビジネスコング」 小酒井正和
 - (9) エンジニアリングデザイン学科「海外研修」 春日 幸生
3. 授業評価アンケートの結果から
 - FD 委員 黒田 深

○ 解説/まとめ (各報告の最終頁)

以上

図1 平成30年度春学期開催工学部FD研修会プログラム

2018年度(平成30年度)第1回 工学部FD研修会

【解説/まとめ付】

日時：平成30年9月20日(木)9時00分～9時55分
場所：8号館 第2会議室

テーマ：GPA・単位取得率による成績動向の把握による教員の指導方針共有
目的：① 1年生においてはGPA・単位取得率による成績の過去の比較
② 2年生以上においては主たる専門科目の成績動向の過去の比較
③ 以上により、教員団が工学部生の成績に対し従来との比較を踏みつつ、現状に関する共通の認識を持って教科指導の充実をはかること
内容：① 学習状況分析結果報告(学部・各学科・数学/物理学・各学科専門科目)
② 授業評価アンケート結果報告
到達目標：全学科の学生成績および学生への対応方針を共有し、工学部各学科の今後の組織的展開と、学生への教科指導に効果的に反映できるようにすること。

プログラム

1. 本年度春学期学習状況分析結果報告
 - (1) 機械情報工学/情報通信工学科 教務担当 宮田 成紀
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科 教務担当 大竹 敬
 - (3) マネジメントサイエンス学科 学科主任 佐藤 健治
 - (4) エンジニアリングデザイン学科 教務担当 黒田 深
 - (5) 数学系 マネジメントサイエンス学科 成川 康男
 - (6) 物理学系 エンジニアリングデザイン学科 水野 貴敬
 - (7) 学部全体の状況 教務主任 山崎 浩一
2. 授業評価アンケートの結果から
 - FD 委員 黒田 深

○ 解説/まとめ (各報告の最終頁付記)

以上

図2 平成30年度秋学期開催工学部FD研修会プログラム

第1回

1. 本年度春学期学修状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）
 - (1) 機械情報システム学科/情報通信工学科：平成 29/30 年度 1 年生成績比較・警告者数比較・最近 5 年間の傾向
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科：平成 27～30 年度入学生春学期 GPA 比較・数学プレースメントテストと GPA の関係・平均 GPA と平均単位取得率・警告者数の推移
 - (3) マネジメントサイエンス学科：平成 24～30 年度入学生初期試験と一年次春 GPA と警告者・平成 26～30 年度入学生初期試験と 1 年次春 GPA の相関
 - (4) エンジニアリングデザイン学科：平成 27/28/29/30 年度 1 年生春 GPA 比較・数学初期試験比較・平成 29 年度入学生 GPA 推移・平成 30 年度 4 年生 3 年生 2 年生卒業見込・平成 29/30 年度 1 年生春数学物理初期試験と警告者数等
 - (5) 数学研究室：新入生数学確認テストの動向と事例報告
 - (6) 物理研究室：平成 30 年度新入生春学期物理学学力確認テストの結果・学科別得点分布・平均点と高校物理の履修率の推移・初期試験の物理 vs 数学の得点分布と物理学入門の結果
 - (7) 学部全体の状況：教務主任：警告者の経過動向と今後の指導方針 — 学部全体の状況 —
2. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 6）

第2回

1. 本年度秋学期学修状況分析結果報告（GPA・単位取得率・経年比較 等）
 - (1) 機械情報システム学科/情報通信工学科：平成 29・30 年度入学生の 1 年生秋学期における当該学期 GPA・累積 GPA・修得単位数・単位修得率の比較
 - (2) ソフトウェアサイエンス学科：平成 30 年度秋学期 入学生の分析と警告者の動向、秋学期 GPA の比較（平成 27～30 年度）、春・秋学期 GPA の比較（平成 29 年度）、平均 GPA と平均単位取得率、警告者数の推移
 - (3) マネジメントサイエンス学科：平成 30 年度秋学期における成績、平成 28～30 年度 1 年生秋学期 GPA 比較、平成 28～30 年度 1 年生秋学期累積 GPA 比較、1 年生秋学期累積 GPA の教職学生と教職以外学生の比較、平成 27 年度入学生各種データ
 - (4) エンジニアリングデザイン学科：平成 27/28/29/30 年度 1 年生春秋 GPA 比較、平成 27 年度入学～平成 30 年度卒業 1 期生 総括、6 科修得 GPA vs. 初期試験/警告数/入試形態/累積 GPA/卒業研究評価
 - (5) 学部全体の状況：教務主任：警告者の経過動向と今後の指導方針 — 学部全体の状況 —、4 セメスター終了時の警告受理状況、2 セメスター終了時の累積 GPA、4 セメスター終了時の累積 GPA 分布、「警告」の条件変更の影響、4 セメスター終了時の累積 GPA 分布 — 警告受理回数別 —

2. 最近の専門科目受講者動向

- (6) 機械情報システム学科/情報通信工学科：「データサイエンス入門」の授業について、カリキュラムツリーの中での位置づけ、確率統計学 I とデータサイエンス入門の成績分布と人数、二つの科目の中間テストと最終成績の関係
- (7) ソフトウェアサイエンス学科：「工学基礎 I」の授業について、授業概要と主な授業内容、高等学校数学学習指導要領の変遷、講義の流れ、復習テストの例と授業における留意点、授業の振り返り、受講者数、期末試験成績および今後の課題
- (8) マネジメントサイエンス学科：「ビジネスコンテンツ」の授業について、授業のねらい、設置された背景、10年史、プレゼンテーション大会、現状の課題、等
- (9) エンジニアリングデザイン学科：「海外研修」の授業について、一海外での活躍を期して一、「海外研修」に関連付けられる科目、全体スケジュール、現地(台湾)でのスケジュール、参加メンバーならびに研修状況、専任教員と学生による指導、まとめと今後の課題、等

3. 授業評価アンケート結果：授業評価アンケートの全体結果報告（後述、図 7）

④ 評価

昨年度までの報告と同様に、各学科の総合的学修状況分析結果、専門科目学修状況分析結果、およびそれらの今後の対応方針を共有し、工学部のあり方や指導に効果的に反映できたと考えられる。工学部では FD 研修会終了後に「発表資料+発表者による解説」から成る記録冊子を作成しているが、詳細なデータは当該冊子に記載されており、必要に応じて学部内にて主任を経由して閲覧可能となっている。工学部 FD 研修会は教授会の開始 1 時間前から開催されるため、教授会メンバーはほぼ全員が出席しており、警告を受けた学生への指導対応・対策が提示され、認識・共有できた。

特に、教務主任による全体総括では、以下のことが春学期・秋学期それぞれ報告された。

・春学期：

平成 26 年度から平成 30 年度までの春semesterで警告を受けた 1 年生の人数の推移によると、平成 28 年度の警告者が極端に少ないが、それを除くと警告制度の変更の前後で大きな変化は見られない。

平成 29 年度入学生のうち連続 3 回警告を受けた 10 名の学生の各 semester における GPA と修得単位数によると、累積 GPA を大幅に伸ばしている学生もいるが、全体的に GPA の改善に苦労が見られる。また F 評価の再履修の効果があり、例えば、累積取得単位数が 20 単位の場合、4 単位分を再履修した場合には再履修しない場合に比べ約 2 割 GPA が高くなる。

3 semester に 1 回目および 3 回目の警告を受けた学生数の平成 25 年度から平成 30 年度までの推移によると、3 semester よりほとんどが専門科目となるため、多くの学生は 3 semester で GPA を大幅に下げる。その結果、当該学期 GPA が警告判定基準であった平成 29 年度以前では、多くの学生が初回の警告を受けている。一方、累積 GPA となった平成 30 年度では、1、2 semester で高い GPA を取得していた学生はその恩恵

のため3セメスターで低いGPAをとっても救われている。3回連続警告受理者数は警告制度の変更前後で大きな変化は見受けられない。

警告3回退学留保制度により、平成30年度の4年生で3回目の警告を受けた学生は例年の倍以上であるが、退学処分となったのは半分以下である。制度変更の効果は大きいと考えられる。

入学後の4年間で卒業できる学生の割合の平成28年から平成30年までの推移によると、在学生数比は大きく変化していないが、入学生数比は大きく改善している。これは在籍率の増加の効果大きい。

・秋学期：

平成27年度から平成30年度入学生について新制度となってからの特徴として以下の点が明らかになった。

- ・2セメスター終了時の警告受理者は平成27年度から順に76名、59名、60名、73名であり、1、2セメスターでの警告受理者数には大きな違いは見られない。
- ・3セメスターでの警告受理者が大幅に減少した。
- ・4セメスター終了時までの警告受理者が減った。
- ・4セメスター終了時までの警告制度による退学処分者が大幅に減った。

平成28年度から平成30年度入学生の2セメスター終了時の累積GPAが非常に低い学生も在籍しており、警告制度に依らず、概ね同様の分布をしている。累積GPAが2.0未満の学生数にも大きな違いはない。

平成27年度から平成29年度入学生の4セメスター終了時の累積GPAが1を下回る学生は一人もいない。1年次でGPAが低い学生は退学、あるいは評価C、F科目の再履修によるGPAの改善の結果である。平成29年度入学生で4セメスター終了時まで在籍している学生のうち、1セメスター終了時のGPAが2未満の学生は24名であった。このうち、1.5を下回っていた学生は1名(0.98)であり、その学生は再履修でGPAを回復している。

平成29年度入学生に旧制度の条件を適用した場合、新制度では4セメスター終了時において警告制度による退学処分者は2名であるが、旧制度が適用された場合では14名が退学処分になることがわかる。今後、これらの学生の学修状況を注視する必要がある。

平成29年度入学生を対象として、警告回数別に4セメスター終了時の累積GPA分布によると、各警告受理回数の累積GPA2未満の学生の様子が把握できる。

⑤ 予算措置

工学部FD予算に計上し、項目は「資料印刷費等」であった。

(3-2) 社会発信手法研修会

① 概要(目的を含む)

研究・教育を広報に繋げること、高校生の志願者分析と広報に関して、私大工学部における優秀人材確保(アドミッション)の戦略を共有することが目的である。

② 到達目標

上記内容に関し、本学工学部の今後の人材確保のあり方について理解を深めることである。

③ 活動内容

平成 30 年 10 月 25 日（木）17:30～18:30 に PR クエスト社株式会社 菊池 泰功 氏により講演題目「理工系の志願者を集めるために」として実施された。教職員（含入試広報等職員）40 名が参加した。

④ 評価

本学工学部が、高校生にとって他学と比して魅力的な存在となるための今後の在り方に関する教職員の意識が向上したと考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「特別講義料・特別講義料交通費等」であった。

(3-3-1) 知的財産権 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

本学と山口大学との連携による、権利尊重や人権教育、狭くは著作権等の取扱いや研究倫理、また特許や意匠等における創造性の涵養が目的である。

② 到達目標

上記内容に関し、知的財産創造性の重要性を理解し、教員と学生ともに他権利抵触を回避する認識を持つことである。

③ 活動内容

平成 30 年 6 月 28 日（木）17:30～18:30 に山口大学 大学研究推進機構知的財産センター副センター長・教授 木村 友久 氏により「1. 著作権法改正情報 2. 著作権法と研究倫理－判決文から考える－」として実施された。教員 40 名が参加した。

④ 評価

知的財産取扱いルール知識、著作権等の取扱、産業財産権の重要性、等に関する意識が向上したと考えられる。特に最近、著作権法は改正が多く、大学は他者の著作物を扱う場合が多いため、注意を要する事項を理解することは重要である。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、講義料・交通費等は山口大学負担となるため、実際に使用した項目は「昼食代・謝礼」であった。

(3-3-2) 著作権と知財創造教育テキストに関する大学 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

本学大学 FD としての開催であるが、工学部教員も出席し、工学部 FD 担当が実施に関わったため、ここに記載する。

大学 FD としての著作権に関する最近のトピックと、初等中等教育において使用を予想して作成されているテキストの実証検証が主な内容である。著作権に関する最近のトピックは山口大学教授 木村 友久 氏により講演が実施され、またテキスト検証は内閣府

知的財産戦略本部の事業として角川アスキー総合研究所により司会進行された。本事業については、内閣府知的財産戦略本部 HP に詳しい。

内閣府知的財産戦略本部 HP : <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/>

② 到達目標

著作権に関する最近のトピックを理解し、初等中等教育でのテキストの使用に有効となるコメントを発することである。

③ 活動内容

平成 31 年 2 月 12 日（火）15:30～17:40 に山口大学 大学研究推進機構知的財産センター副センター長・教授 木村 友久 氏により「1)著作権法 35 条改正：現状の情報・2)入試問題作成に係る一般的ガイドライン」として前半が実施され、後半は角川アスキー総合研究所司会進行により、「小中高等学校において知財創造教育を実施できる人材の養成に必要なテキストに関する調査研究」の実証検証として実施された。本学園および大学教員 33 名が参加し、外部からの参加者は約 20 名であった。

④ 評価

著作権法 35 条改正は、他者の著作物を異時公衆送信する場合にかかる補償金についてであるが、使用していると思われる教員も多く、大学として注意を要する。入試問題作成に係る著作権としての一般的ガイドラインは、特に同一性保持権に関することが重要で、一切の改変ができないことを認識すべきとのことであった。入試に関わらず、いわゆる定期試験でも同等であり、大学として注意を要する。「小中高等学校において知財創造教育を実施できる人材の養成に必要なテキストに関する調査研究」の実証検証には、主に教育学部教員と学園教員からの発言があり、我が国の創造性教育に関与できたことは、十分評価に値することであると思われる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を特に計上しておらず、実際の使用もない。

(3-4) 授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会

① 概要（目的を含む）

昨年度報告と同等である。後述する各授業の授業評価アンケート結果と、教員が授業ごとに作成している「授業実施チェックシート」（ISO9001 運用上の教育クオリティ記録・様式 No.7301-05・図 3）と授業に関する評価事項を集計した結果表（ある学科の事例を図 4 に示す）等を基に、学科ごとに「授業評価検討会」を実施する。ここでは主に授業上の不具合を抽出し、次期への課題を考察する。

セメスター末の教務担当者会では、学科ごとの「授業評価検討会」においてなされた報告を各学科教務担当が持ち寄り、学部として「授業評価総合検討会」を実施することが ISO9001 運用上定められている。「授業評価総合検討会」は「工学部授業評価総合検討会」と同義である。ここでは各学科からの報告を基に、各学科教務担当が総合的に検討を加え、その結果を学部としての次期への授業改善の実施施策として各学科へフィードバックされ、各学科における改善の実施に寄与させる。

② 到達目標

授業評価と授業実施チェックシートを基にした授業改善の継続的な検討が目標である。
 学科の人材育成目標にかかる授業カリキュラムの継続的な検討へと常に移行できる体制の維持も二つ目の目標である。

③ 活動内容

工学部授業評価総合検討会実施日：春学期 平成 30 年 9 月 20 日
 秋学期 平成 31 年 3 月 22 日

④ 評価

学生による授業評価アンケート・教員による授業チェックシート・ISO9001 運用上の科目別教育クオリティ目標一覧表 評価（様式 No.7301-04）・各学科による授業評価検討会によって、授業改善サイクルが定着している。

<様式7301-05>

年度 授業実施チェックシート

チェック期間： 年 月 日～ 年 月 日

科目名	開設セメスター	() S	曜日・時限	授業実施結果(自己評価)		科目担当者名	印
				シラバスに基づいた授業	授業中の重大不具合 (設備故障・苦情など)		
授業テーマ	授業実施日						予定未達・変更及び不具合有りのときの内容と対応(処置)
第1回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第2回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第3回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第4回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第5回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第6回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第7回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第8回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第9回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第10回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第11回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第12回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第13回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第14回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：
第15回	予定 実績	予定どおり実施	未 達	事前に 変更した	有り 無し		内容： 対応：

図3 「授業実施チェックシート」ISO9001 運用上の教育クオリティ記録・様式 No.7301-05

平成 30 年度春semester工学部授業評価総合検討会議事録

日時：平成 30 年 9 月 20 日，16:00～16:45

場所：大学 8 号館第一会議室

出席者：，山崎（教務主任），宮田（情報通信工学科教務担当），大竹（ソフトウェアサイエンス学科教務担当），三木（マネジメントサイエンス学科教務担当），黒田（エンジニアリングデザイン学科教務担当兼工学部 FD 担当）

議事録作成：山崎

資料：2018 年度春学期 授業評価検討会議事録（IT，IMS，SS，MS，ED）

2018 年度春学期 科目別教育クオリティ目標一覧表評価（SS）

2018 年度春学期 授業評価集計結果（IT，IMS，SS，MS，ED）

※ IT：情報通信工学科，IMS：機械情報システム学科，

SS：ソフトウェアサイエンス学科，MS：マネジメントサイエンス学科，

ED：エンジニアリングデザイン学科

各科で実施した授業評価検討会における検討結果に基づき，本semesterにおける各科の取組みについて報告が行われた。全学科，不満足授業は無かったが，MS より，2 件の改善必要科目が報告された。

各科からの報告内容を以下に記す。

- ・IT，IMS：IT，IMS で，B 以上が 60% 未満の科目がそれぞれ 1 科目および 2 科目あったが，授業理解度は全科目 3 以上で，概ね，良好であった。
- ・SS：3 クラス開講のプログラミング I では，2 クラスで B 評価以上の学生が 60% を下回った。レベル別クラスのこの科目では，そのうちの下位の 2 クラスの成績が悪かった。学科の基幹科目のため，今後も厳しく取り組む。アルゴリズムとデータ構造では，B 以上が 60% を下回るとともに理解度が 3 未満であった。プログラミング系科目の中でも難易度の高い本科目を 3 semester という早い時期に設置していることが一因であり，次年度より 1 semester 後ろに移動する対応をしている。
- ・MS：データサイエンス基礎演習で，学生から苦情があった。また，今期閉講となったファイナンスでは，シラバスの内容が難しいことがその一因であることが指摘された。以上の 2 科目については改善必要科目と判定し，次年度に向けて取り組みを行う。
- ・ED：B 以上 60% 以上の条件を満たさない科目が 8 科目ある。特に低い 2 科目のうち，物理学 I は，学生が努力しないことが根本的な原因であり，物理・化学実験では，レポートを出せないため，ぎりぎりでも C になっている学生が少なからずいることが原因である。

図 5 平成 30 年度春semester工学部授業評価総合検討会議事録

(3-5) 研究授業（参観授業）

① 概要（目的を含む）

昨年度報告と同等である。春学期と秋学期に各学科 1 名ずつの教員が各自の担当科目に関して参観授業を実施する。担当授業は所属学科専門科目に限る必要はなく、全学 US 科目・他学科科目でも問題としない。春学期は工学部教員に公開し、秋学期は全学教職員に公開している。各学科教員数は 8～9 名であるため、4～5 年で一巡する。本項目の実施目的は、学生による授業評価アンケートとは別の視点で、参観者（各学科教員または全学教職員）からの評価を授業改善につなげることである。

② 到達目標

参観者（工学部教員または全学教職員）からの評価を基にした授業改善の継続的な検討が目標である。

③ 活動内容

今年度の実施授業について表 1 に示す。

また、参観者が工学部教員である場合、「工学部教員授業参観者チェックシート」（昨年度 FD 活動報告書に提示）を参観しつつ記入した。さらにその評価を受けて、「研究授業（科目担当者票）」（昨年度 FD 活動報告書に提示）を参観授業実施者が記入し FD 委員に提出する。「工学部教員授業参観者チェックシート」は授業担当者が保管し、「研究授業（科目担当者票）」は授業担当者と FD 委員が保管している。

④ 評価

参観授業実施者が記入し FD 委員に提出する「研究授業（科目担当者票）」による「今後の対処計画」について表 2 に示す。これらの授業改善が実施されており、その効果により数年で授業の質が大きく向上すると考えられる。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上したが、実際の使用はない。

(3-6) ISO9001 教育クオリティマネジメントシステム運用と審査停止

① 概要（目的を含む）

平成 30 年度工学部 FD 活動計画に記載はないが簡単に記述する。ISO9001 による教育クオリティマネジメントシステム審査は平成 29 年度 10 月まで実施され、その審査による認証は平成 30 年度 10 月まで有効であった。その後、平成 30 年度 10 月の審査要請はせず、ISO9001 認証は、平成 30 年度 10 月に無効となった。しかし、前述したように、長年の ISO9001 教育クオリティマネジメントシステムの運用・継続により、工学部所属教員の意識も高まり、その FD 活動はほぼシステム化されている。各学科主任と教務担当を中心としてこのような自己点検がほぼ完全に周回してきたことは、ISO9001 が滞りなく認証されたことにより明らかである。そこで、ISO9001 運用に依っていた工学部の FD 活動の組織構成と役割は重要と思われるマネジメントシステムを残した上でそのまま継続することとし、平成 30 年度においても自己点検実施は運用・継続中である。

② 到達目標

PDCA サイクルが循環していることが目標である。

表 1 平成 30 年度工学部研究授業（参観授業）実施概要

	対象科目	学科	担当教員	開催日時限	教室
春 学 期	コミュニケーション 科学の世界	機械情報システム学科 情報通信工学科	相原 威	5月28日(月) 1・2時限	⑧号館 220
	プログラミング I	ソフトウェアサイエンス学科	佐藤 雅俊	5月8日(月) 1・8時限	⑧号館 322
	幾何学 II	マネジメントサイエンス学科	佐藤 健治	5月11日(金) 7・8時限	⑧号館 322
	機構学	エンジニアリングデザイン学科	福田 靖	7月9日(月) 7・8時限	⑧号館 220
	プログラミング I	機械情報システム学科 情報通信工学科	早川 博章	12月13日(木) 3・4時限	⑧号館 321
	回路基礎	ソフトウェアサイエンス学科	山崎 徳和	10月15日(月) 7・8時限	⑧号館 322
秋 学 期	微分方程式 II	マネジメントサイエンス学科	成川 康男	11月19日(月) 1・2時限	⑧号館 420
	科学入門	エンジニアリングデザイン学科	黒田 潔	11月7日(水) 3・4時限	⑧号館 111

表 2 参観授業実施者が記述した今後の対処計画

板書の際に体が重ならないよう気を付ける。
フォントサイズ 20pt 以上で作成しているので基本的には見にくい学生には前に座るように指導してきたが、それでも要望があればサイズを大きくする。
3次元の画像についてはご指摘のとおりであると思う、自分で図を描くことによって理解できるという考えとプロジェクタなどの機器の操作が苦手であるという 2つの理由からほとんど黒板かホワイトボード（とプリント）のみを用いて講義を行ってきたが、3次元の画像をいろいろな角度から見る事ができれば理解は深まるだろう（web で見つけた 3次元の動画を紹介し見ることを推奨しているがそれほどたくさんの学生が見ているとは思えない）。そのような画像の作成にも興味を持っているので勉強して作成し講義で活用したい。
のどの調子がだんだん治ってきました。あと 1年ほどで完治すると思います（のどの調子により咳こむ為、無意識に語尾を小さくしてしまうので直そうと思います）。
学生にあてて緊張感を持たせるように心掛けたいと思います。
説明用スライドは同じ関連のものは 1枚に収めるように工夫する。
学生が自ら考えて理解を深めるための”Thinking Time”を授業中に設定する。
添字の大きさも含め、見やすいスライド作成に努める。
スライドを見やすくする（power point で画像にして拡大）。
アイコンタクトをとるようにする（板書で前を向くよう心がける）。
受講生の数については同時期に開講しているプログラム I の授業(担当：相原先生)と同じ時間に開講することで、学生数が一方に偏らないようにすることを検討中である。

③ 活動内容

今年度は平成 30 年 10 月までの有効な認証に引き続き、それ以降は各種会議体活動等で自己点検実施は運用・継続中である。

④ 評価

外部審査による認証は終了したが、教授会・主任会・学科会・教務担当者会等の活動により、自己点検実施は有効に運用・継続中である。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上せず、実際の使用もない。

(3-7) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

昨年度まで報告しているように、工学部では授業内容・方法・スキルの向上等の授業改善を具体化することを目的として、平成 12 年度秋学期より継続して学生による「授業評価アンケート」を春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施している。

② 到達目標

工学部各学科開講科目の全科目について担当教員の専任・非常勤の区別なく実施し、継続的な授業改善およびカリキュラム改善の検討に役立てる。学科および学部の授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会における評価検討を通じた授業改善、カリキュラムの変更・改定に役立てる。

③ 活動内容

平成 24 年度以来、工学部学生のみを対象として設置された US 科目授業についても授業評価アンケート実施対象として組み入れており、平成 30 年度についても例年通りの方法で春学期と秋学期の定期試験前の授業において実施した。授業評価アンケート用紙は昨年度報告と同一である。

集計結果は科目ごとのデータおよび全体集計データとともに専任・非常勤の区別なく科目担当者に届けられた。集計結果は、科目担当者が作成した「授業実施チェックシート」と併せて、科目ごとおよび学科ごとに次期の授業に反映されるよう、PDCA を実行する努力を継続中である。学外向けには総括した内容を大学 HP で公開し、学内向けには各科目の詳細な内容を【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 36】および【玉川大学 工学部「学生による授業評価」報告書 37】として大学 8 号館玄関ロビー等で閲覧公開している。

春学期の実施は 173 科目で、参加学生数は延べ人数で 6,000 名、秋学期の実施は 146 科目で、参加学生数は延べ人数 4,123 名であった。

④ 評価

過去 3 年間の授業評価アンケートの参加状況について、春学期については図 6、秋学期については図 7 に示す。アンケート集計後、用紙そのものを科目担当者に返却し、コメント欄を含めて授業改善に役立ててもらっている。

・工学部 FD 研修会記録冊子「発表資料+発表者による解説」に記載された春学期授業

評価アンケート（図 6）の主な評価は以下のとおりである。

項目「1.」より、各学科専任教員は全員が参加し、非常勤講師に関しては、前年を6%下回り88%の参加率であるが、十分な数値と考えている。

項目「2. 3. 4.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はないが、今年度も一部科目が評価5点中3点以下となった。若干問題である。

項目「5.」より、質問項目ごとの変化に関しても大きな変化はない。一方、これも例年通り、評価4点弱程度は「ややそう思う」を意味し、さらなる向上が望まれる。ただし、卒研設備の満足度はすべての項目の中で常に評価が高い。卒研の重要性が伺える。

項目「6.」より、今回は2.71点で例年通りであるが、向上させる必要がある。

項目「7.」より、参加科目数について過去3年で大きな変化はない。

- ・工学部 FD 研修会記録冊子「発表資料+発表者による解説」に記載された秋学期授業評価アンケート（図 7）の評価は以下のとおりである。

項目「1.」より、各学科専任教員は全員が参加し、非常勤講師に関しては、88%の参加率である。これは十分な数値と考えている。

項目「2. 3. 4.」より、各質問項目の総合平均値も例年と大きな変化はないが、今年度も一部科目が評価5点中3点以下となった。是正すべき問題であると考えられる。

項目「5.」より、質問項目ごとの変化に関しても大きな変化はない。一方、これも例年通り、評価4点弱程度は「ややそう思う」を意味し、さらなる向上が望まれる。ただし、卒研設備の満足度はすべての項目の中で常に評価が高く、卒研の重要性が伺える。また指導書が例年に比べ充実したようである。

項目「6.」より、例年と大きな変化はない。

項目「7.」より、参加科目数について過去3年で大きな変化はない。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算を計上し、項目は「学生による授業評価アンケート調査関係等（マークシート印刷費・分析費・資料印刷費等）」であった。

(3-8) 学外セミナー・現況調査等への教員派遣

① 概要（目的を含む）

現状における学生教育に関する課題、あるいは今後の教務上の改正にかかわる課題に関する知見を得るため、学外のシンポジウムや研修会に参加して、その内容をFD活動に活用する。

② 到達目標

参加研修等の内容を、本学工学部の学生学修指導に効果的に活用できるよう、その方策を検討することである。

③ 活動内容

今年度は都合がつかず、教員派遣を断念した。

④ 評価

今年度は都合がつかず、教員派遣を断念したため、評価不可となった。

⑤ 予算措置

工学部 FD 予算に計上したが、今年度は都合がつかず、執行していない。

平成30年度 春 semester 学生による授業評価 集計結果

工学部授業評価検討会

1. 参加状況

教員所属学科	参加科目数					参加教員数						
	H27年秋	H28年春	H29年秋	H30年春	H31年秋	H27年秋	H28年春	H29年秋	H30年春	H31年秋		
情報通信工学科	-	-	24	92%	20	100%	32	94%	-	-	9	100%
情報システム工学科	31	100%	25	96%	22	100%	2	100%	9	100%	8	100%
ソフトウェアエンジニアリング工学科	30	97%	32	100%	22	96%	22	100%	10	100%	8	100%
ネットワークエンジニアリング工学科	24	96%	27	100%	28	100%	29	97%	25	93%	9	100%
システムエンジニアリング工学科	18	95%	25	97%	20	100%	23	97%	25	100%	8	100%
その他学科・非常勤	31	78%	44	81%	32	80%	28	84%	21	86%	19	83%
合計	134	92%	139	93%	138	94%	140	95%	172	95%	63	94%

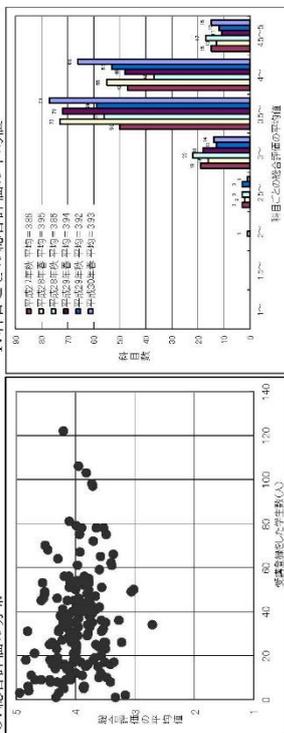
2. 各質問項目の平均

開講学科	H29年秋 参加科目数			H30年春 参加科目数			講義 実験について	講義 説明	講義 理解	講義 興味	講義 自習	講義 意欲	科目 平均
	高勤	非常勤	非高勤	高勤	非常勤	非高勤							
U.S. 工学部共通	-	-	2	67%	-	2	100%	-	-	-	-	-	-
工学部共通	-	-	6	100%	-	7	100%	1	100%	1	100%	3	69%
情報通信工学科	9	100%	-	-	2	100%	12	89%	5	100%	-	8	100%
情報システム工学科	10	100%	15	100%	-	8	100%	17	100%	-	-	8	100%
ソフトウェアエンジニアリング工学科	20	100%	6	100%	6	100%	25	100%	6	100%	1	100%	10
ネットワークエンジニアリング工学科	18	95%	4	80%	-	5	100%	19	100%	6	100%	3	75%
システムエンジニアリング工学科	22	100%	1	100%	-	1	100%	18	100%	4	100%	2	100%
合計	75	96%	34	94%	-	21	85%	79	96%	45	100%	5	71%

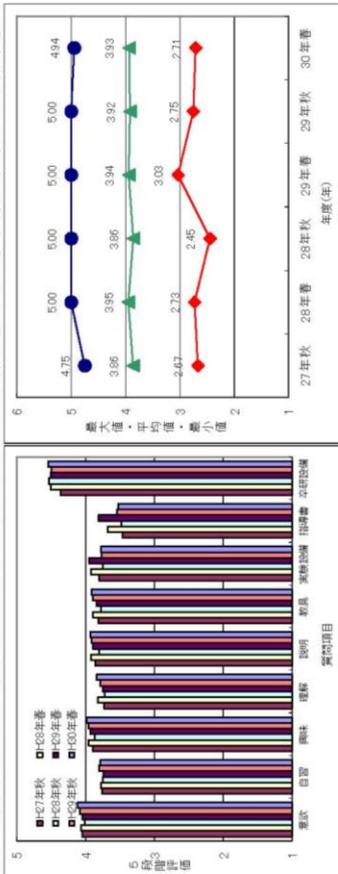
3. 総合評価の分布



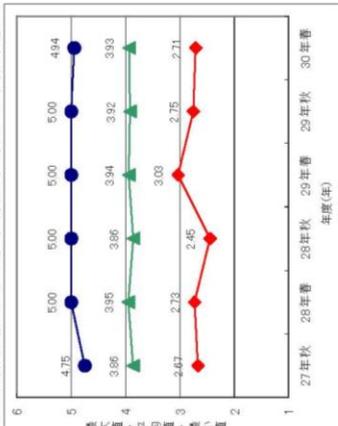
4. 科目ごとの総合評価の平均値



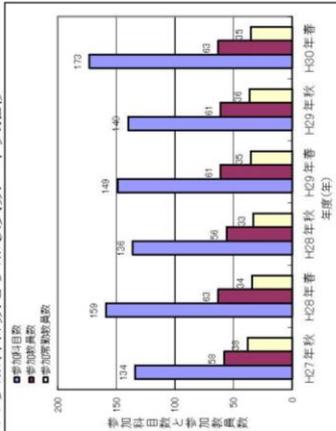
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

学生の取り組み
 1 授業には意欲的に取り組むかと思えますか(意欲)
 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)

科目の内容
 3 授業内容に興味は持てましたか(興味)
 4 授業内容は理解できましたか(理解)
 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)

評価方法
 5 : 強く思う(非常に良い)
 4 : やや思う(良い)
 3 : どちらとも言えない(普通)
 2 : あまり思う(あまり良くない)
 1 : 全く思う(良くない)

講義・演習

- A 講義・演習
- B 教員(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教員)
- C 実験科目
- D 実験設備は整っていましたか(実験設備)
- E 指導書は分かりやすかったですか(指導書)
- F 卒業研究
- G 研究設備は整っていましたか(卒研設備)

図6 平成30年度春学期学生による授業評価アンケート集計結果

平成30年度秋 セメスタ 学生による授業評価 集計結果

工学部授業評価検討会

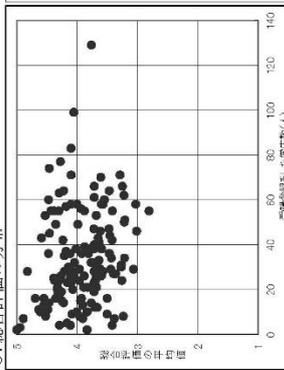
教員所属学科	参加科目数				参加教員数			
	H28年春	H28年秋	H29年春	H29年秋	H30年春	H30年秋	H30年春	H30年秋
情報通信工学科	24	20	33	19	9	8	10	9
機械情報システム学科	25	9	10	2	1	1	1	1
ソフトウェアエンジニアリング学科	33	10	21	29	8	10	10	8
マネジメントシステム学科	27	28	25	32	8	10	8	10
エンジニアリングマネジメント学科	28	21	33	28	10	10	10	9
その他学部・非常勤	44	32	49	49	28	25	25	25
合計	159	126	149	140	61	61	61	58

開講学科	H30年春		H30年秋		参加科目数	
	常勤	非常勤	常勤	非常勤	常勤	非常勤
U.S.工学部共通	-	-	2	1	2	1
工学部共通	12	5	10	2	10	2
情報通信工学科	2	8	2	6	2	6
機械情報システム学科	28	1	25	2	25	2
ソフトウェアエンジニアリング学科	19	1	3	8	19	8
マネジメントシステム学科	18	2	12	2	18	2
エンジニアリングマネジメント学科	79	45	44	93	22	92
合計	138	62	116	112	116	112

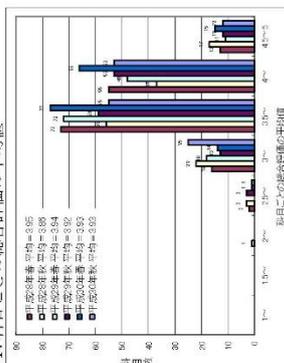
2. 各質問項目の平均

質問	学生について	教員について	講義 実験について	科目
平均	4.03	3.90	3.77	3.86
標準偏差	0.89	1.02	0.99	1.01

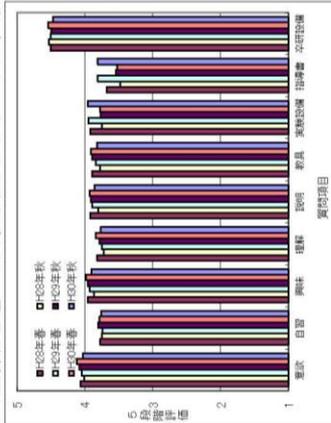
3. 総合評価の分布



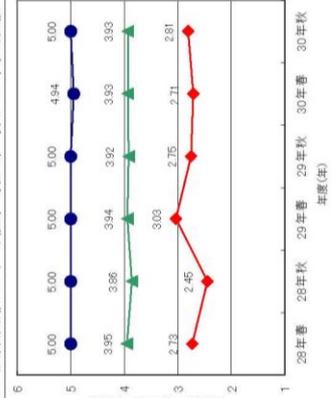
4. 科目ごとの総合評価の平均値



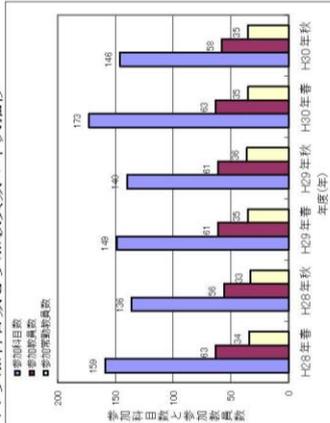
5. 全科目を通して回収されたアンケートの平均



6. 授業評価の平均値、最大、最小の年次推移



7. 参加科目数と参加教員数の年次推移



8. 質問項目と評価方法

- 学生の取り組み
- 1 授業には意欲的に取り組んだと思いますか(意欲)
 - 2 授業に向けて予習・復習はしましたか(自習)
- 科目の内容
- 3 授業内容に興味を持ちましたか(興味)
 - 4 授業内容は理解できたと思いますか(理解)
 - 5 教員の説明(話し方など)は分かりやすかったですか(説明)
- 指導方法
- A 講義・演習
 - B 教員(OHPなど)・板書は見やすかったですか(教員)
 - C 実験設備は整っていましたか(実験設備)
 - D 指導書は分かりやすかったですか(指導書)
 - E 卒業研究
 - F 卒業研究設備は整っていましたか(卒研設備)

評価方法
5: 強くそう思う(非常に良い)
4: ややそう思う(良い)
3: どちらとも言えない(普通)
2: あまりそう思わない(あまり良くない)
1: 全くそう思わない(良くない)

図7 平成30年度秋学期学生による授業評価アンケート集計結果

4 昨年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

（1）Tamagawa Vision 2020 の実現へ向けた課題

これまで通り 16 単位キャップ制、および GPA による警告制度・進捗チェック・卒業要件の下、対応する改定カリキュラムにおける、指導上の問題点の認識や結果の評価を継続し、効果的な改善を継続する、とした。

「3 平成 30 年度の活動内容」で記した通り、改善は継続的に実施され問題点も循環的に発見されているが、その実施自体が課題であり、これは達成されている。

（2）現状における課題

昨年度報告では、基本的に、入学生の学力不足対応の充実化、基礎力を保持している学生の能力を伸ばす対応、高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり、等の PDC (S) A が求められる、とした。

入学生の学力不足は相変わらず、それに対しては各教員が各自工夫を凝らして対応している。前出の年 2 回の FD 研修会ではその現状や対応手法が公にされており、毎年度達成されながら、次年度への課題として継続的に循環している。

基礎力を保持している学生の能力を伸ばす対応、高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくりに関しては、各教員が各種コンテスト・大会等への学生参加を促したり、学生や教員の所属学科にとどまらない枠を超えた共同活動が数多く実施されたりしていることから、達成されていると考えられる。しかしこれらはこれで十分ということではないので、より一層の活動が要請される。

（3）FD 活動の在り方に関する課題

工学部 FD 研修会に関して、学生の学修状況の把握はこれまで通りに努めつつ、どのような学生を育てるべきか、つまり学問として何を学ぶべきか、という根本に立ち返った議論ができるよう、内容の再検討をすべきと思われる、とした。

実態は昨年度の活動と同様であるため、本件に関してはあまり改善されていない。しかし大学としての存在意義を低下させないような本質的議論はやはりなされるべきで、学問を根底においた議論を開始すべきである。

参観授業については、参加者が極めて少ない状況は依然として続いており、なかなか改善せず、検討継続予定である。

授業評価アンケートについては、現状は実施そのものの達成度が高い。改善を要請されるとしたら、質問内容の再検討が挙げられるが、学生は学期末に最大 8 科目程度でアンケートを実施させられるため、負担にならず、且つ意味のあるデータが取れる質問事項とせねばならない。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

（1）現状における課題

昨年度とほぼ同じ課題は継続的に以下のように挙げられる。

- (1) 入学生の学力不足対応の充実化
- (2) 基礎力を保持しているような学生の能力を伸ばす対応

(3) 高学年学生が能動的自主的に学修していく精神を涵養させる環境づくり

(1)に関しては、各教員が各専門科目の中で十分に活躍しており、そのための環境はかなり良く整備されていると考えている。むしろ、学問の中身というより、そもそもなぜ大学で学ぶのか？、学ぶということの根源的意味を学生と教員がともに議論し、充実させていくことが重要であると考えている。その意識改革なくして、ただ単に成績上の問題として考えるのであれば、いつまでたっても解決しないであろう。なぜなら学生は生身の人間だからである。

(2)(3)に関しては、現状は特定の教員が当たっていることが多いと考えられるため、もう少し整理し、学科の枠内にとどまらない全学部横断的に学生を支援できる体制づくりが必要であると考えている。

(2) FD 活動の在り方に関する課題

昨年度挙げた課題の継続的検討が必要である。例えば、工学部 FD 研修会に関し、そろそろ学生の学修すべき内容自体について深く考察する時期であると考えられる。学生の学修状況はこれまでと同様の把握を努めつつ、それとは別に、学生要覧に書かれた内容を超えて、どのような学生を育てるべきか、つまり学問として若者は何を学ぶべきか、そのことが我が国と世界の持続的で平和的な発展にどのように資するのか、という教育の根本に立ち返った議論ができるよう、内容の再検討をすべきであると考えられる。

一方、FD 活動のそもそもを理解する機会が減少してきており、再認識する機会を設けたい。例えば、「FD 活動の分類」・「設置基準との関係」・「職業と業務としての FD・SD」・「TP との関係」・「カリキュラム改善のための FD」などの項目については、もう一度共通認識を持つ必要がある。FD 活動のそもそもを理解・共有した後、各教員が工学部で自律的に実施すべきことが把握され、その統合と議論が今後の効果的な学生教育組織の課題解決に資することが予想される。

授業評価検討会および工学部授業評価総合検討会は、学科内および学科間での教員のコミュニケーション体制として重要であり、従来どおり継続する。

学生による授業評価アンケートに関しても、従来どおり継続するが、質問事項の見当をすべき時期に来ていることにも留意したい。

§ 経営学部

1 FD 活動への取組理念・目標

- (1) 質の高い卒業生（経営学部のミッション・ステートメントを体現し得る卒業生）を輩出する。
- (2) 玉川の教育理念を基盤とした経営学教育を実現する。
- (3) 21 世紀社会に生き残ることのできる経営学部一少子化時代・大学全入時代にあって、運営を維持しうる体力をもった学部を形成する。
- (4) 玉川学園および玉川大学全体の評価を高める学部を構築する。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

経営学部長、国際経営学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当が中心となって FD 活動を実施する。教務主任と FD 担当は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会の運営にあたる。

3 平成 30 年度の活動内容

(1) 研修会（平成 30 年 7 月 12 日）

① 概要（目的を含む）

コースプログラムによる学修の進捗状況の共有と支援体制の整備・強化を目的として研修会を実施した。

② 到達目標

学生がコース目標を達成するための具体的な支援方法を示す。

③ 活動内容

この研修会は平成 30 年度に予定したコースプログラムの運用に関する 2 回の研修の 1 回で、学生のさらなる成果拡大に向けた支援について議論する機会と位置づけている。平成 27 年度入学生から実施しているプログラムで初めての卒業生を輩出するにあたって、まず成果の 1 つとして 6 月に 4 年生が受験した TOEIC IP のスコアを共有した。留学経験のある学生のスコアは高いが、国内における学修で伸びている学生も次第に増えているという報告があった。一方、コース目標に届いていない学生も多いため、今後、試験対策の科目を増やすのか、TOEIC 以外でアピールするのか、伸び悩んでいる学生をどう支援するかなどを議論した。

④ 評価

DLP (Dual Language Program) の実践を通してスコアの向上は見られるものの、多くの学生にとって 3 年次秋学期から 4 年次春学期は就職活動と重なることから、十分な成果が得られていないようであった。

昨年度から同様の研修を実施しており、学部全体で学生の学修状況を共有することができる機会になっている。プログラム開始によって TOEIC のスコア上昇が見られるものの、学部全体で目指すスコアに到達している学生の割合は十分とはいえない水準であ

る。現在、情報共有にとどまっており、さらなる支援に向けてどのように運用するかについて踏み込んだ議論が必要であろう。

(2) 研修会（平成 30 年 11 月 1 日）

① 概要（目的を含む）

7 月実施の研修会と同様に、コースプログラムによる学修の進捗状況の共有と支援体制の整備・強化を目的として研修会を実施した。今回は完成年度を迎えるプログラムの運用上の課題を整理し、DLP による成果の拡大に向けて、より早い時期から支援する仕組みを検討することとした。

② 到達目標

学生がコース目標を達成するための具体的な支援方法を示す。

③ 活動内容

7 月に続いてコースプログラムの成果拡大に向けた今年度 2 回目の研修会である。まず 4 年生の TOEIC の成果を共有した。留学経験のある学生のスコアが高いことに加えて、留学せず国内での学修でも十分に成果をあげている学生も見られることが示された。また 10 月に実施した 3 年生の TOEIC IP の結果を共有した。

④ 評価

卒業論文またはそれに類する最終成果物を求めるといった、従来と同じような形式で展開するゼミナールもあったようである。専門分野の学修を通してコース目標を達成することができれば、DLP の成果といえるであろう。教員別にゼミナールを展開することが望ましいかどうかも話題になった。コース目標をどのように実現するかを検討する 1 つの題材になるかもしれない。なお、8 月には春学期の成績評価に際して、コース代表者から経営学部長に各ゼミナールの使用教材や授業方法が報告されている。

コースプログラムを発展的に継続するために、動機づけの重要性を共有する機会になった。3 年生には 10 月に TOEIC IP の受験機会を設けたが、受験しない学生も見られた。動機づけはやはり 3 年次にも課題になっているようである。プログラムにおける学年・セメスター間の連続性とあわせて次年度に検討を要する課題である。

(3) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

例年、各科目の継続的な授業改善に役立てることを目的として授業評価アンケートを実施している。今年度も春学期、秋学期ともに実施した。

② 到達目標

学生の学修状況を把握するとともに、各教員のさらなる資質向上を図る。

③ 活動内容

独自の方法で実施している英語科目（ESS A/B、Business English A/B、EPS A/B）及び各コースゼミナール C/D を除く経営学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。対象は春学期 42 科目、秋学期 35 科目である。マーク式の集計は外

部業者に依頼し、その結果を科目担当者別に配付している。記述式は科目担当者が個別に活用している。

④ 評価

ほぼすべての開講科目で実施できている。評価結果のまとめを Web 上で公開している。今後、学生の成果拡大につなげるアンケートの活用、全学的な課題である学生へのフィードバックについて、学部全体で検討したい。

(4) 学外セミナー等への教員派遣

3月2日(土)、3日(日)に開催された大学コンソーシアム京都主催第24回FDフォーラムに永井一志教授が参加した。平成31年度経営学部FD研修会において報告と討議を予定している。

4 昨年度(平成29年度)に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に予定した活動はすべて実施できている。ここ2~3年、コースプログラムの運用に関する取り組みを続けている。グローバルビジネスコース、マーケティング戦略コースでは TOEIC のスコアをコースの学修目標として掲げており、ゼミナール科目において英語で各専門分野の学修を進めながらスコア向上を目指している。英語に加えて専門分野の成果を十分に示すことは容易ではないかもしれないが、学生個人々のキャリアを見据えた多様な成果を含めて、学生の取り組みを継続的に支援することが求められる。国際会計コースの目標は BATIC (国際会計検定)®であり、今年度は2年生の多くが秋学期までにコースの中間目標であるアカウントレベルに達している。今後、アカウントインテグレーションマネジャーレベル、さらにコントローラーレベルに到達する学生をどのように増やしていくかを検討したい。資格試験を1つの指標あるいは学びのきっかけとしながら、DLP の実践においてコースの専門的な内容を反映した成果をどのように示すかはたいへん重要な課題であり、今後はより踏み込んだ議論が求められる。

全学的に平成31年度へ向けての検討が進んでいるなかで、12月にはゼミナールの評価に関して経営学部長、コース代表者による会合を開催した。各コース2年次、3年次のゼミナール科目(国際会計コースの専門基礎ゼミナールAと国際会計ゼミナールAを除く)において、成績の40%を TOEIC の結果により評価することを決定した。

この他、7月には本法人の顧問弁護士である桑島英美弁護士を講師とした、ハラスメント防止研修会に参加した。

5 今後(平成31年度以降)の予定・課題について

これまでの活動を継続するとともに、本学の学部等改革推進制度を利用した DLP による教育効果の検証を踏まえて FD 活動を推進することになる見込みである。コースプログラム開始以来、学生の学びを見ながらその後の支援を考えることが多かったものの、次年度以降は入学から卒業までを通して早期に全体を振り返り、1・2年次から動機づけと働きかけを促すとともに、平成29年度入学生から開始した「資格取得等による単位認

定」の柔軟な運用も必要になってくる。高等教育機関においてさまざまな場面において英語で専門科目を学ぶ機会や外部試験導入が拡大するなかで、DLPの果たす役割は大きい。プログラム運用のさらなる充実を図り、学生の成長を支援したい。

§ 教育学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本年度の FD 活動への取組理念・目標は、平成 29 年度の内容を継続し、以下の通りである。

「本学部では学校教育はもとより生涯教育、社会教育の諸分野で貢献できる教育プロフェSSIONALの育成を目指し、指導に当たる教員が自らの資質と能力を向上させることにある。」

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

教育学部長、教育学科・乳幼児発達学科の両主任、教務主任、学生主任、及び FD 委員、通信教育課程主任の 7 名で構成する。

教育学部長を委員長とし、FD 委員会が学部における FD 活動計画(企画・運営)の策定、FD 活動の年度総括などを審議する役割を担っている。また委員会決定事項については教授会で議案提起を行い、FD 活動の推進に努めている。

3 平成 30 年度の活動内容

(1) 研修会等

【通学課程】

① 概要(目的を含む)

前年度に引き続き、教員養成における課題や展望を再認識した上で日常の指導、教育実践に取り組むことを目的とし、研修会に参加した。

② 到達目標

今日の教育実践における先進的な取組や課題に触れ、研究活動および日々の授業実践に活かしていく。また日本の教育の課題と展望について学び、教員養成における指導や教育実践に活かし、また参加者同士のネットワークを築くことを目標とする。

③ 活動内容

知的財産権研修会及び自衛消防訓練を開催し、教員の知的財産権への理解や知識の提供、また避難経路の確認など防災に向けて学生の安全確保のための研修を行った。

研修名 : 子どもの不定愁訴に関する食事環境と身体発育からの検討

講師 : 鈴木美枝子先生(教育学部乳幼児発達学科)

実施日 : 平成 30 年 4 月 18 日(水)

場所 : 大学教育棟 2014 501 教室

時間 : 17 時 00 分～18 時 00 分(約 1 時間)

研修名 : 新学習指導要領について

講師 : 樋口雅夫先生(教育学部教育学科)

実施日 : 平成 30 年 8 月 14 日 (火)
場 所 : 大学研究室棟 B104 会議室
時 間 : 15 時 30 分～16 時 30 分 (約 1 時間)

研修名 : 教育学部救急法の講習 (心肺蘇生法と AED の使用法)
講 師 : 国見保夫先生 山田信幸先生 (教育学部教育学科)
実施日 : 平成 30 年 9 月 26 日 (水)
場 所 : 大学研究室棟 B107 会議室
時 間 : 17 時 40 分～18 時 30 分 (約 1 時間)

研修名 : 著作権と知財創造教育テキストに関する大学 FD 研修会
講 師 : 木村友久氏 (山口大学知財センター副センター長)
実施日 : 平成 31 年 2 月 12 日 (火)
場 所 : 大学教育棟 2014 605 教室
時 間 : 15 時 30 分～17 時 40 分 (約 2 時間)

④ 評価

知財研修会については、初めての試みであり、非常に重要なことを再認識した。特にネット上の情報を取得・使用に関してどのような権利が発生しうるかなどの知識を得ることができた。また、避難訓練研修においては、教員同士の協力やコミュニケーションの重要性が学生の安全確保につながり、認識できたことは望ましい成果であろうかと思う。

(2) 学生による授業評価アンケート

【通学課程】【通信教育課程】

① 概要 (目的を含む)

学生による授業評価 (教育学部では「リフレクションシート」と称す) を全授業で実施する。集計結果は学部全体の平均と比較できる形として各授業担当者にフィードバックされ、新学期に向けて授業改善につなげるものとする。また学部・学科・学年別の集計結果の傾向や課題を学部全体で共有することを目的とする。

② 到達目標

専任教員、非常勤講師が担当するすべての授業において学生によるリフレクションシートを実施する。ただし授業評価アンケート実施日の出席者が 10 名未満の授業については集計せず、各担当教員が授業改善のために活用する。実施した授業評価の集計はデータ分析と集積を行い、教員の授業改善および学生の傾向や課題の共有につなげる。

③ 活動内容

専任教員、非常勤講師が担当する教育学部すべての授業において、授業評価アンケート (リフレクションシート) を実施した。

④ 評価

授業評価のアンケート結果は各授業のみならず、学部全体の平均値と比較できるようにし、学生の傾向や課題を各教員が共有することができた。また教育学部における授業評価のアンケート結果は各設問とも概ね高い評価を得ることができた。この結果は各教員の日頃の授業改善の賜物ではあるが、実施するアンケート内容の周知により、明確な評価基準として、教員の意識改革につながり、さらなる授業改善につながったと言える。

一方、前年度に引き続いて予習・復習の時間に関しては他項目よりも低くなっている。ただし、あくまでも平均であり、個々の授業特性および学生の予習や復習に対する時間的な意識の違いがあることや 10 名以下の授業の削除等の考慮も加味した上での評価と考えるべきである。この点に関してはアンケート設問内容の改善や設問に対する説明を加えるなど検討したい。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

スクーリング授業において、学生による授業評価を全教員が実施し、集計結果は各授業担当者にフィードバックするとともに、補助教材『玉川通信』で学生に公表する。目的は、各授業担当者が新年度に向けて授業改善することにある。

② 到達目標

- ・専任教員、非常勤講師を問わず、すべての授業において学生による授業評価アンケートを実施する。
- ・実施した授業評価の集計を外部委託し、データ分析と集積を試み、教員の授業改善、また学生の傾向や課題を共有する。

③ 活動内容

- ・夏期スクーリング（8月3日～8月23日）において、専任教員、非常勤講師の全教員が、担当する全ての授業（一部の実技系科目を除く 108 科目）について、授業評価アンケートを実施した。回答数は延べ 2,585 名。
- ・質問内容は、前年度と同一のものを使用した。

④ 評価

各授業の結果は、全教員の結果をグラフ化したものと比較できる形で、通信教育課程の全教員を含む夏期スクーリングの担当教員本人に配付し、結果と課題を共有することができた。また、補助教材『玉川通信』で結果の概要を学生に公表した。

授業評価の内容であるが、各設問とも概ね高い評価を得ている。今年度は昨年度に続き「自分は積極的に授業に取り組んだ」という自己評価について肯定的に答えた人の比率が高かった。また、授業評価では「授業の目標が明確」「知的な興味・関心を引いたり、技能を向上させるものであった」といった項目が高い評価を得た。予習時間に関しては科目によりばらつきが多かった。

若干低めの評価となった項目としては、「学修目標を達成」「授業時間内に自分の考えや意見をまとめたり、学びを深めたりする機会や時間が適切」「各回の授業の学修量」と

いった項目があった。6日間短期集中型という学修形態のため、必ずしも十分な予習・復習の時間が確保できないという制約の中で、授業時間内にいかにして学修内容の定着・深化を図り学修目標を達成するかという課題が浮き彫りとなった。ただし、昨年に比べるといずれも数値の改善が見られた。

また、クロス分析を試みた結果、「自分は積極的に授業に取り組んだ」に対する回答とそれ以外の各設問への回答との間には、明確に相関関係（積極性の高い学生ほど、各設問に対しても前向きな回答をするという傾向）があった。これは予想されたところではあるが、授業者には積極的に参加したくなるような授業が求められているといえよう。

(3) 教職員相互の授業公開と参観

【通学課程・通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

教員相互の授業参観を実施し、各自の教授法、教授内容についての振り返りを行い、授業改善につなげる。また関連する科目の教授内容の調整を検討する機会とする。

② 到達目標

大学 FD 委員会の提案に合わせ、通学課程は3名、通信教育課程は最低1名の教員が授業参観を行う。公開した教員の教育内容の振り返り、教授法の改善を図るとともに、参観した者の授業改善へ寄与することとする。

③ 活動内容

通学課程は教員3名の協力を得て、3つの授業の授業公開と参観を行った。

通信教育課程は教員1名の協力を得て、1つの授業の授業公開と参観を行った。

④ 評価

通学課程は若手・中堅および熟練者の授業参観を実施することができた。実施においては、多忙な大学教員の業務を考慮し、全100分の参観でなくとも良いこととしたが、参観者は前年度と同様に少なく、時間設定の方法や実施の在り方についての再検討が必要と思われる。しかし参観期間中の参加者数は少なかったが、参観期間に限らず、気兼ねなく教員同士がいつでも授業を参観できる環境・雰囲気教育学部内で形成されている。特に関連する科目や共通科目が主ではあるが、教員間の教授法、教授内容についての意見交換が行われるようになったことは、授業公開を実施することの意義や成果の一つとして挙げられる。また、非常勤教員からの参観への参加があったことも意義深いと思われる。

通信教育課程は、昨年度の PR 不足の反省を踏まえて積極的に授業公開への参加を呼びかけたが、結果的には本年度も1名・1件にとどまった。ただ、公開時期が秋学期だったので、春学期の授業なら公開したいという教員もおり、今後の課題としたい。

(4) FD 研修

【通学課程】

1) 鹿児島研修

① 概要

玉川学園創設者小原國芳の出身地である鹿児島の主要地を訪問し、参加した教員同士が学び合い、各自が今後の教育活動、研究活動の活性化を図ることを目的とした教員自主企画および学部企画の学外（鹿児島）FD研修「玉川学園の歴史および玉川の教育の背景」を実施した。自校の歴史や建学の精神を再確認し、玉川大学における全人教育の意義について理解を深めることを目的とした。また自校史教育の教材となる映像資料作成のための取材も目的とした。

② 到達目標

自校史の理解促進や小原國芳が生誕から幼少期、小学校、電信局、そして師範学校時代を過ごした主要地を巡り、玉川大学の歴史や建学の精神を学ぶと共に玉川の教員としての誇りを持ち、日々の教育活動につなげていく。また教育学部の教員間で小原國芳の生き方や信念を共有し、愛校心を高めることを目標とする。

③ 活動内容

本研修においては小原國芳の鹿児島時代における主要地を平成31年2月26日・27日の2日間に訪問した。

一日目は、鹿児島師範跡、日本基督教団鹿児島教会を中心に取材をおこなった。特に、鹿児島教会では、尾崎和男牧師の協力により、貴重な資料を得た。同教会はもともと山下町教会と江南教会という異なる宗派が戦後に合併して成立した。小原がランシングと出会い、洗礼を受けたのは山下町教会である。かつて、その教会のあった場所には別のビルが建っている。

二日目は、枕崎市の桜山小学校の見学からスタートした。この学校は、小原が高等小学校の最後の3ヶ月通った学校である。ここに通い、卒業できたため、後の師範学校への入学ができた。その意味で、最も重要な学校である。往復六里の山道を通った。これは地元でも逸話となっており、社会教育の一貫として、そのコース（勉学の道）を子どもたちが歩くイベントがある。100周年記念誌に小原が寄稿した文章を発見した。その後、晴耕塾、生誕地公園をまわり、墓参をした。（文責・杉山）

④ 評価

学部教員による創業者ゆかりの地の訪問・取材は、単なる研修にとどまらず、自校史研修のフィールドワークとしての価値をもつ。そこに行かなければ知り得なかった事柄が多かった。それは、教育学部および今後の大学における教育活動に大きく寄与するであろう。また、資料収集の必要などの課題の発見にもつながった。ただし、京都とは異なり、戦災によって失われた資料がおしまれる。

【通信教育課程】

① 概要（目的を含む）

本課程では、教員数が少なく独自のFD研修を実施するのが難しいため、随時各種の学外FD研修の情報を提供した。

② 到達目標

本校の全学で行われる FD 研修のほかに、専任教員の各自の問題意識にあった学外 FD 研修に参加することで、日々の教育活動の向上を図ることを目的とする。

③ 活動内容

残念ながら今年は学外 FD 研修への参加はみられなかった。

④ 評価

例年京都地区で行なわれる「FD フォーラム」に 1 名参加していたが、本年度はちょうどウィンターセッションの 2 期と重なってしまい、結果としては参加者無しとなってしまった。ただ、個人的な問い合わせや、時期が良ければ参加したいとの声などもあり、反応は良かったと思われる。次年度も引き続き積極的な参加を呼びかけると共に、よりきめ細かに情報提供を行っていきたい。

4 昨年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

【通学課程】

授業評価アンケートの全科目（専任・非常勤）実施を目標にしていたが、春学期には発注ミスにより一部の授業において実施できなかった。また、秋学期にも発注ミスがあり、最終授業に間に合わない事例がいくつかあった。これらは、FD 委員が発注に関する手順を見直すことで解決できる予定である。教育学部は、学部独自の教育課題を追及する学部企画 FD 研修を行っている。鹿児島の小原記念館を訪れ、創立者の理念を再確認し、教員個人の資質向上および学部組織としての教育力の向上につながったと言える。

また平成 25 年度より 16 単位キャップ制の導入など新しい大学教育において、これまで以上に教員間の信頼と協力・連携が必要である中、FD 活動や研修を機に多くの場面で学部教員が玉川大学や学生のため、より良い教育実践について意見交換を多く持つことができるようになったことも成果の一つであり、学部組織としての教育力の向上につながるものと思われる。

【通信教育課程】

スクーリングの授業評価アンケートは、授業者の多寡によらず原則として全科目で実施することができた。また、設問の内容を通学課程や他学部のを参考に見直してから 3 年連続で同一項目でデータを取っているため、経年変化の分析や、通学課程や他大学などの授業評価とある程度の比較は可能になったのであるが、時間がなく実施できなかった。次年度以降の課題としたい。

テキスト学修科目のアンケートについては、前年度に見送りを決めて以降、特段の進展はなかった。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

【通学課程】

前年度に引き続き、日常の教授内容や方法の更なる検討と研鑽を重ね、本学の建学の理念に基づき、今日の社会の要求に応じることのできる人材育成に取り組むことが重要である。

授業評価アンケートにおいては、項目内容の改善として全授業に当てはまる項目の設定は困難ではあるものの、実習や演習、アクティブ・ラーニング、少人数の授業など授業体系に応じた項目を加えるなども今後の課題の一つである。

教員の重要な職務である研究活動の活性化のために、共同研究などの勉強会を平成 31 年度も開催していきたい。

FD 研修の一つである鹿児島研修において学部教員が創立者の生誕地である鹿児島を訪れ、その教育者としての原点に触れることは大きな意義がある。とりわけ私学においては創立者の建学の精神を教育の出発点としているため、その精神を教職員や学生が共有することが大学教育の成果にも大きく影響すると考えられ、昨今「自校史教育」の重要性が強調されている。さらに教育学部では学生たちが創立者・小原國芳の教育精神を学ぶ機会を授業や行事など多数設けており、今後もその充実が求められている。そのため今後の大学における教育活動に大きく寄与する鹿児島研修は今後も引き続き行っていく予定である。特に新任教員には学外出身者も多く、このような研修の機会を設けることは玉川教育の精神を全教員間で共有するためにも必要であると考えられる。

【通信教育課程】

スクーリング科目については引き続き授業評価アンケートを実施する。通学課程や他大学などの授業評価との比較や、同一科目・同一教員の経年経過の分析も試みてみたい。また、テキスト学修科目についても、学生のニーズをすくい上げることができ、なおかつ教員の指導方法や授業の改善にもつなげられる何らかの方法を検討したい。

§ 芸術学部

1 FD 活動への取組理念・目標

芸術学部のミッションは「芸術による社会貢献の実践力を育成する」であるが、現代の社会は経済を中心とするグローバル化や少子高齢化、情報化、新技術の進展といった社会の変化が労働市場や産業・就業構造の流動化となって急速に進行している。このような時代にあっては、我が国の人口動態も踏まえつつ、変化する社会の捉え方と貢献の仕方を常に検討して柔軟に対応していく必要がある。新聞社の全国世論調査によると、「世界に通用する人材や、企業や社会が求める人材を大学は育てているか」の質問に 6 割を超える国民が否定的な回答をしているように、人材養成や研究の目的が社会の要求と乖離していると指摘されている。特に芸術分野は新産業分野でも期待される感性や創造力などの育成と深くかかわり、芸術学部の人材養成が社会の発展や改善に貢献できると確信している。

そのためには、従来の教育や福祉はもとより、現代は芸術と産業分野との関連性と活用が高まっているように、常に社会とのかかわりを意識しながら、ESTEAM 教育の推進をはじめ教員養成課程の充実など、カリキュラムや教授法の改善・開発を行う必要がある。また、入学生の資質や能力などの動向も踏まえた学修支援体制の構築や、学生を主体とした授業方法の研究および総合的な学修環境を形成するプロジェクト型授業や外部機関との連携授業を推進することも重要である。そのためには多様化する社会の要請に応えうる柔軟性や機動性をもった組織として教員団を編成しなければならない。教員団が目標や課題を共有し、協働して教育活動を推進・改善できるチーム力形成が重要である。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

芸術学部長を中心とした主任会の構成員及び FD 委員が FD 活動の中核メンバーである。定期開催の主任会と主任研修会が中心となり教育課題の共有や分析を行い、目標や課題の設定および改善方策などの基本方針を検討する。そして、中核メンバーはもとより、課題ごとの担当教員が報告や成果、及び方策等を拡大教授会で報告することなどを通じて、全学部教員が目標や課題を共有し、組織的な取組とする仕組みを構築している。また、各学科の主任は学部 FD の中核メンバーであるので、学科内の取組をまとめることや推進する役割を担い、教授会と学科会が連動して FD 活動を推進させている。主任会構成員および大学 FD 委員は、全学的な課題や情報の収集と伝達、及び他学部・他大学における FD 活動の情報収集を行うと共に、学部内の情報共有を図り、FD の組織的活動が円滑に行われる役割を担っている。

3 平成 30 年度の活動報告

(1) 授業アンケートの実施と授業成果報告書の作成

① 概要・活動内容（目的を含む）

平成 30 年度は、予定通り年 2 回の授業アンケートが芸術学部で開講されている全ての授業について実施された。個々の科目に関するデータおよび統計的データの全てを、Blackboard を通じて学部内の全学生および学部内の全教員に公開する。また、個々の科

目についてのデータは伏せつつ、統計的データを、持ち出し不可の冊子として一般の閲覧に供することを検討している。さらに、各学科の専門科目の担当者が授業概要と授業成果をまとめた授業成果報告書などを作成している。

② 到達目標

芸術学部 FD 委員会においては、授業アンケートのデータを分析し、学部運営に活かすと共に今後の FD 活動の方向性を考える手がかりとする。また、各科目担当者はそれぞれのアンケート結果を参照し、授業の内容と養成人材像との妥当性について点検する。授業成果報告書は各学科の専任・非常勤教員に配付し、全ての教員が専門科目の概要を把握することによって、より緊密な連携を可能とする。

③ 評価

本年度も昨年度に引き続き 2 年次以降の専門科目に関して授業報告書を作成し、様々な情報を共有しつつ、今後の教育方針に関する議論の土台を築くことができた。また、授業アンケートの結果に関しては、芸術学部の拡大教授会において、その結果を報告するとともに、学生の学修状況、その傾向などについての情報を共有することが出来た。

(2) 学外セミナー等への教員派遣

1)

① 概要（目的を含む）

「人工知能×デザイン 共創とデザイン～デザインで未来を明るくする～」(芸術工芸学会春季大会デザイン関連学会シンポジウム 平成 30 年 5 月 19 日 場所：九州産業大学) に芸術教育学科主任の中島千絵教授が出席し、令和 3 年度の学部学科改組に向けてのデザイン教育の動向に関する情報収集を行った。会場で得た情報をもとに主任会に持ち帰り新学科策定に向けての議論を行った。

② 到達目標

デザインの現在の状況、未来性などをテーマとした複数の講座とディスカッションの中から、新学科の名称にふさわしいキーワードを探るべく情報収集を行い、その成果をもとに部内での討議に活用する。

③ 活動内容

「共創とデザイン」と題された基調講演をもとに、市場価値、技術の変革、身体性、デザインと共創などの観点からキーワードとなる言葉を抽出していく。シンポジウム後に複数の参加者から意見を聴取し、時代の流れに即した新学科のイメージを構築するべく新学科名称を考察する。

④ 評価

事前に学部内の改組委員会で行われたキーワード選考をベースとしてその言葉の持つ意味合いや一般的理解の状況、将来性などについて調査を行った結果、デザインの現場や市場においてはその言葉がかなり浸透している印象を受け、意味的なズレは感じられなかったものの、時代の変化により淘汰されるような一過性の名称にならないようにさらに検討、確認が必要であるとの状況を実感することができた。

2)

① 概要（目的を含む）

「音楽教育が未来に伝えるもの」（全日本音楽教育研究会全国大会 大学部会大会 平成 30 年 10 月 20 日 場所：聖徳大学）に芸術教育学科の清水宏美教授、渡辺明子准教授が出席し、音楽教員養成課程に携わる教員にとって重要な情報を収集し、学部・学科の教員と情報共有することで、授業運営や各授業の質の向上に役立てる。

② 到達目標

芸術教育の過程において演奏家あるいは研究者としての側面と教育者としての側面を伸ばすべく、この大学部会の内容を教員養成課程の授業運営及び授業の質的向上、授業改善に活かす。

③ 活動内容

全国から集まった大学教員による研究発表が行われ、音楽教育における諸問題について意見交換を行いながら授業構築についての討議を行った。また、今年度のテーマの中から「日本音楽・和楽器」と「合唱」についてワークショップや演奏会が行われた。

④ 評価

新学習指導要領で日本音楽や和楽器の指導が行われる中での問題点や指導の技術などを得るために和楽器奏者による講義や演奏体験などが行われた。実際に触れることによってより具体的なカリキュラムの体系の中での日本音楽への取り組みについての認識を確かなものとする事ができた。

(3) 研修会

1)

① 概要（目的を含む）

「芸術学部専任・非常勤合同研修会」を学部長が招集し実施した。（平成 31 年 3 月 22 日 場所：大学研究室棟）開催目的は、芸術学部教員全体が学部・学科の教育目標や各種の教育課題を共有し、専任・非常勤が協働して教育活動の改善と発展を推進できるように芸術学部教員団のチーム力を強化する。

② 到達目標

各学科の教育目標の確認、改革方向性確認、教育課題の抽出と共有、教育課題の改善方策の探索、学科の競争優位性確保の方策などについての理解を深め、教員団チームとして教育活動が推進できるようになる。

③ 活動内容

学科教育目標の確認、改革方向性確認を経て、小グループに分かれた討議によって、問題抽出、課題設定、改善方策、プレゼンテーションによる問題と課題の共有を行った。

④ 評価

学部教育目標や各種の教育課題を共有し、専任・非常勤が協働して教育活動の改善と発展を推進できる教員団チームの形成に役立つ研修となった。学科ごとの討議後は、参

加者全員による学部情報交換会でチーム力を高めた。

(4) 調査・研究など

1)

① 概要（目的を含む）

高大連携・接続の観点で第55回全国高等学校美術、工芸教育研究大会（平成30年8月8日～10日 場所：大宮ソニックシティ、パレスホテル大宮）に芸術教育学科中島千絵教授と加藤悦子教授を派遣し、情報収集を行い養成課程の授業改善に資する。

② 到達目標

高等学校の美術科、工芸科指導の現状の掌握と問題点の収集。大学学部の教員養成の在り方を検証するための手がかりとする。

③ 活動内容

全国から集まる高等学校教員による研究発表、ワークショップ、生徒作品展、基調講演(多摩美術大学 和田達也教授「自立のためのデザイン教育」)が行われた。分科会では「モノづくりからヒトづくりへ」のテーマのもと、もの、こと、ひと、みち、をキーワードとしてマインドセット、アクティブラーニングの事例紹介などが行われた。分科会に参加をして情報収集を行うと共に情報交換会にて高等学校教員との意見交換を行った。

④ 評価

指導要領改訂をふまえ、全国の美術科・工芸科教員と意見交換をすることができたことは大変有意義である。また、学部の教員養成推進に向け、高大連携・接続などの情報と課題を教員間で共有することができた。

2)

② 概要（目的を含む）

留学帰国生の就職活動支援研修（平成30年12月13日 場所：キャンパスプラザ京都）に国際教育担当の藤枝由美子教授が参加した。企業のグローバル化、訪日客の増加に伴い学生の海外体験者の企業によるニーズが高まっている状況にあり、学生支援者として帰国後に就職活動を控える海外体験学生のキャリアを見据えてどのようにアドバイスすることができるのかを探る。

② 到達目標

留学を帰国後の就職に活かす方法について情報を得、本学の支援の質的向上を図る。

③ 活動内容

講師：本橋幸夫氏（有限会社あうとりがー代表）によるレクチャーを受講。内容は①企業が求める人材とは ②留学前、留学中、留学後にやっておくべきこととは等について。その後の懇親会にて情報収集をする。

④ 評価

留学支援者が留学希望者にどのような情報を事前に与え、帰国後に指導を行うかによ

って留学の価値を大きく高め、就職を有利に導くことができるかを理解した。「創造力」「異文化理解」「差別・区別の体験」など人間力の向上につながる体験となるように留学生と支援者が共に認識する必要を感じた。今後、国際教育センターと各学部の SAE 担当が連携し、留学希望者だけでなく多くの学生に留学の意義を伝え、留学の価値を高める方法を共有することが重要となることを認識できた。

3)

① 概要（目的を含む）

大学コンソーシアム京都第 24 回 FD フォーラム（平成 31 年 3 月 3 日 場所：京都立命館大学衣笠キャンパス）2 日目第 2 分科会にメディア・デザイン学科主任の橋本順一教授が参加した。分科会テーマは「学部・学科教育の改革・改善をいかに進めるか」として京都橘大学、西野毅朗教授を中心としたパネラー 4 名より実践報告があった。会場には 120 名を超える参加者があり、令和 3 年に学部学科の改組に取り組む FD 委員会、改組委員会として興味深い内容であった。

② 到達目標

分科会で得られた情報などを学部 FD 主任会、改組委員会に持ち帰り、新学科改組に対する議論、検討に続けること。

③ 内容

「学部・学科教育の改革・改善」というテーマは各大学にとって注目されるものであり会場には 120 名を超える参加者があった。橘大学で行う「多読百遍」、キャリア教育ゼミなどの紹介、独自システムによる学習記録についての外部業者委託方法など参考になる点が多くあった。

④ 評価

大学内部での教育改革は常に意識される問題であるが、改組を控えた芸術学部としてはタイムリーな情報収集の機会であった。本学においても FD に対する外部業者の活用、チームティーチングや IR の活用など時代に即した手法を取り入れつつ、教育の本質はどこにあるかを見極めながら改善計画を行うための議論につながった。

4)

① 概要（目的を含む）

大学コンソーシアム京都第 24 回 FD フォーラムに際して行われた「対話のある家 ダイアログ・イン・ザ・ダーク」（平成 31 年 3 月 2 日～3 日 場所：グランフロント大阪）および東京で行われた体験会ビジネスワークショップ（平成 31 年 3 月 14 日）にメディア・デザイン学科主任の橋本順一教授が参加した。この研修的内容を当学科の学生に向けた研修として実施できるかという可能性を検討する。

② 到達目標

チーム参加による非日常的体験を通じたグループワークの中からリーダーシップ育成、チームビルディングなどの成果を得られる内容で、企業や教育機関向けの研修を行って

いるこの研修を当学科の学生研修に適用する。

③ 活動内容

大阪と東京で体験した内容は、少人数のグループで完全な暗闇の部屋に入り、空間を探索し、テーブルにつき、飲み物や菓子を食べながらグループでテーマに沿って会話するというもの。視覚に頼らない世界から、それ以外の感覚を総動員して体験する世界は、芸術を学ぶ学生が人間の感覚と芸術表現について考えるためにも意義のある体験である。これを当学科向けの研修として実施できるのかを今後検討していく。

④ 評価

学生たちがこれまでに体験したことのない世界から新たな経験、視野を得る可能性として期待できる内容と考える。東京ダイアログ・イン・ザ・ダークでは企業や教育機関向けの研修コースがあり、大学での研修に適用する可能性が高いことから、次年度での実施を視野に進めていく。

4 昨年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

セミナーや研修会への教員派遣は、教員養成改革、教育制度改革の進行及び次世代人材養成へ対応が求められる状況で、社会の要求を踏まえた学部の運営や教育計画の実行に有効であった。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

芸術学部では各学科の教育活動を相互に参観することや協働体制を強化してきたが、各学科や各プロジェクトの横断性や学部を超えた連携はもとより、社会との連携を図り、理論と実践の往還による教育体制を推進し、現代ニーズに適合した人材養成機関と研究機関としての機能を高めるためにも、積極的かつ継続的に教員団の資質能力やチーム力の向上を図る。

§ リベラルアーツ学部

1 FD 活動への取組理念・目標

本学部では、①学士課程教育の質保証、②学部・学科設置の趣旨と教育目標、③実効的なリベラルアーツ教育の実現、という観点から日頃の教育研究活動の改善へ向けた FD 活動を展開することを目標としている。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

本学部における FD 活動の組織構成・役割は以下の通りである。

学部長・各主任…学部における FD 活動の方針について提案・助言する。

FD 担当 …学部における FD 活動全般をコーディネートする。また大学 FD 委員会で審議・報告された内容を拡大教授会にて報告する。

学部で実施される専任教職員向けの FD 研修会についてコーディネートする。

※この他、所属教員全員が主体的に FD 活動に取り組む体制がとられており、教育内容・方法に関する情報交換は教員間で日常的に行われている。

3 平成 30 年度の活動内容

(1) 初年次教育の方向性に関する研修

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部の人材育成に資する、より効果的な 1 年次研修・初年次教育を実践するために、今年度の実施結果を共有しその振り返りをもとに、次年度以降の 1 年次研修の具体的なプランを検討する。また、研修と連動した初年次教育のあり方についても意見交換を行う。

② 到達目標

次年度以降の 1 年次研修および初年次教育カリキュラムを改善することができる。

③ 活動内容

1 年次研修の 2 日目に湯本富士屋ホテルにて実施した。参加者は 1 年生担任教員、学部長、各主任であった。具体的には以下の各項目について検討を行った。

- ・ 1 年次セミナーのクラス運営と大学生としての学修・生活に関する早い段階での教育
- ・ 次年度以降の新入生研修のあり方
- ・ 新入生研修の成果のまとめとアウトプット方法
- ・ 秋学期「一年次セミナー102」のスケジュールと内容

④ 評価

1 年次セミナーは 1 年生全員（約 180 名）を複数クラスに分けて実施するため、クラス間の授業内容や学生指導、クラス全体の状況については、担任間で共有し連携をはかっていくことが重要である。入学後 2 ヶ月を経てクラスの様子を把握できてきた時期に、

現状のまとめと今後への意見交換を行うことで、効果的な1年次研修および初年次教育カリキュラム改善へ向けた準備を整えることができた。この点から、目標を達成できたと評価できる。

(2) 「二年次セミナー」の教育内容と方法の改善に関する研修

① 概要（目的を含む）

本学部2年生必修科目「二年次セミナー201」および「二年次セミナー202」の教育内容と教育方法を検討し、望ましい二年次教育の在り方を考える。

② 到達目標

この科目の教育内容・方法を具体的に改善することができる。

③ 活動内容

春・秋 semester中に月1～2回の頻度で担任会を開催し、2年生各クラス担任が参加し、教育内容・方法を改善するためのディスカッションと研修を実施した。特に今年度は以下の点を中心に検討を行った。

- ・3年生からスタートするプロジェクトセミナーおよびプロジェクト（ゼミ）の学修へ繋げるための基礎力として、2年生でアカデミックリーディングおよび要約、ディスカッションをさらにスキルアップする。この教材を労働に関する評論として、キャリア教育と連動させる。
- ・二年次の学内・学外研修のあり方。内容とアウトプット方法。
- ・メジャーおよびゼミの選択をサポートする情報提供とリベラルアーツ的学問に触れるための授業の仕組み。
- ・学内にとどまらない多様な学びや経験に触れるための情報提供のあり方。特に海外留学やボランティアについて。

④ 評価

二年次教育のあり方に関して教員間で問題意識を共有でき、実際の教育内容と方法を改善することができた。また、学生の大学での学びと社会に向けた自らの態度姿勢に対する意識を高め、教育効果を上げることができたと考えられる。

(3) 教育現場における防災に関する研修

① 概要（目的を含む）

学部専任教員の防災に関する意識を高めると同時に、教育現場において火災等災害発生時に迅速かつ的確な対処ができるよう、必要な知識とスキルを確認し、具体的な対処手順を実践的に理解する。

② 到達目標

教育・研究現場において、火災等災害発生時の迅速かつ的確な対処ができるようになる。

③ 活動内容

平成30年7月26日（木）16:20～17:00、大学教育棟 2014 511 教室および大学教育

棟 2014 前広場にて実施した。キャンパスセキュリティセンター職員からの解説に従って、火災、地震、ミサイル飛弾等災害発生時の対処方法、大学教育棟等の防火施設、避難誘導方法等の確認、および消火器使用訓練が行われた。

④ 評価

全教員が出席して、必要事項を確認すると共に、キャンパスにおける火災等災害発生時の対処方法を具体的に理解、体験することができた。到達目標は概ね達成されたと評価できる。

(4) 平成 30 年度リベラルアーツ学部 FD 研修会

① 概要（目的を含む）

リベラルアーツ学部教育活動の点検、本学部共同研究報告、新年度教育計画、学部改組に関する検討等を行う。学部教育目標や教育内容・方法、研究活動のあり方について教職員間で認識を共有することができる。

② 活動内容

平成 31 年 2 月 13 日～14 日に湯本富士屋ホテルにおいて専任教員による研修会を実施し、以下の各項目について集中的に検討した。

(ア) リベラルアーツ学部の今後の学部改革へ向けて

(イ) 共同研究中間報告

- ・玉川大学に於けるリベラルアーツ教育の導入の意味と発展についての研究
- ・台湾における日本語教育に関する基礎的研究

(ウ) 特別講演 新谷喜之先生（教育学部）

- ・「障害者の権利に関する条約」と合理的配慮 ～障害のある人への適切な支援～

(エ) 平成 30 年度教育活動の振り返りと次年度教育計画

(オ) 次年度「一年次セミナー」および「二年次セミナー」の内容

③ 評価

(ア) 本学部の人材養成目標を確認し、それを実現するためのディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーについて教員間で共通認識を深めた上で、新メジャー設立の可能性について展開方法と問題点を議論することができた。

(イ) 共同研究中間報告では、リベラルアーツ学部設立の経緯、全人教育との関わり、国内の他のリベラルアーツ教育と比較して本学のリベラルアーツ教育の今後の方向性、指導方法や内容が各教員により異なりやすいプロジェクト（ゼミ）の授業運営に関する教員インタビュー調査結果について報告が行われた。最近数年のうちにリベラルアーツ学部に加わる教員が多かったことから、改めて本学部の歴史的経緯と理念を共有し、今後の展開について新しい視点を加えつつ議論することができた。また本学部の特色である日本語教員養成、海外研修生受け入れ、ホテルでのインターンシップ等で関わりの深い台湾における日本語教育に関する

調査については、研究のインフォーマントおよびフィールドの開拓が進められたことが報告され、学生による現地調査やボランティア、インターンシップなど新たな学びの機会を提供する可能性について議論が行われた。

(ウ) 新谷喜之先生の特別講演では、初等・中等教育における障害者への対応について、法律を含む環境整備がいかに行われてきたのか、対応上生じる様々な問題点はどのように解決されてきたのかについて解説をいただき、障害者への配慮とはどのようにあるべきかについて理解を深めることができた。これに基づき、高等教育での障害者への対応が議論された。例として、学生の個人情報の教員間共有の注意点、入試対応の法的な制限、合理的配慮の方法についての保護者の考慮の仕方、要支援者が増加してきた背景が議題として挙げられた。

(エ) 平成 30 年度の学部教育活動を振り返ることにより問題点、改善点を教員間で共有することができた。それを踏まえて平成 31 年度に予定される教育活動に関する検討を行った。

(オ) 「一年次セミナー」および「二年次セミナー」に関して、今年度の運営について振り返りを行い、使用する教材やスケジュール、個人面談やグループワークの指導方法など、具体的な教育計画を立案することができた。

以上の点から、極めて意義深い研修会であったと評価できる。

(5) 学外 FD セミナーへの参加

① 概要（目的を含む）

外部機関が主催する FD セミナーに本学部教職員が参加し、FD に関する研修を受けるとともに、大学教育や FD 活動に関する最新の情報や研究動向を把握し、それを今後の FD 活動に活かしていく。

② 到達目標

学外の FD セミナーに参加し、FD に関する最新の情報を得ることができる。

③ 活動内容

平成 31 年 3 月 23 日～24 日に行われた、京都大学高等教育研究開発推進センター主催「第 25 回大学教育研究フォーラム」（於：京都大学）へ本学部 FD 担当（梶川）が参加し、研究発表や実践報告を聴講した。

④ 評価

大学教育と FD に関する最新動向や知見、他大学の活動状況を把握することができ、本学部の FD 活動に参考となる情報を得ることができ、大変意義深かった。

4 昨年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

昨年度に提案された予定・課題は以下の通りであった。

① 自己点検と自己評価こそが Faculty Development の原点である。これまでと同様、大学教育の質保証を図るため、FD に対する意識をより高めるとともに、教員相互の研修を基盤とする FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を図り、現今の大学

教育に求められる教育力と研究力をさらに高めていくことが基本的課題である。

- ② 学部運営の PDCA (PDSA) サイクルの中に FD 活動を位置づけ、その成果を本学部の教育理念・教育目標の共有と実現に生かしていく仕組みを具体的に構築していくことを今後も検討したい。
- ③ 平成 29 年度に改組された本学部の 2 年目以降の運営に当たっては、組織としての自己点検を的確に行いながら学部教育の質保証を図っていくことが課題となる。
- ④ アクティブ・ラーニングの本質（「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」）を見極めた上で、専門性や科目特性に応じて諸手法を適切に取り入れ、教育効果を高めていくことが昨年度に引き続き課題となる。さらに、その教育効果を妥当性の高い方法で的確に捉えていくことが課題になると思われる。
- ⑤ ティーチング・ポートフォリオ等の考え方と手法を参考にして各自の教育活動を振り返り、一層の教育改善を図ることも課題となろう。

以下、それぞれの達成度について振り返る。

- ① FD 研修会の実施、1・2 年担任ミーティング、その他教員相互の情報交換などにより FD に対する意識が高まり概ね実践されてきたと評価できる。ループリック評価法、アクティブ・ラーニングのより効果的な活用法など、さらに教育効果を高める手法やその運用について学ぶと共に、各教員の教育力と研究力の一層の向上を目指す試みが必要である。
- ② 学部運営のシステムの中に FD が効果的に組み込まれ展開していくことが望ましいが、FD 研修会や防災訓練を除いては部分的かつ単発的に活動が実施されている傾向がみられる。今後学部 FD 委員会を中心に検討を重ねる必要がある。
- ③ 平成 29 年度学部改組から 2 年目の今年度は、滞りなく新カリキュラムへの移行を果たしつつある。特に学内外での学生の主体的かつ実践的な学びを推進するために、学部内での議論を基に授業運営を行っている。今後の運営に当たっては自己点検を行い、本学部の改善と発展を図っていく必要がある。
- ④ アクティブ・ラーニングは既にほぼ全ての授業で取り入れられ、学生の学修意欲を促進し、学生間のコミュニケーションを促進するべく活用されるようになってきている。今年度 FD 研修会で行われた共同研究報告にあったように、教員の共通科目について各自の運用方法を情報共有する等を通し、各授業内、また教員間で効果を確認するためのシステムを構築していく必要がある。
- ⑤ 各教員の教育の振り返りは行われているが、それを学部内で共有するまでには至らなかったため、学部での統一的な教育点検が今後の検討課題である。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

- ① これまで以上に、各教員の FD に対する意識をより高めるため、多くの教員が参加しやすい FD 活動の機会を多く設け、本学部教員の資質向上を図る。教員の研究活動を教育にも生かせるような科目のあり方を議論していくと共に、多様性がキーワードとなる現代に適応した大学生を育てる教育力と研究力をさらに高めていく。

- ② 各科目や教員の教育成果や課題を学部内で共有し、互いの教育に活用していくため、電子ファイルあるいは文書など恒常的に入手閲覧の可能な情報として、保管し蓄積する仕組みを検討する。
- ③ 学部全体として科目共通の学生対象授業アンケートの実施を検討する。今年度は一部の科目で実施したところ、回答状況は良好で自由記述にも多くの建設的な回答が寄せられた。これまでリアクションペーパーや独自の授業アンケート等により、各教員が授業評価を実施し一定の成果を挙げてきているが、共通アンケートにより②の課題でもある成果や課題の共有や活用が見込まれる。

§ 観光学部

1 FD 活動への取組理念・目標

観光学部では、現在における観光の意義と役割、現状と課題を的確に理解し、適切な情報収集とその分析および異文化に対する理解を基礎に、高度な英語運用力を駆使してグローバル時代の観光ビジネス、地域活性化に貢献できる人材を養成する。

目標とする人材育成にあたり、教員全員が観光学部の理念、教育目標、そして、問題意識を共有することを目標とする。

2 学部における FD 活動の組織構成と役割

観光学部長、観光学科主任、教務主任、学生主任、FD 担当教員が中心となって FD 活動を実施する。学部の担当教員と大学 FD 委員は連携して活動計画を取りまとめ、主として研修会・ワークショップの運営にあたる。

3 平成 30 年度の活動内容

(1) 講演会 「障がいをもつ学生への支援事例および課題」

講師： 本学教職大学院・教授 安藤正紀先生

実施日： 4月26日(木) 18:00～19:00(質疑応答含)

場所： 玉川大学大学研究室棟 B107

① 概要(目的を含む)

本学では、障がいをもつ学生に対する支援については、現状、十分とはいえない。特に観光学部として、リスニングを含む TOEIC のスコアが卒業要件に絡むなど、その対応を事前に検討することは必要不可欠である。そこで、障がいをもつ学生への支援事例があり、多角的な視点から支援を検討・研究している安藤正紀先生にご講演いただき、観光学部として、障がいをもつ学生に対する今後の支援のあり方を検討したい。

② 到達目標

各種障がいをもつ学生に対して、どのように対応するのが適切か説明できるようになる。

③ 活動内容

本学教職大学院の安藤正紀教授にご講演いただき、本学部に在籍する障がいをもつ学生に対して、どのように対応すべきか検討した。さらに、本学には在籍はしないながらも、潜在的に事例が多い障がいについてもご紹介いただき、どう対応すべきかもあわせて検討した。なお、本講演会で議論した質問は下記の通りである。

【質問項目】

- ・発達障がい〔(高機能)自閉症、学習障がい、ADHD〕の具体例をご教授ください。
- ・ディスレクシアは学習障がいの1つです。これまでのご経験から、支援が比較的容易な学習障がいと、支援が困難であった学習障がいをそれぞれ具体例を挙げてご教授く

ださい。

・大学生の中には、隠れ ADHD が少なからずといると思います。彼らがそうした兆候を示したときには、発達障害者支援センター等で相談するように指導したほうが良いのでしょうか。

・現状、発達障がいがある学生の授業対応が学部として喫緊の課題である一方で、卒業後の就職先についてはまだ議論されておりません。学部として、障がいがある学生への就職支援はどのようにすべきでしょうか。

④ 評価

安藤教授による障がいを有する学生への支援事例と多角的な視点からご講演は非常に有用であった。特に、これまでのご経験から支援が比較的容易な学習障がいと支援が困難であった学習障がいとそれぞれ具体例については、大いに参考になった次第である。

(2) 調査

① 概要（目的を含む）

平成 31 年 3 月 22 日（金）14 時 00 分～15 時 00 分

学生の留学先であるメルボルン提携校の大学箇所を巡り、学生のインタビューを通じて、留学している学生の状況を理解する。

② 到達目標

留学する学生に対して、メルボルンに関する一定の見識を示せるようになる。

③ 活動内容

担当教員数名がメルボルン提携校を視察したうえ、学生らとの交流を通じて現状を把握し、帰国後、調査結果を報告する。

④ 評価

今年度から 3 月出発組が Swinburne 大学に留学することとなった。留学中の学生を含めて、留学生活が順調に進んでいることをご報告いただいた。

(3) 教職員相互の授業公開と参観

① 概要（目的・到達目標を含む）

教員相互で授業を参観し、各教員の教授法、教授内容について授業改善を行う。

② 活動内容

春学期、秋学期にそれぞれ 1 名ずつの教員の協力のもと、参観授業を行い、授業改善につながるよう担当教員と参加教員による振り返りを行う。

③ 評価

昨年と同様、参観できた教員が少なかったため、次年度も参観教員数を増やせるよう検討の余地がある。次年度は、観光学部すべての授業を原則参観授業の対象としたい。

(4) 学生による授業評価アンケート

① 概要（目的を含む）

観光学部観光学科の科目において、授業改善を目的とした授業評価アンケートを実施した。今年度は春学期および秋学期に実施している。

② 到達目標

学生の学修達成度を測り、改善点を踏まえて今後の授業運営に資すること。

③ 活動内容

観光学部開講科目でマーク式、記述式の授業評価アンケートを実施した。データの集計結果は科目担当教員に配付し、活用している。

④ 評価

観光学部授業評価アンケートの結果は下記の通りである。

春学期授業評価アンケート回答数は昨年度 646 に対して、今年度は 984 と増加した。主な原因として、授業評価アンケートの未提出等の人為的なミスがなくなったことが大きいと思われる。全体的な傾向として、19 ある質問項目のうち昨年度と比較して 6 項目が増加（内 6 項目が 0.1 ポイント増加）、2 項目が 0.1 ポイント減少していた。11 項目に変化はみられなかった。総じて上昇傾向にあると思われる。

秋学期授業評価アンケート回答数は昨年度 493 に対して、今年度は 510 と微増した。相変わらず、授業評価アンケートの未提出等の人為的なミスがあったものの、変化もわずかとその原因の特定には至らない。8 項目に変化はみられず、9 項目が 0.1 ポイント増加し、2 項目が 0.2 ポイント増加し、1 項目が 0.1 ポイント減少していた。春学期と同様に上昇傾向にあると思われる。

【春学期授業評価アンケート全体結果】

分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	8.5%	11.1%	30.1%	39.5%	10.8%	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.4	4.8%	8.7%	26.2%	43.6%	16.6%	12
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.2	39.8%	40.8%	16.8%	2.0%	0.6%	0
	4 シラバスは受講に役立った。	3.7	25.5%	33.0%	29.7%	8.8%	2.9%	0
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	46.2%	38.8%	12.0%	2.2%	0.7%	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	50.6%	35.4%	11.4%	1.9%	0.6%	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.3	50.9%	32.8%	12.4%	3.3%	0.6%	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.2	42.4%	36.5%	16.5%	3.7%	1.0%	0
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	44.4%	38.8%	13.5%	2.4%	0.8%	0
	10 基本的知識が得られた。	4.4	55.0%	34.6%	8.8%	1.3%	0.3%	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.2	42.8%	40.4%	13.9%	2.3%	0.5%	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	38.5%	36.8%	20.0%	3.9%	0.8%	0
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	39.9%	37.7%	18.1%	3.5%	0.8%	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.2	43.2%	37.1%	15.5%	3.1%	1.2%	2
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	48.8%	35.8%	12.0%	2.8%	0.6%	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.3	44.8%	39.0%	13.9%	2.0%	0.2%	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.2	42.4%	36.8%	16.2%	2.7%	1.8%	1
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.4	59.2%	28.6%	9.7%	1.8%	0.6%	3
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	58.7%	28.5%	10.3%	1.6%	0.8%	3

回答数：984

【秋学期授業評価アンケート全体結果】

分野	設 問	平均値	3時間以上	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満	まったくしていない	無効回答数
I	1 1回分の授業外の学習(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.7	10.8%	9.4%	29.1%	43.9%	6.7%	2
	2 上記以外で、この授業の理解を深めるために取り組んだ1回分の学習時間	2.6	9.1%	8.3%	27.9%	42.8%	11.9%	5
		この授業の平均値	よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない	無効回答数
			5	4	3	2	1	
II	3 この授業に積極的に参加した。	4.2	40.1%	41.3%	16.1%	2.4%	0.2%	1
	4 シラバスは受講に役立った。	3.8	28.9%	35.8%	25.6%	7.9%	1.8%	2
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.3	44.7%	41.7%	11.4%	2.0%	0.2%	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.3	50.5%	35.4%	12.0%	1.6%	0.6%	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.3	50.9%	35.2%	11.6%	1.2%	1.2%	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	48.9%	34.4%	13.9%	2.4%	0.4%	1
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	45.6%	36.9%	14.9%	2.0%	0.6%	1
	10 基本的知識が得られた。	4.4	54.6%	33.8%	10.6%	0.8%	0.2%	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.3	46.2%	37.1%	14.2%	2.0%	0.6%	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.2	41.8%	38.1%	16.7%	2.8%	0.6%	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.2	40.7%	40.6%	15.9%	2.4%	0.4%	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.2	45.8%	35.8%	14.7%	3.3%	0.4%	1
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.4	50.9%	37.1%	10.2%	1.4%	0.4%	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.4	54.4%	33.6%	10.8%	0.8%	0.4%	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.3	50.7%	32.9%	14.2%	1.4%	0.8%	3
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.5	63.3%	25.9%	8.8%	1.4%	0.6%	1
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.5	63.9%	26.5%	8.8%	0.8%	0.0%	1

回答数：510

4 昨年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

障がい有する学生に対する支援について、本学部としては初の支援対象となる学生が在籍することになったため、その関心も非常に高かったと思われる。ご講演いただいた安藤教授に改めて御礼を申し上げたい。参観授業については、春秋と 1 つの授業しか対象としていなかったため、対象となった授業に自身の授業等がバッティングしてそもそも参加できない教員も多かったと思われる。改めてたくさんの選択肢（参観授業）を用意する必要はありそうである。当初予定していた研究交流会については、年度末最後の学部教員懇親会で開催を目論んでいたものの、ご退職される教員が予想以上に多くいたため、次年度以降に改めて開催を検討することとしたい。

また、本年度から学部で本格始動させた「授業改善計画書」の運用は惨憺たるものであった。春秋ともに、授業評価の良し悪しを問わずに 1 授業の提出を求めたものの、2 割程度の提出しかない。授業の PDCA を実現させるためにも、FD 担当としてもっとアピールをしていく必要がある。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

平成 30 年度と同様に、学部 FD 研修会、講演会、参観授業、授業評価アンケートを実施する。年度末に際し、FDer の養成講座を受講した。そこでは、大学として取り組むべき FD とは何か、大学として教員に何ができるようになって欲しいのか、など今後議論されるべき点が多々あることわかった。同時に、観光学部 FD 活動が抱える課題が浮き彫りになり、改めて FD 活動は学部教員全員が取り組むべき活動であると再認識ができた。

そこで、昨年度からの改善として、参観授業については、原則すべての観光学部科目をその対象とし、翌々年度（令和 2 年）には、1 教員 1 つ以上の参観授業への参加を必須としていきたい。これによって、授業改善計画の実行と授業の PDCA の円滑運用を期待したい。

また、従来は一部の教員によって FD 計画が立てられてきたが、FD 活動はやはり学部教員全員で関わる活動であることを再認識する必要があるため、教学部長に適宜ご協力を仰いでいこうと考えている。これは、FD 活動への教員の協力（コミット）はある程度の権力を有する者の登場が有用であるという FDer 養成講座の中井講師のアドバイスによるものであるが、やらされ感をなるべくなくすよう善処したい。

3. 教師教育リサーチセンターの活動

1 教職課程 FD・SD 活動への取組理念

本センターは、大学における教職課程を運営するため、大学附置機関として設置された。主な業務内容としては、教職課程における学生支援と、教職に関する研究活動支援がある。研究活動支援の中には、教員養成における教職課程 FD・SD 研修も含まれており、教員養成の質を向上させることを理念・目標としている。

2 教師教育リサーチセンターにおける教職課程 FD・SD 活動の組織構成と役割

センター長、事務部長、課長を中心に教職課程 FD・SD 活動を計画し、課長補佐以下職員で研修会開催の実務を担当している。

3 平成 30 年度の活動内容

(1) 平成 30 年度 教職課程 FD・SD 研修会

① 概要（目的を含む）

「教育職員免許法等の改正と養成・採用・研修の一体化について」と題して、以下の「③活動内容」通りに研修会を実施した。

なお、各学部長、学科主任、教務主任、教務担当、教職担当は原則出席とし、関係部署所属の教職員にも出席を促した。

② 到達目標

以下活動内容の「内容（目的）」に示されているように、平成 27 年 12 月 21 日に示された中央教育審議会答申以降、教育職員免許法・施行規則の改正・一部改正に関わる省令公布を受け、教員養成大学としての具体的な役割について共通認識を持つ。さらに、装い新たに設置された「教職員支援機構」の取組を知る機会とする。

③ 活動内容

日 時：平成 31 年 3 月 5 日（火）10：00～11：30

場 所：大学研究室棟 B104

対 象：全学教職員

内 容（目的）：先の「教育職員免許法」の改正、「同施行規則」の一部改正に関わる省令公布により、より質の高い教員の養成・採用・研修についての具体的方策が示された。また、小・中・高等学校における新学習指導要領に基づく授業も順次始まっている。本研修では、これらを踏まえ、有識者による「養成・採用・研修の一体化」に向けて、養成大学が認識しておきたい事項について解説していただいた。また併せて、「養成・採用・研修の一体化」の拠点ともいえる「教職員支援機構」の取り組みや本学との連携についても報告した。

【プログラム】

1.開会挨拶 高橋正彦（教師教育リサーチセンター事務部長）

2.講 演 「新学習指導要領の取り組みと現状」

天笠 茂（千葉大学 特任教授）

「教員養成・採用・研修の一体化に求められるもの」

森山 賢一（教師教育リサーチセンター長、
教育学部・教育学研究科 教授）

④ 評価

始めに、天笠先生より、学習指導要領の改正を巡る経緯と新しい学習指導要領を通して求められている学校種別のポイントを纏めてお話し頂いた。加えて、文部科学省がこの改訂を通して目指す、学校が主体的・自律性を持って取り組むべき方向性を教職員及び児童生徒・保護者に向けて周知する取り組みの紹介があった。

続いて森山教師教育リサーチセンター長より、教員の資質向上を目的とした「教育職員免許法」の改正、「同施行規則」の一部改正を受けて作成された「教職課程コアカリキュラム」の活用とその審査の観点についての説明があった。加えて、各自治体の教員育成指標(=校長・副校長及び教員としての資質向上に関する指標)について、東京都の例を挙げて具体的な解説がなされた。最後は、本学が取り組んでいる教員養成における質保証をめざした取り組み状況について報告があった。

いずれの講演も法改正をうけて動き出した「養成・採用・研修」の一体化の流れを具体的にイメージすることが出来る内容で、教員養成大学にとっての課題と今後の実務に即した事項をご教授いただき、参加した教員、職員それぞれの立場で、理解を深めることができた。当日は、72名の出席者があった。

4 昨年度（平成 29 年度）に提案された予定・課題の達成度について

平成 29 年度は、「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画した。諸事情により「教師教育フォーラム」は中止となったが、「教職課程 FD・SD 研修会」は計画通り実施することができ、目標も達成することができた。

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

「教師教育フォーラム」及び「教職課程 FD・SD 研修会」各 1 回を開催するように計画したい。「教師教育フォーラム」は、引き続き「教職大学院」との共催により、大学全体としての教員養成への取組をふまえた内容で開催を予定している。

以上

4. ELF センターの活動

1 FD・SD 活動の取組に対する理念

教員ひとりひとりの教育の質が ELF プログラムの成果にとって重要である。したがって教員の資質向上が本プログラムの向上に必須であるというのが ELF センターの基本的な理念である。多くの ELF の授業が非常勤講師によって担当されているため、ELF センターは専任教員だけでなく非常勤講師の資質向上にも力を入れてきた。また、ELF センターにはさまざまな言語的・文化的背景を持つ教員がいる（フィリピン、フィンランド、ブラジル、ロシアなど）ため、FD 活動は互いの知識や経験から広く学ぶことができる有意義な機会と捉えている。

2 ELF センターにおける FD・SD 活動の組織構成と役割

ELF センターの FD 活動の告知や内容は ELF センター会によって決められている。予算やサポート等もこの会議で審議される。FD 活動の内容が決定された後、大学 FD 担当を中心に、ELF センターの作業部会の専任教員がその企画と実施を担当する。指導法、評価、e-learning など作業部会内にさまざまな分野に特化した教員のグループが存在し、CELFL Journal, CELF Forum, Research, CELF Orientation Meeting, Blackboard や ELF ワークショップなどの FD 活動を担当する。

3 平成 30 年度の活動内容

(1) 講演会・ワークショップの開催

①概要

センターは平成 30 年度も ELTama と合同で CELF-ELTama Forum for English Language Teaching を開催した。

②達成目標

- ・それぞれの FD 活動において非常勤講師に参加を促す。
- ・学園内の英語教師を集める。
- ・これらの活動によりセンターと英語教育関係の学会との関係、および教員同士のつながりを強める役割を果たす。
- ・玉川大学卒業生の中・高の英語の教員と言語学研究者の間の情報交換の場を提供する。
- ・これらの活動によってセンターの教員が一堂に会し、より良い教育実践に関する考えや研究成果を共有する機会とする。

③活動内容

以下のワークショップや発表大会が玉川大学の ELF Study Hall 2015 で開催された。

- ・ 8 月 23 日の CELF-ELTama Forum for English Language Teaching フォーラム

④ CELF-ELTama フォーラムの評価

約 60 名の参加があり、ELF センター教員に日常の研究・教育の成果を発表する機会を与え、その内容を共有することができた点では有意義な会であった。ゲストスピーカーの発表が素晴らしく、また学内の英語教師達が協力できたことが非常に良かったとの感想をいただいた。

昨年は CELF-ELTama フォーラムの参加者が少なかったため、今年の広報について努力をした点があった。

- ・ 開催二ヶ月前にはイベントのポスターを完成させ、昨年より早めに広報を始めることができた。
- ・ インターネット上で様々なホームページ（玉川大学のホームページ、JACET SIG、ELT Calendar）にイベントの広報ができた。
- ・ E メールリスト（CELF Mailing List, JACET SIG Mailing List）に CELF-ELTama フォーラムのイベントの広報ができた。

今年 CELF-ELTama フォーラムには 50 人の ELF 教員中、15 人が参加した。この中の 4 人程度が非常勤の先生だったので、今後の課題として、次回は非常勤の参加人数が増えるといい。最後に、発表した講師達が自らの発表を The Center for ELF Journal に論文を執筆する機会が少なかったため、平成 31 年度は両方可可能な仕組みを検討すると効果的と思われる。

(2) 研究会・ワークショップなど

① 概要

- ・ Blackboard の使い方に関しての理解を深めるワークショップや講演会を開催した。
- ・ ELF の理念に関する講義や意見交換を実施した。

② 達成目標

- ・ 非常勤講師が Blackboard の仕組みを理解し、円滑に利用できるようになる。
- ・ ELF の授業においてブレンド型学修（通常授業にオンラインを取り入れる学修）や自主的学修を積極的に取り入れることができるようになる。
- ・ ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・ 言語教育について教員間で知識を深める。

③活動内容

- ・ELF センター ミリナー, ブレット准教授、観光学部 コーテ, トラヴィス准教授による
非常勤講師対象 Blackboard ワークショップ 講義 (平成 30 年 4 月 16・17 日、10 月
15・16 日)
- ・ELF センター 石川友和助教による「ELF research and pedagogy application」講義
(平成 30 年 5 月 26・28 日)
- ・ELF センター チャイクル, ラサミ助教による「Using Internet resources to promote
ELF awareness」講義 (平成 30 年 6 月 26・27 日)
- ・チェンマイ大学、理事長、学士号プログラム: アデパタナン, ニチダー准教授による
「English Education for English Teachers in Thailand」講演 (平成 30 年 7 月 13 日)
- ・ハワイ、モアナルア高校、ELL プログラムコーディネーター: モアー, ジャナーによ
る「Approach to Tackle English Language Learning (ELL) and Students with
Learning Difficulties (LD).」講義 (平成 30 年 10 月 10 日)
- ・ELF センター ディモスキ, ブラゴヤ助教による「ELF Assessment ワークショップ」
(平成 30 年 11 月 16・19 日)
- ・ELF センター マクブライド, ポール准教授・チャイクル, ラサミ助教による
「Informal Discussion for CELF Teachers」(平成 30 年 12 月 5・7 日)
- ・ELF センター チャイクル, ラサミ助教・祐乗坊 由利 ジョディー助教による「Lunch
Time Meeting for CELF Teachers」(平成 30 年 12 月 7・8・9・11 日)
- ・ELF センター主催・石川友和科研費共催・大学英語教育学会 (JACET) 協賛
ELF センター リサーチ&FD ワークショップ 1 ファン・ファン による「English as
a Lingua Franca: Looking back from ELF1 to ELF11 conference and looking forward
with ELF pedagogy and assessment」(平成 31 年 1 月 18 日)
- ・FD ワークショップ 2 クーン・チェによる「Challenges of ELF-informed teaching
in the classroom: Insights from a classroom-based teacher development
programme」(平成 31 年 2 月 12 日)

④評価

ELF センターの教員は Blackboard を学内で最も活用し多用している。非常勤講師も同様であり、ほぼ全ての ELF の授業でこのシステムを授業内の活動、評価、ブレンド型学修の目的で使用している。Blackboard に関するワークショップが効果的であることが見てとれる。ELF センター チャイクル, ラサミ助教による「Using Internet resources to promote ELF awareness (平成 30 年 6 月 26・27 日)。ディモスキ, ブラゴヤ助教に

よる「ELF Assessment ワークショップ」(平成 30 年 11 月 16・19 日) ELF および言語意識に関するワークショップは教員の授業に対するアプローチに良い影響を与えてきた。ELF 所属教員対象のアンケート調査では、教員のほとんどが ELF の理念や概念をどのように授業に生かすかについて考慮していることが分かった。これらの教授方法の効果は学生の授業評価からも見ることができた。平成 27～30 年度の学生アンケートを比較したところ、平成 30 年度の学生の方が ELF に対する理解がより深いという結果となり、学生自身に与える影響を理解しているようであった。ELF センターの FD Special Lecture Event のテーマについては教員の興味のあるものを中心に選択しているが、普段は直接お話を聞く機会がない著名な学者に単発的に講演をお願いすることもあり(アデパタナン, ニチダー, モアー, ジャナー) そういった機会が、教員に動機の向上にもつながっている。

(3) ELF センター教員オリエンテーション

①概要

- ・ ELF センター教員のオリエンテーションを実施した。この行事は単に学期前の教員ガイダンスという要素だけではなく、ディスカッショングループ活動など様々な FD 活動を含んだ内容となっている。

②達成目標

- ・ ELF 研究について最先端の知識を深める。
- ・ ELF の理念について教員間で知識を深める。
- ・ ELF クラスを効果的に運営する知識を深める。

③活動内容

- ・ 非常勤講師を含む全 ELF 教員のオリエンテーション (平成 30 年 3 月 26 日)
- ・ 新任非常勤講師 3 名オリエンテーション (平成 30 年 9 月 12 日)

④評価

3 月は 39 名が参加した。オリエンテーションの後半、FD 活動の一環として参加者をグループ分けをし、20 分間のテーマ別(評価、Blackboard の利用、多読など)グループディスカッション(5～10 人)を 2 回行った。参加者にとってとても有意義な機会となった。オリエンテーション後、専任教員間で実施内容についての改善点を協議する予定である。

例年、年度途中の新任講師にオリエンテーションを実施している。

(4) 学生による授業評価アンケート

①概要

平成 30 年度の秋学期の最後に、ELF センター独自のオンライン授業評価アンケートを実施した。学生は授業の中でスマートフォンまたはパソコンを使用してアンケートに回答するように指示された。アンケートは 19 項目あり、学生は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF、ELF Study Hall 2015 に関する意識、チューター制度、多読などについて評価した。調査結果は教育プログラム策定の基礎資料となり、それぞれの教員にも自身の授業運営改善のために共有されている。

②達成目標

評価アンケート調査の目標は学生の ELF プログラムや教員の教授アプローチに対する観点や評価を得ることであった。また、調査結果はそれぞれの教員に自分の教授法に対する学生の評価をフィードバックするという目的もあった。

③活動内容

秋学期授業評価アンケートは 1,512 名（全学生 2,076 人の 73%）から回答を得た。

④評価

これらのアンケートのデータは ELF プログラムに対する評価として使用され、平成 31 年度の教育プログラムの構築のために使用されてきた。概ね学生は授業に対してとても満足しているという結果であった。それぞれの教員に学生からの評価を配付し、自身の指導の改善に役立ててもらった。平成 29 年度教員のフィードバックによると回数（年 2 回）が多いと言われ、平成 30 年度からは年 1 回とした。

(5) 教員による授業内容アンケート

①概要

平成 30 年度の秋学期の最後に、ELF センター独自の教員対象のオンラインアンケートを実施した。アンケートは 14 項目あり、教員は教科書、教授方法、Blackboard システム、TOEIC、ELF に対する意識、センターから受けるサポートの質について評価した。調査結果は教育プログラムの計画や研究の目的で使用された。

②達成目標

- ・多様な教員のニーズにどのように応え、より効果的にサポートを行うかについての情報を収集すること。
- ・カリキュラムを改革すること。

③活動内容

秋学期アンケートは 20 名（41%）から回答を得た。

④評価

今年度も全教員から回答を得ることはできなかった。平成 29 年度の秋学期と同じようにアンケートはメールに埋め込んだところ、回答数が若干増えたが半数以上の教員が答えなかった。ELF センターとしてどのように非常勤講師をサポートすれば良いかについて有意義な情報を得られる機会であるため、今後はより多くの回答を得られるようにアンケートへの協力を喚起したい。しかしながら今回のアンケートから得られた情報は教科書の選定に役立ち、教員のサポートをどのように効果的に行うかについて知ることができた。また、教員の ELF に対する理解が深まっていることがアンケートから知ることができた。

(6) ジャーナルの出版

①概要

平成 30 年 3 月、2 人の査読者（外部 1 名）がそれぞれの投稿論文を審査する The Center for ELF Journal の第 5 号を発行した。

②達成目標

ジャーナルの達成目標は以下の通りである。

- ・授業運営を改善する。
- ・自発的学修についてのアイデアを共有する場を設ける。
- ・教員間で高い学識を探究する。
- ・ELF に対する学識を共有する。
- ・ELF センター所属の教員に効果的な FD の場を設ける。

③活動内容

- ・The Center for ELF Journal 第 5 号を発行した。

第 5 号各 100 部を学内や学外に配付した。国会図書館、玉川大学教育学術情報図書館にも寄贈し、玉川大学学術リポジトリにおいて公開し、ELF センターの HP にも掲載している。さらに、教員のアカデミックポータル (academia.edu, REAP, Google Scholar, Research Gate など) にも掲載している。

④評価

The Center for ELF Journal は教員に配付され、筆者自身も出版されたものに満足しているようであった。このジャーナルをオンラインで閲覧できるようにすることで、より多くの研究者が我々の論文を手にとることができ、他の論文にも引用されるようになると考えられる。

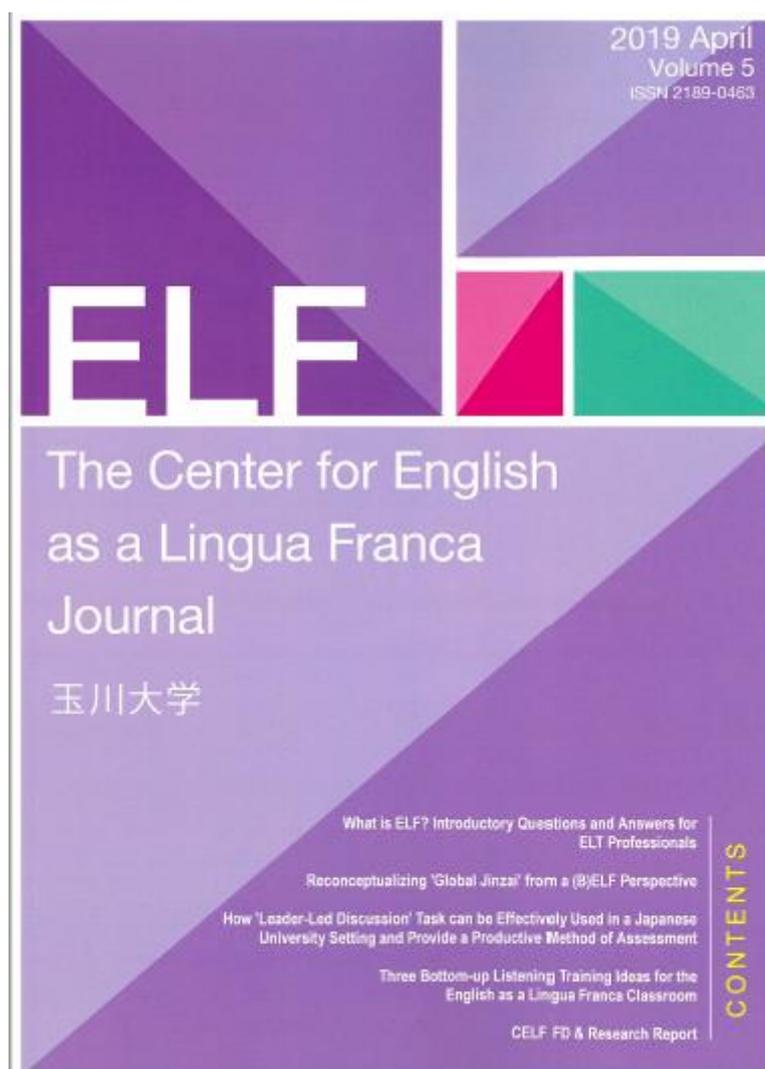


図 1. *The Center for ELF Journal* 第 5 号

4 今年度（平成 30 年度）に提案された予定・課題の達成度について

今年度初めに提出された全ての予定・課題が実施された。FD Workshop に関しては、少なくとも毎月 1 回行い、特に、特別支援が必要な学生への対応方法の勉強会や日々の教育課題について非常勤講師と共に話し合える場を設けるなど、新たな取り組みを行った。今年度のセンター発刊のジャーナルでは *ELF Pedagogy* に焦点を当て、活発な研究活動を記載している。表 1 は平成 30 年度の *ELF* 専任教員の研究活動をまとめたものである。

表 1. 平成 30 年度 4-9 月の ELF 専任教員の研究活動

発表・出版	数
国際発表	21
国内発表	41
論文を投稿・出版	18
科学研究費助成事業	8

表 2. 平成 30 年度の ELF 専任教員の論文を投稿・出版

査読の有無	論文・著書	著者
無	Milliner, B., & Dimoski, B. (2018). A report on faculty development and research at the Center for English as a Lingua Franca. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 4, 56-81. Retrieved from http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final4_06.pdf	Brett Milliner & Blagoja Dimoski
有	Oda, M., & Toh, G. (2018). Significant encounters and consequential eventualities: A joint narrative of collegiality marked by struggles against reductionism, essentialism and exclusion in ELT. In B. Yazan & N. Rudolph (Eds.), <i>Criticality, Teacher Identity, and (In)equity in English Language Teaching: Issues and Implications</i> (pp. 219-216). Cham: Springer.	Masaki Oda & Glenn Toh
無	Oda, M. (2019). Beyond Global English(es): university English program in transition. In K. Murata (Ed.), <i>English-Medium Instruction from an English as a Lingua Franca Perspective: Exploring the Higher Education Context</i> (pp. 259-270). London: Routledge. 259-270.	Masaki Oda
有	Oda, M. (2018). A Post-EFL approach to the administration of English language programs. <i>JACET ELF SIG Journal</i> , 2, 30-38.	Masaki Oda

有	Milliner, B., & Chaikul, R. (2018). Extensive listening in the ELF Classroom with ELLLO. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 4, 36-50. Retrieved from http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final3.pdf	Brett Milliner & Rasami Chaikul
有	Okada, T. (2018). Voices of language learners in improvisations. <i>The Center for English as a Lingua Franca Journal</i> , 4, 26-35. Retrieved from http://www.tamagawa.ac.jp/celf/research/pdf/celf_journal_final4_03.pdf	Tricia Okada
有	Mishina-Mori, S., Nagai, Y., & Yujobo, Y. J. (2018). Cross-linguistic influences in the use of referring expressing in school-age Japanese-English bilinguals. In A. B. Bertolini & M. J. Kaplan (Eds.), <i>Proceedings of the 42nd Annual Boston University Conference on Language Development, Volume 2</i> (pp. 546-557). Boston, USA: Cascadilla Press.	Satomi Mishina-Mori, Yuki Nagai & Yuri Jody Yujobo
無	Mishina-Mori, S., Nagai, Y., & Yujobo, Y. J. (2018). Referent Introduction and Maintenance in the English Narratives of Monolingual and Bilingual Children. <i>Intercultural Communication Review - Rikkyo Graduate School of Intercultural Communications</i> , 16, 5-16.	Satomi Mishina-Mori, Yuki Nagai & Yuri Jody Yujobo
有	Ishikawa, T. (2018). From native-speakerism to multilingualism: A conceptual note. <i>JACET ELF SIG Journal</i> , 2, 9-17.	Tomokazu Ishikawa
無	Ishikawa, T. (2018). Cutting-edge research 英語教育研究最前線 第13回 English within multilingualism for transcultural communication. <i>The English Teachers' Magazine 英語教育 (Taishukan 大修館書店)</i> , 6, 70-71.	Tomokazu Ishikawa
有	Murata, K., Ishikawa, T., & Konakahara, M. (2018). Introduction: ELF and assessment. <i>Waseda Working Papers in ELF</i> , 7, 1-10.	Kumiko Murata, Tomokazu Ishikawa & Mayu Konakahara

有	Ishikawa, T. (2018). Review: The Routledge Handbook of English as a Lingua Franca. <i>ELT Journal</i> , 72(4), 455-458. Doi: https://doi.org/10.1093/elt/ccy032 .	Tomokazu Ishikawa
有	Leichsenring, A. (2018). Japanese learners' self-perceptions of their L2 English user identity development. <i>International Conference on Education, Psychology and Learning, ICEPL Summer 2018</i> (pp. 17-30). Tokyo, Japan: ICEPL.	Andrew Leichsenring
有	Mishina-Mori, S., Kawanishi, Y., Nagai, Y., & Yujobo, Y. J. (2018). Telling Stories in the Socially non-dominant language- An analysis of referring expressions among Japanese-English simultaneous and successive bilinguals. <i>JSLs 2018</i> , 188-189	Satomi Mishina-Mori, Yumiko Kawanishi, Yuki Nagai & Yuri Jody Yujobo
有	Hougham, D., Barr, B., Milliner, B., & Cowie, N. (2018). JALTCALL 2018: Reflections on the Learner Development SIG forum. <i>Learning Learning</i> , 25(2), 66-71. Retrieved from http://ld-sig.org/wp-content/uploads/2018/11/LL25.2_WHOLE-ISSUE.pdf	Daniel Hougham, Blair Barr, Brett Milliner & Neil Cowie
有	Yujobo., Y. (2018) When ELF Meets BELF: Building business communication into ELF-informed curriculum. In S. Madya, F. A. Hamied, W. A. Renandya, C. Coombe, & Y. Basthomi (Eds.), <i>ELT in Asia in the Digital Era: Global Citizenship and Identity: Proceedings of the 15th Asia TEFL and 64th TEFLIN International Conference on English</i> (pp. 153-160). London, England: Routledge. Doi: https://doi.org/10.1201/9781351217064	Yuri Jody Yujobo
有	Cote, T., & Milliner, B. (2018). A survey of EFL teachers digital literacy: A report from a Japanese university. <i>The Journal of Teaching English with Technology</i> , 18(4), 71-89.	Travis Cote & Brett Milliner
無	Milliner, B.(2018). Foreword to special issue-JALT Yokohama Technology MyShare. <i>Accents Asia</i> , 11(1),1-1. Retrieved from http://www.issues.accentasia.org/issues/10-2/Milliner%20.pdf	Brett Milliner

5 今後（平成 31 年度以降）の予定・課題について

平成 31 年度には、全ての学部・学科が ELF 科目を履修することになり、ELF の授業規模がさらに拡大する。春学期は 2,209 人、秋学期は 2,076 人（総計 4,285 人）の学生の英語教育を担うことになる。また、前期と後期を合わせて 9 人の新しい教員を迎え入れることになり合わせて、ELF センターの専任教員 10 人と非常勤講師は 36 人になり、さらにさまざまな国籍の専任教員と非常勤講師で ELF センターが構成されることになる。FD 活動はこれらの背景を考慮した試みが必要であると認識している。我々は以下の項目の実施によって ELF プログラムをより効果的に運営するよう努めたい。

1. ELF センター主催の FD ワークショップを学内公開
2. 春・秋学期の Blackboard と e-learning のワークショップ
3. The Center for ELF Journal の更なる充実
4. ELF の概念に関する講義
5. ELF の概念を生かした教授法に関する講義
6. 言語教育に関する講義や意見交換を実施する機会
7. 学会と共同で実施される英語教育に関する研究会
8. 学生や教員による授業評価アンケート
9. 効果的な教員オリエンテーション
10. ハラスメント研修を実施

5. ユニバーシティ・スタンダード科目の「授業評価アンケート」

1. アンケート実施概要

(1) 概要

平成30年度春・秋学期において、それぞれ最終授業にて実施（一部、科目担当者の都合等により補講・定期試験期間中に実施）した。対象科目はユニバーシティ・スタンダード（以下、US）科目である。

春学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目、教育学部開講の一部の科目は除く）

秋学期：US 科目（但し、実験実習実技科目、教職関連科目群、資格関連科目群、工学部開講の US 科目は除く）

実施担当者数、実施開講クラス数及び回答学生数は次のとおりであった。

実施担当者数：春学期＝227名／235名（96.6%）

秋学期＝201名／211名（95.3%）

実施開講クラス数：春学期＝400クラス／412クラス（97.1%）

秋学期＝340クラス／355クラス（95.8%）

回答学生数：春学期＝13,274名／15,671名（84.7%）

秋学期＝11,693名／15,024名（77.8%）

(2) 実施時期

春学期：7月17日（火）～7月23日（月）

秋学期：1月18日（金）～1月24日（木）

※春・秋学期ともに一部の科目については補講・試験期間中に実施。

(3) 実施方法

春学期・秋学期ともに、科目担当者がアンケート用紙を配付、実施した。回答用紙の回収についてはクラスの代表（科目担当者が指名）が回収し、最寄りの事務室に提出することとした。

(4) 調査用紙（p.129 参照）

2. 集計結果及び公表

集計は前年度及び今後のデータの比較分析を考慮し、クラス別及び次の分類別に行った。

US 科目全体、玉川教育・FYE 科目群「一年次セミナー101」、「一年次セミナー102」、人文科学科目群、社会科学科目群、自然科学科目群、学際科目群、言語表現科目群

また、集計結果は、クラス別集計については科目担当者にのみフィードバックし、上記8分類についてはその平均値をホームページで公表している。

平成30年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 13274

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	189

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	8
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	34
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	32
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	15
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	19
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	9

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	15
	10 基本的知識が得られた。	4.2	13
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	24
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	24
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	24
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	46

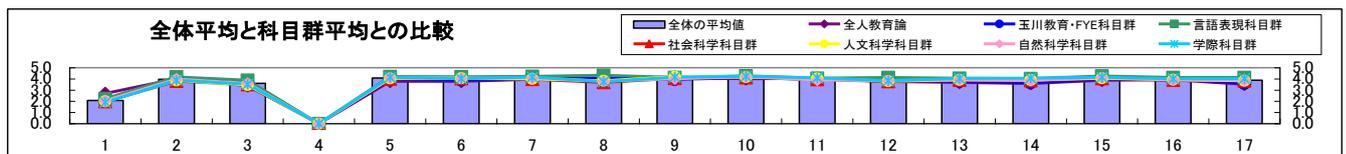
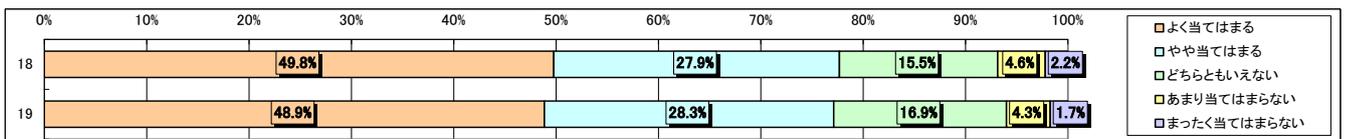
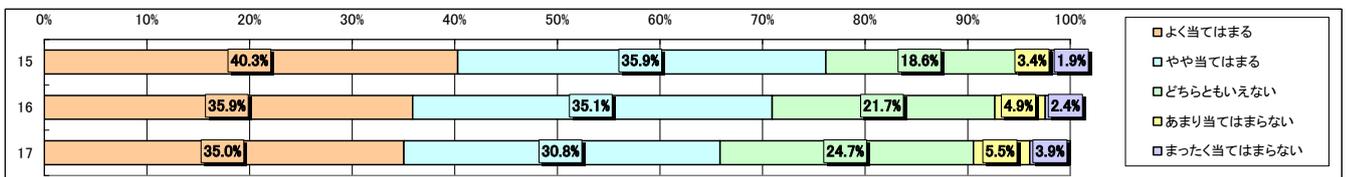
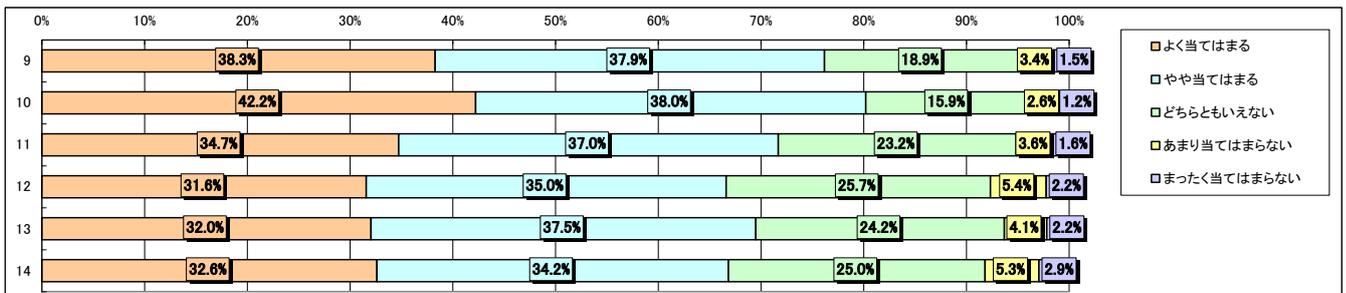
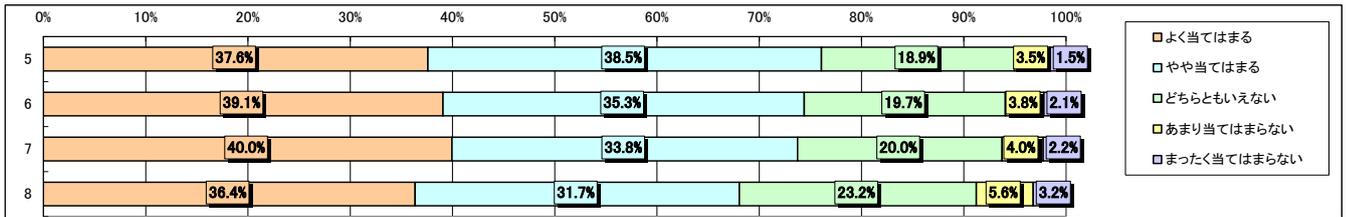
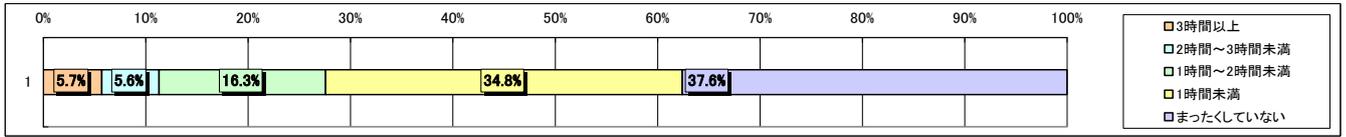
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	21
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	18
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	31

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	45
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	45

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	49.2%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	22.9%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	43.1%
	その他	5.1%

◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



平成30年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次ゼミ- 101

回答数(全体): 1667

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	26

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

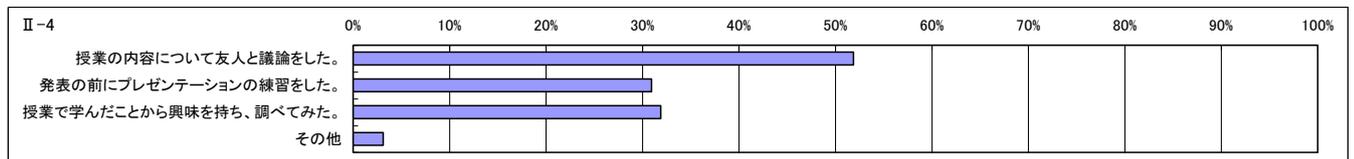
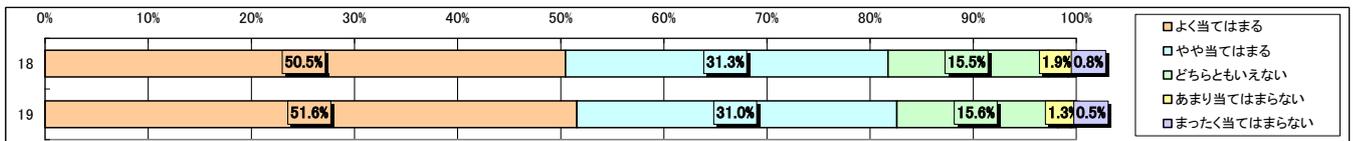
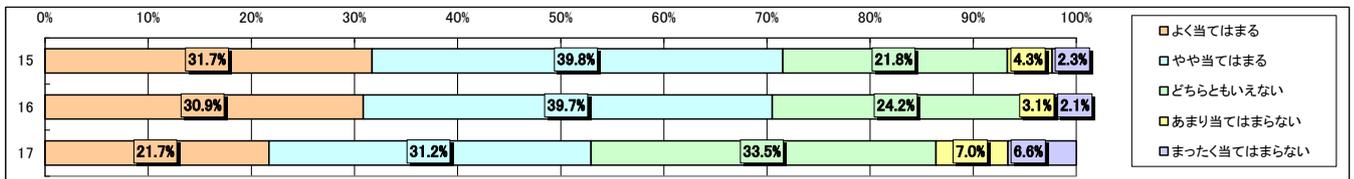
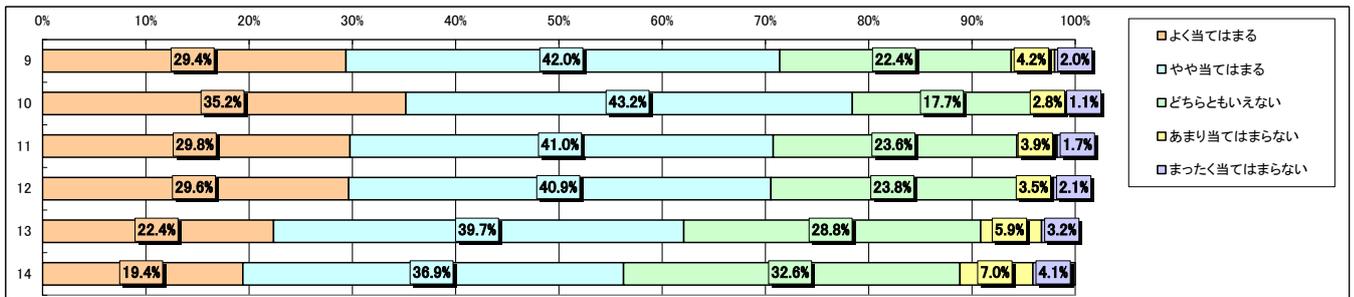
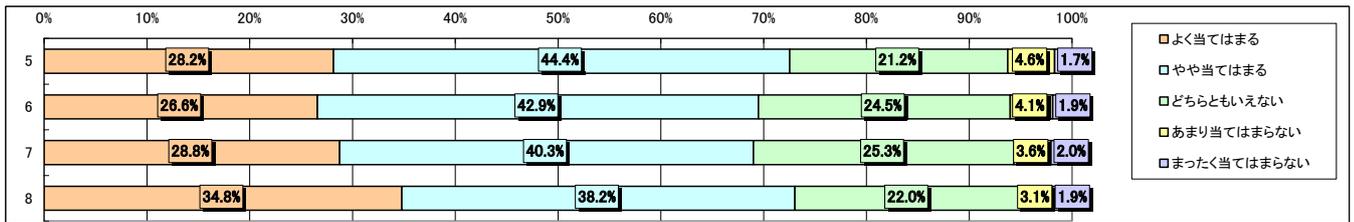
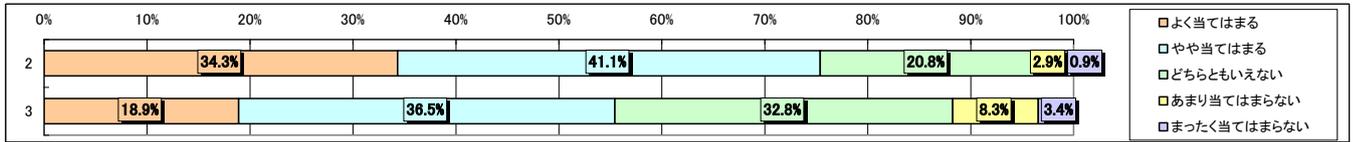
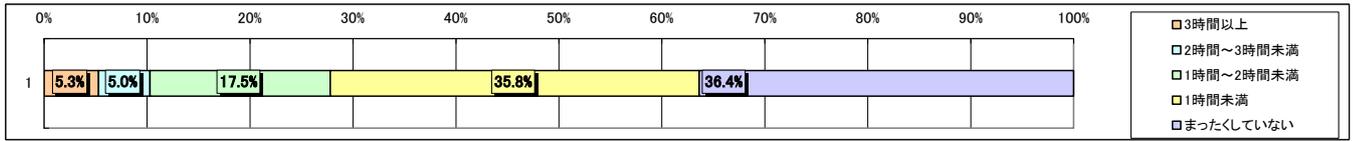
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	3.9	2
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	3.9	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	3.9	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.0	1

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	3.9	3
	10 基本的知識が得られた。	4.1	4
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.7	5
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.6	7

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	3.9	5
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	5
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.5	5

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	7

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	51.9%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	30.9%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	31.9%
	その他	3.1%



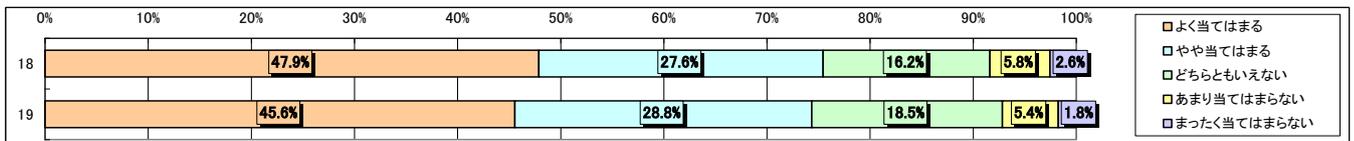
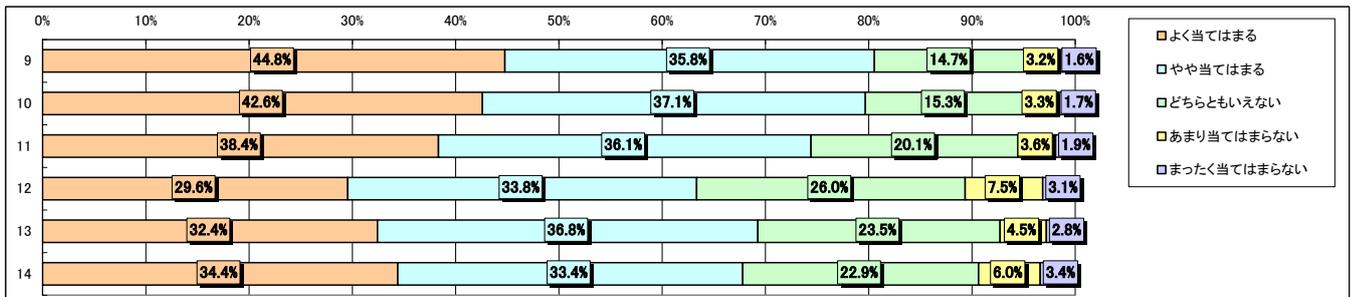
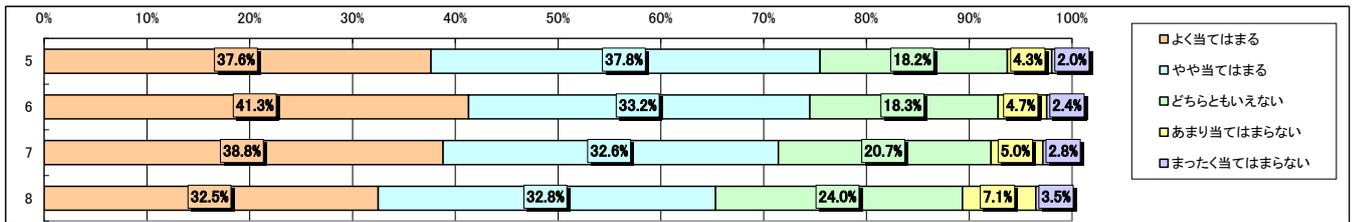
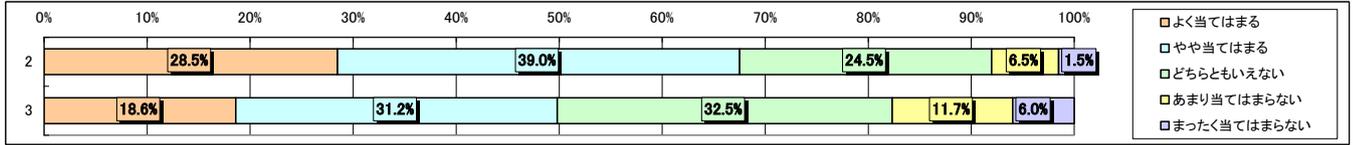
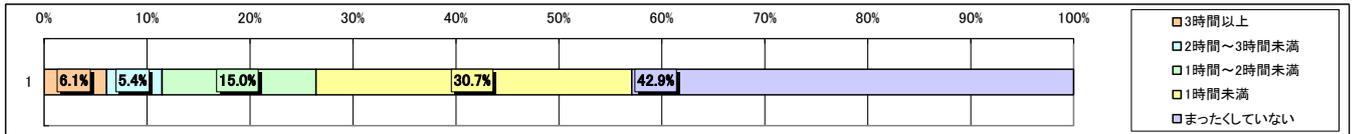
平成30年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2907

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	45
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	7
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	4
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	2
	10 基本的知識が得られた。	4.2	3
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	3
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	6
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	5
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	6
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	5
集計・ 分析 結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	48.2%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	7.8%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	54.7%	
	その他	5.3%	



平成30年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 2295

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	22

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	5
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II-4】につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

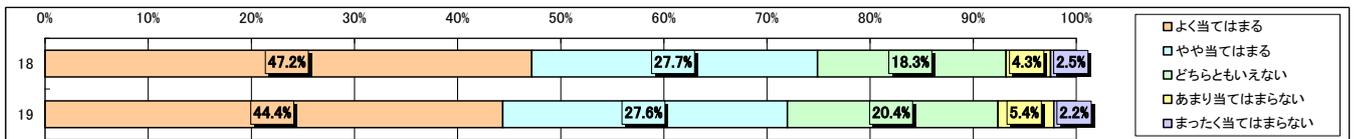
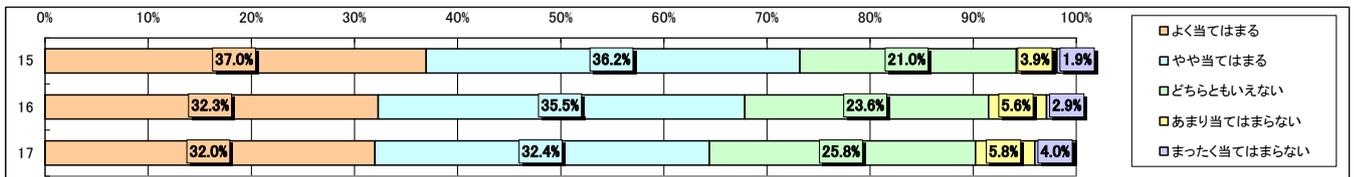
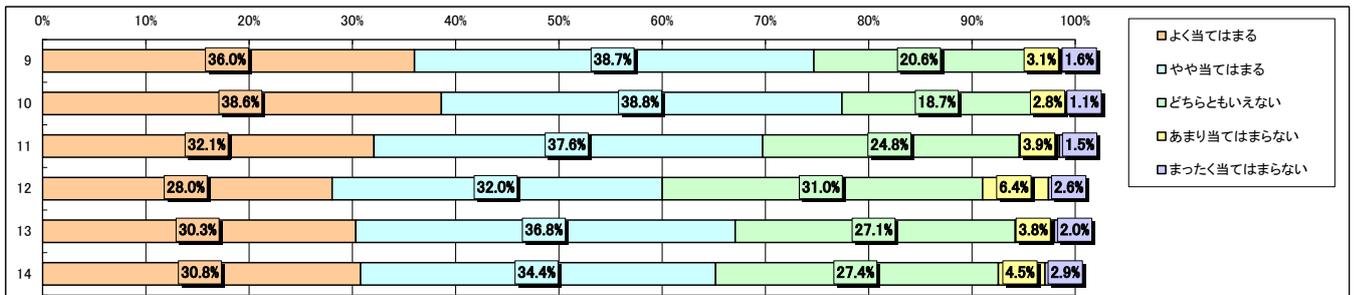
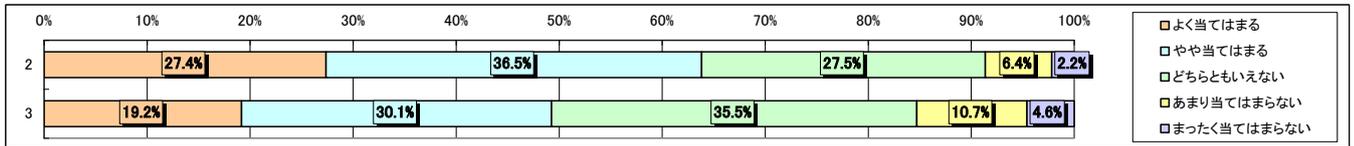
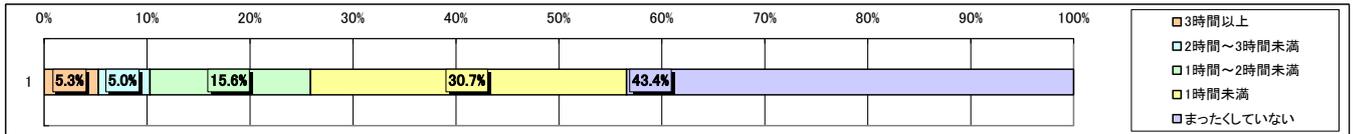
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	6
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	1

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	2
	10 基本的知識が得られた。	4.1	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	6
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	6

分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	1
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	4

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	6

集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	47.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	15.1%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	48.4%
	その他	3.9%



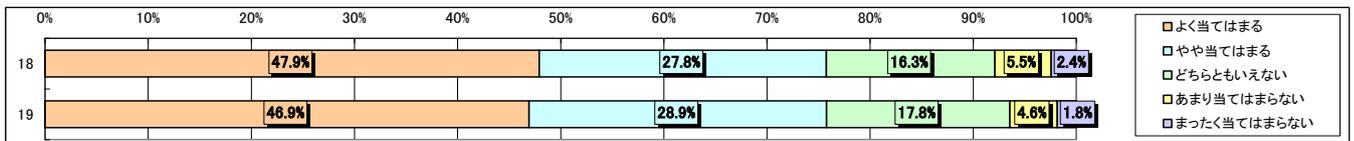
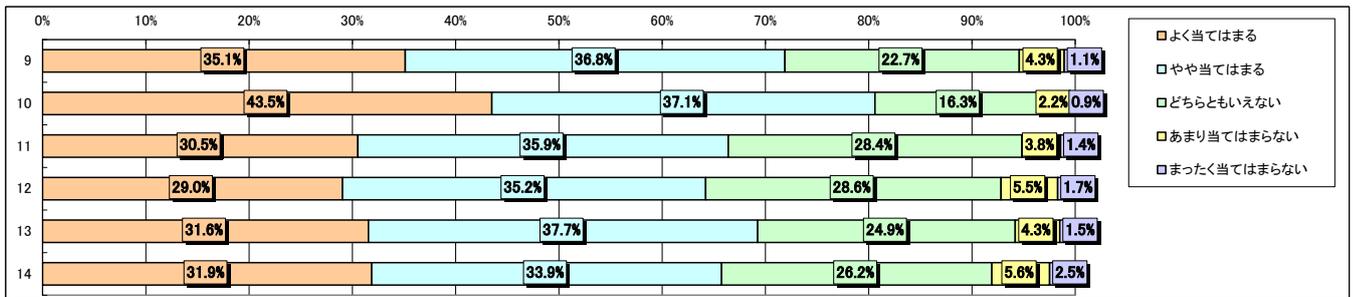
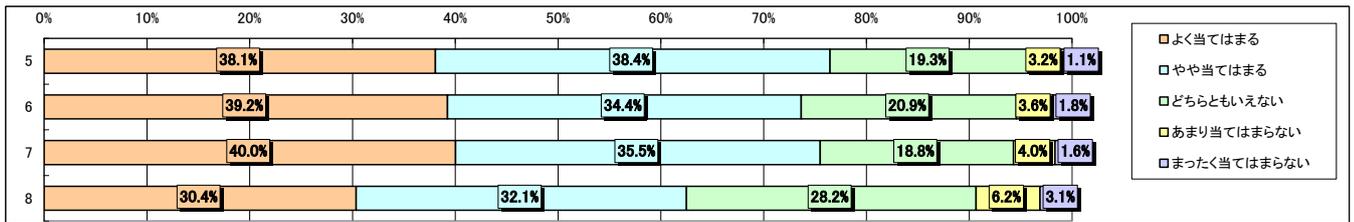
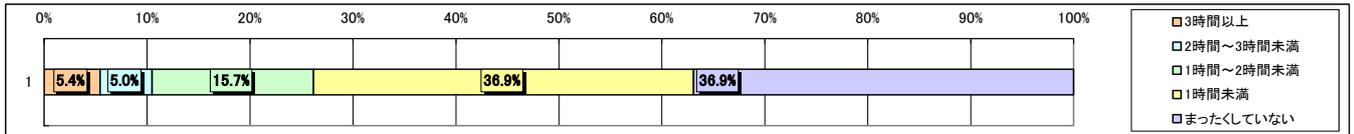
平成30年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 2557

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	40
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	7
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	3
	10 基本的知識が得られた。	4.2	4
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	6
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	7
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	13
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	5
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	4
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	10
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	11
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	13
集計・ 分析 結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	49.2%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	17.4%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	41.7%	
	その他	4.8%	



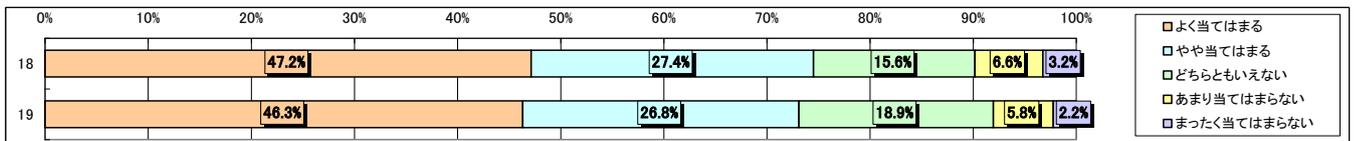
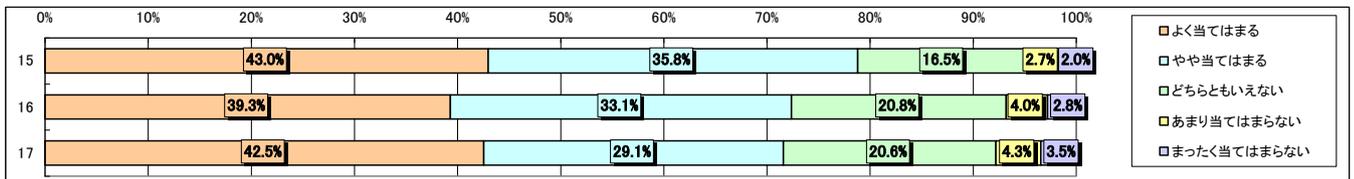
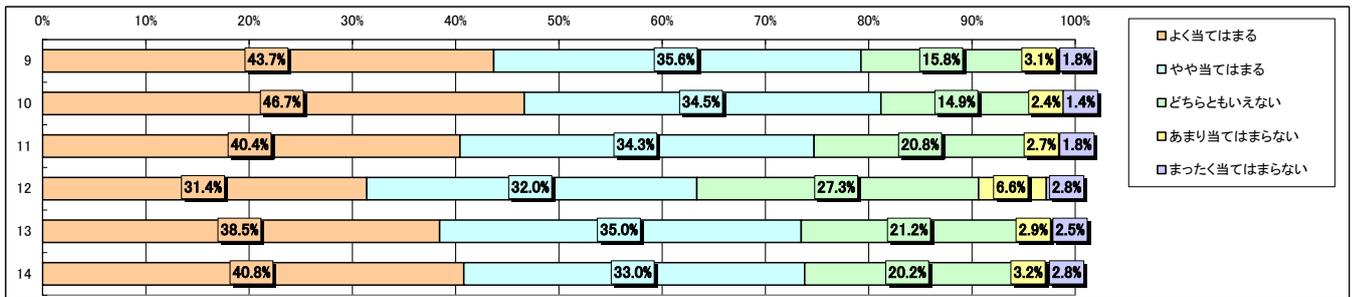
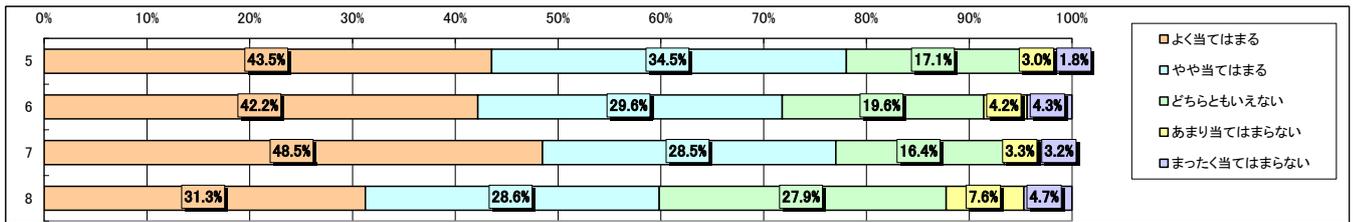
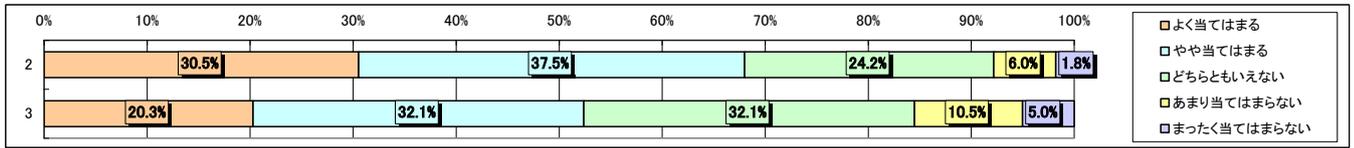
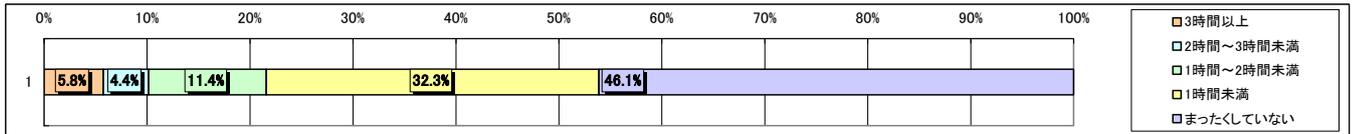
平成30年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 899

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	14
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.5	2
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	2
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.7	0
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	2
	10 基本的知識が得られた。	4.2	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	1
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	1
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.1	2
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	1
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	3
集計・ 分析 結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	45.2%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	3.5%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	60.7%	
	その他	4.5%	



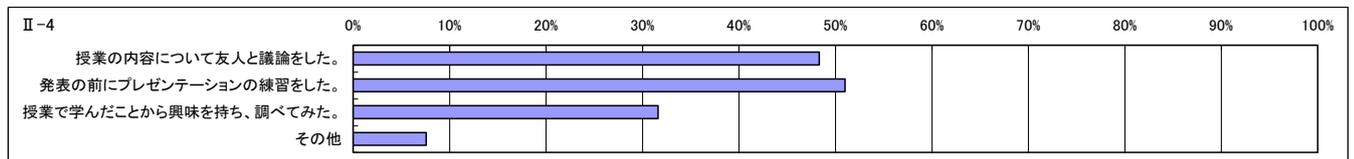
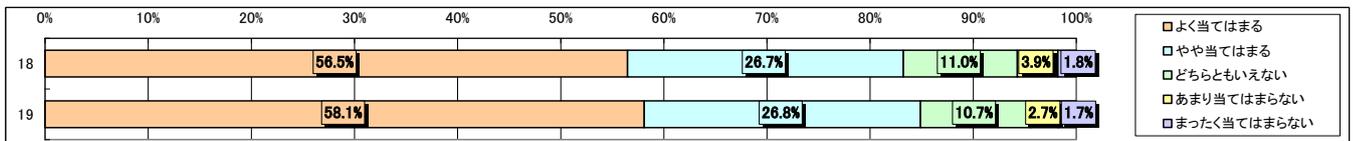
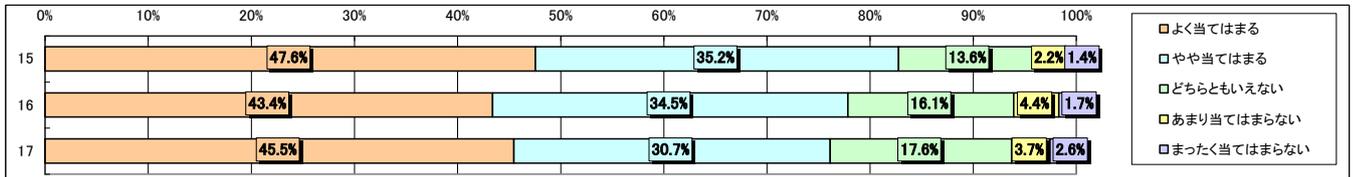
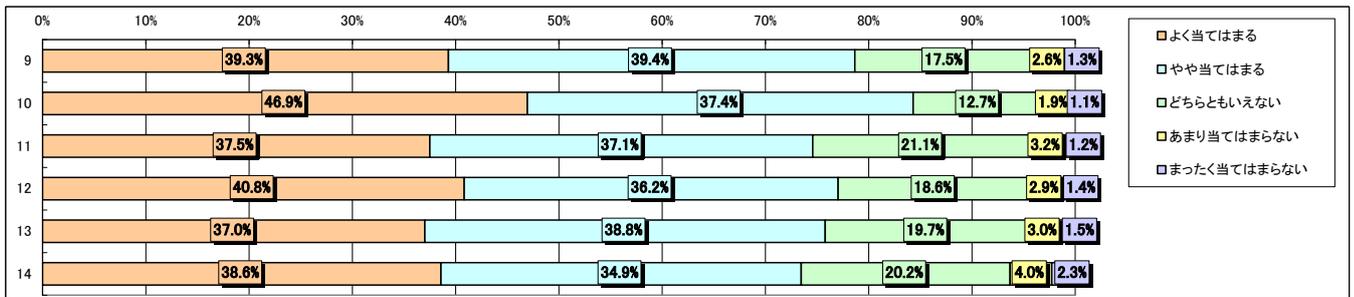
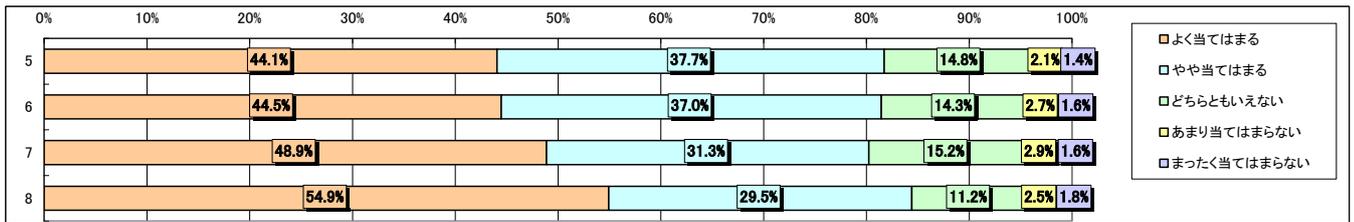
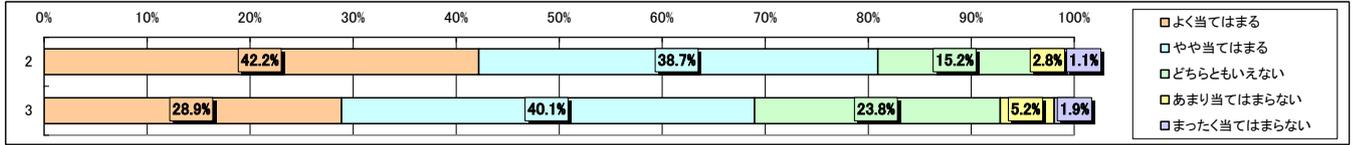
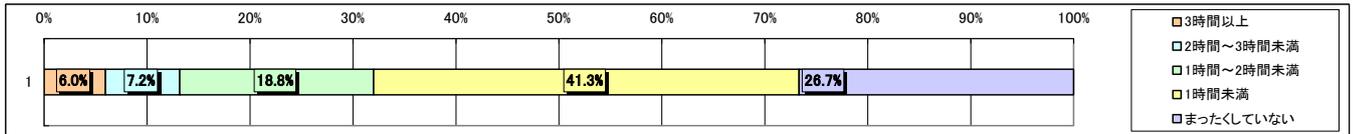
平成30年度 春学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2473

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	39
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.2	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.9	7
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.2	9
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.2	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.2	4
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	1
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	3
	10 基本的知識が得られた。	4.3	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.1	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.1	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	11
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.3	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	3
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	5
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	9
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.4	10
集計・ 分析 結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	48.3%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	51.0%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	31.6%	
	その他	7.6%	



平成30年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目全体

回答数(全体): 11693

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	191

分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	11
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	38
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	

分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	58
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	20
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	16
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	22

分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	12
	10 基本的知識が得られた。	4.1	11
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	30
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	27
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	25
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	27

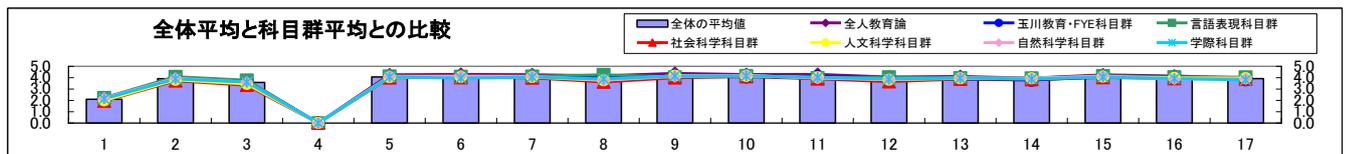
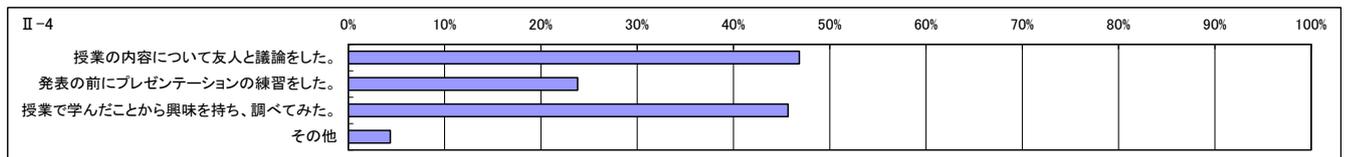
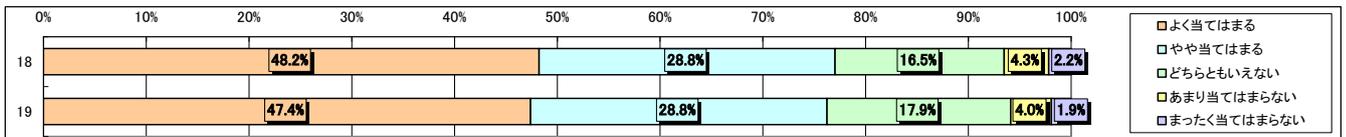
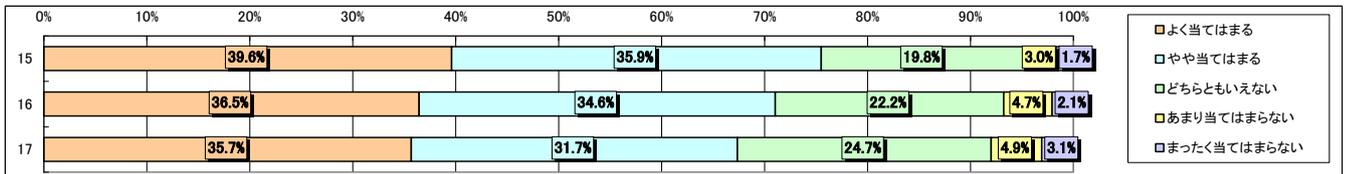
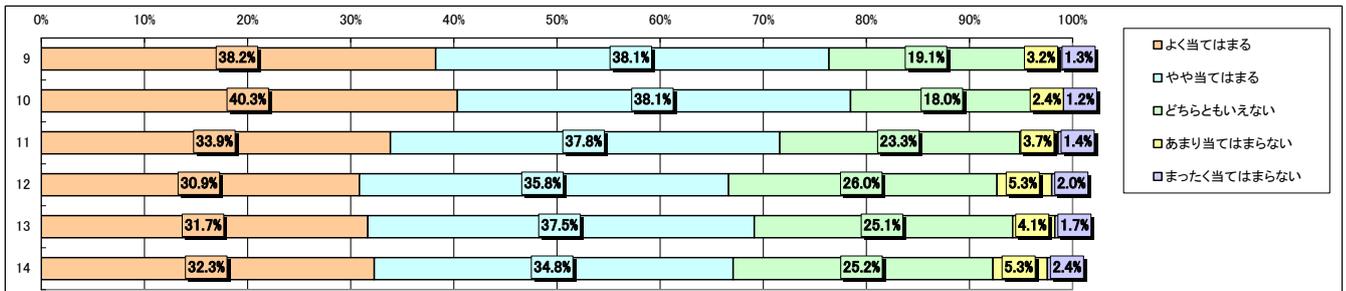
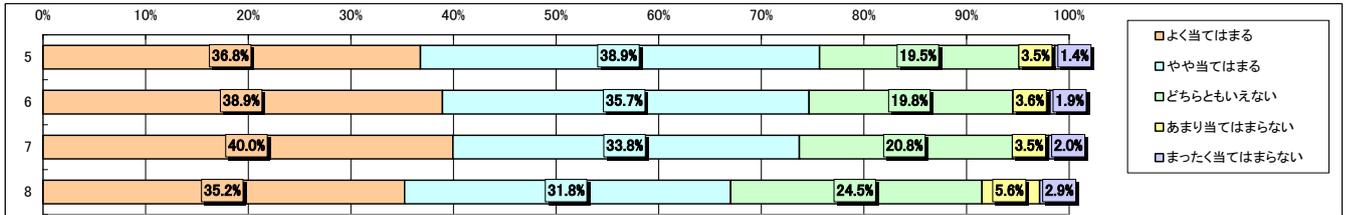
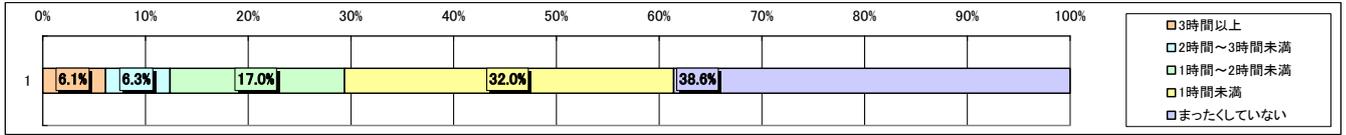
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	16
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	15
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	31

分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	35
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.2	31

集計・分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)	
	授業の内容について友人と議論をした。	46.8%
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	23.8%
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	45.7%
	その他	4.4%

◎平均値について
質問項目毎に「無効」を除いた平均値
平均値=(「5」回答数×5+「4」回答数×4+「3」回答数×3+「2」回答数×2+「1」回答数×1)/回答数小数点第2位四捨五入

◎無効数について
無答、複数回答、記入ミスの数



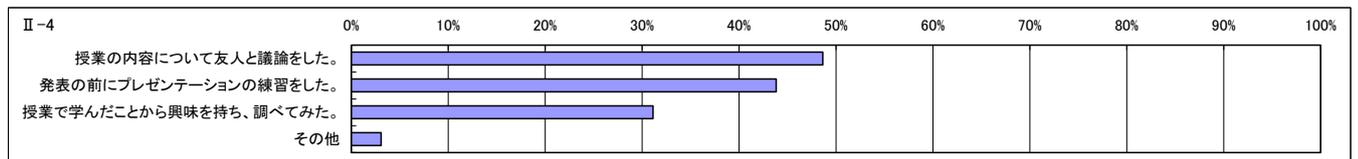
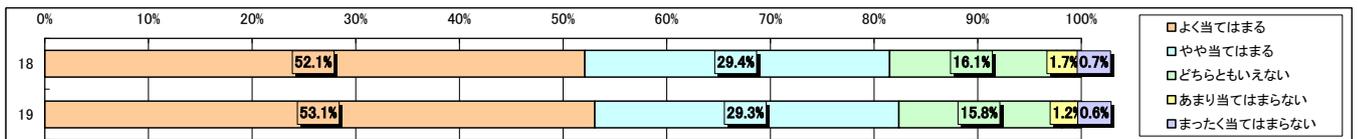
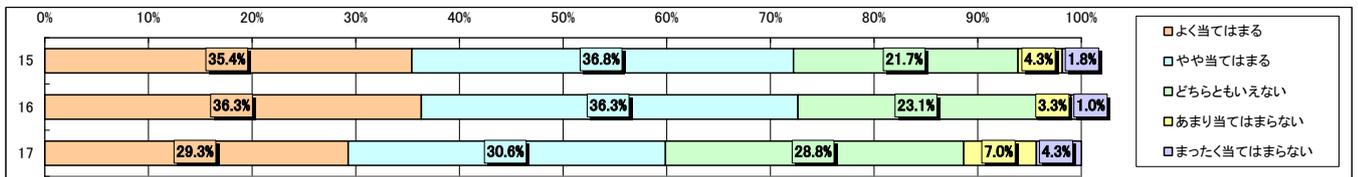
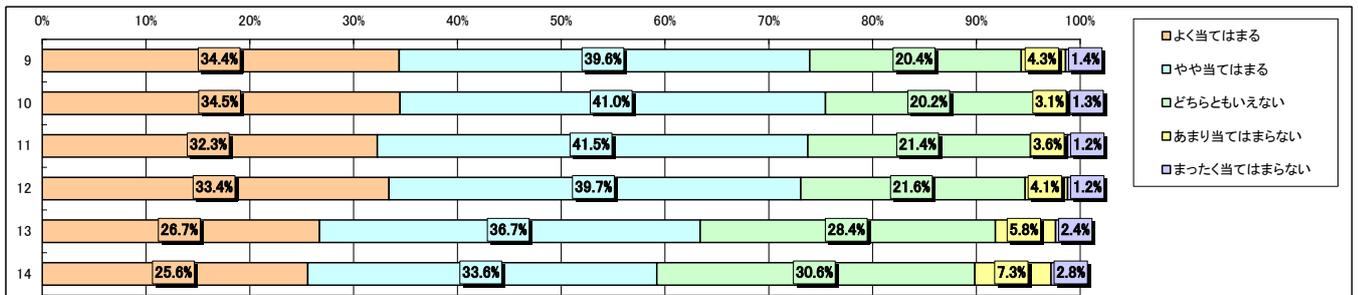
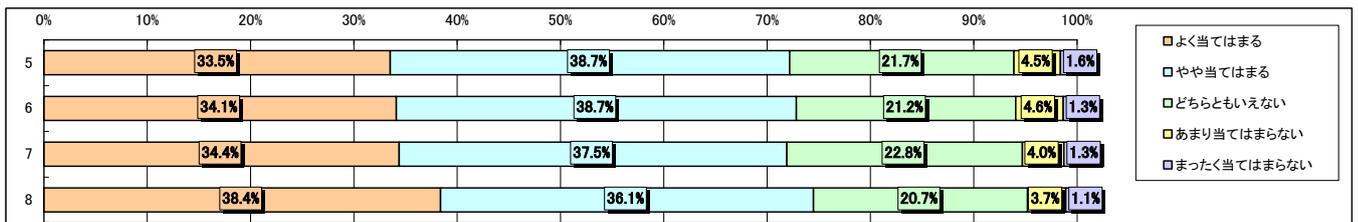
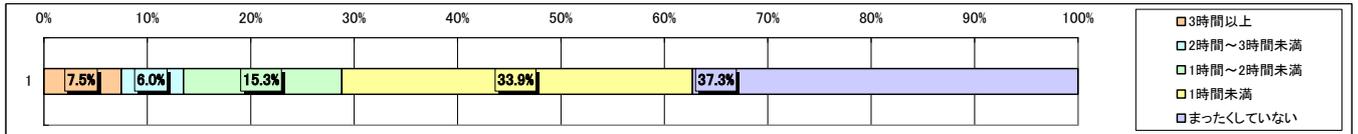
平成30年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 玉川教育・FYE科目群 一年次セミナー 102

回答数(全体): 1570

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	22
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.0	0
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.7	1
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	13
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	2
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	0
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.1	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	0
	10 基本的知識が得られた。	4.0	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	3
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.0	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.8	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.7	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.7	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	2
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	48.6%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	43.8%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	31.1%	
	その他	3.1%	



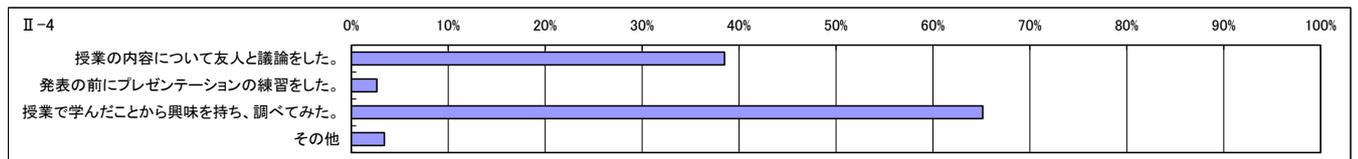
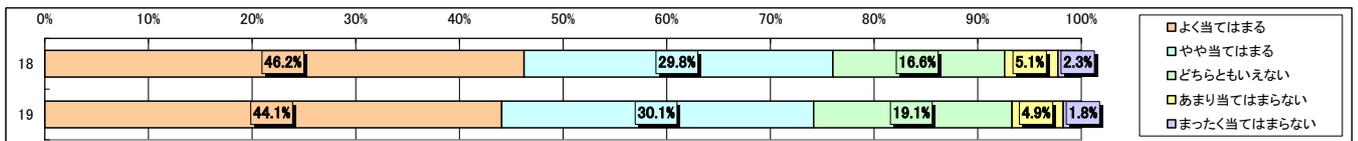
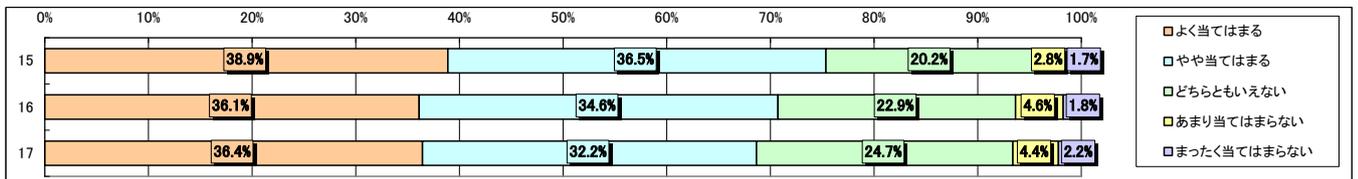
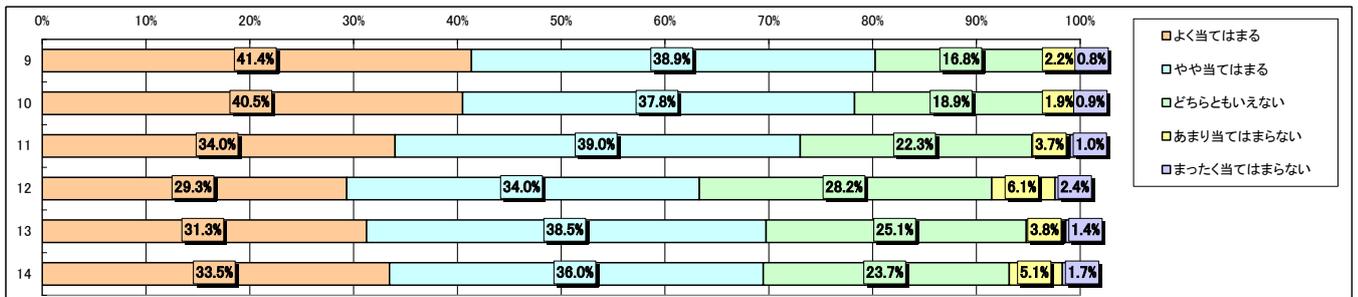
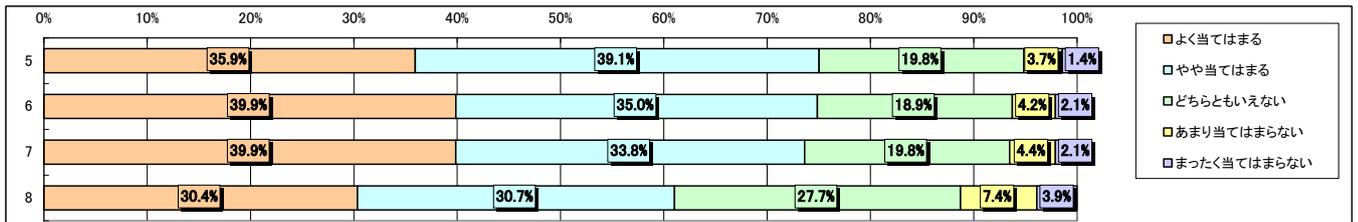
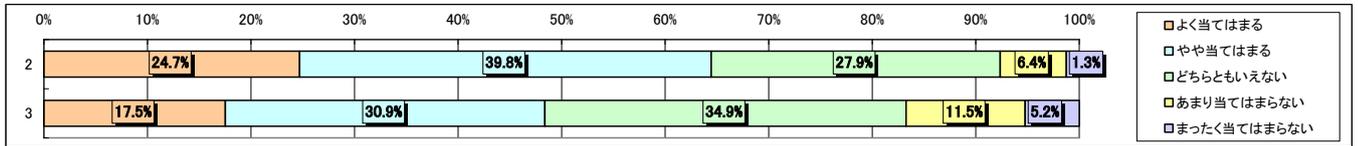
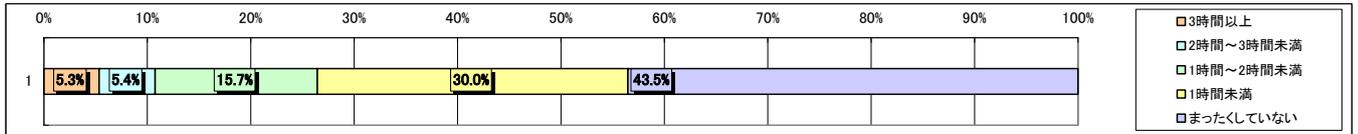
平成30年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 人文科学科目群

回答数(全体): 2399

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.0	39
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.8	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.4	8
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	12
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	4
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	6
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	4
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.2	3
	10 基本的知識が得られた。	4.2	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	11
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.8	3
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	6
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	11
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	5
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.0	4
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.0	6
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.1	9
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	6
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	38.5%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	2.6%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	65.1%	
	その他	3.4%	



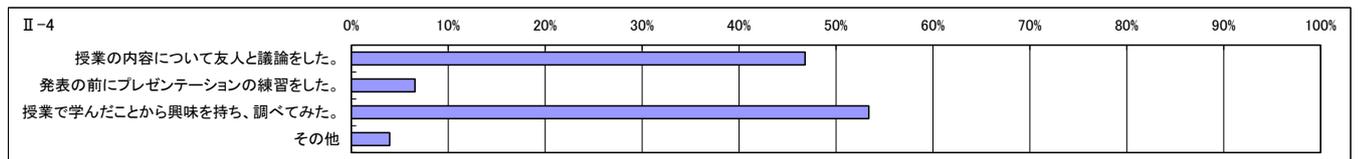
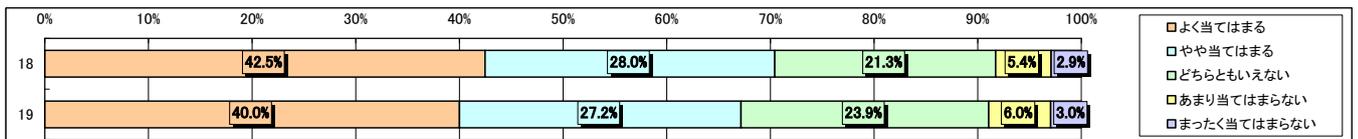
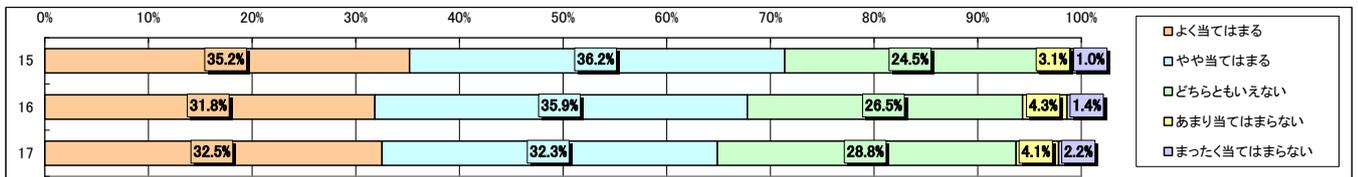
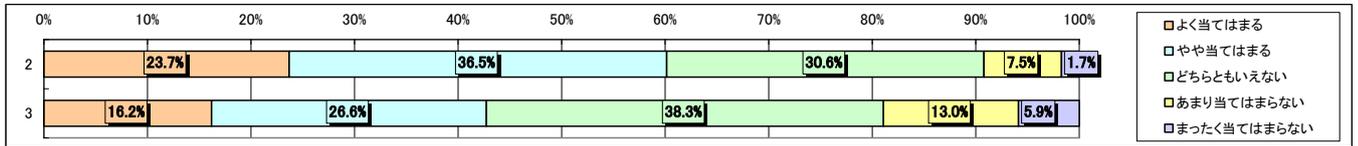
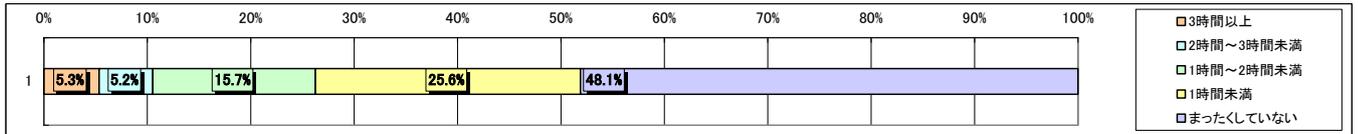
平成30年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 社会科学科目群

回答数(全体): 2100

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	1.9	40
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.7	2
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.3	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.0	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	6
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.6	5
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.0	3
	10 基本的知識が得られた。	4.1	2
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	3.9	5
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.7	7
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	3.9	7
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.8	7
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.0	3
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	2
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	4
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.0	7
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.0	8
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	46.8%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	6.6%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	53.4%	
	その他	4.0%	



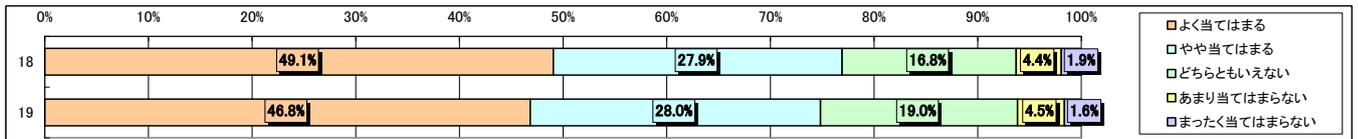
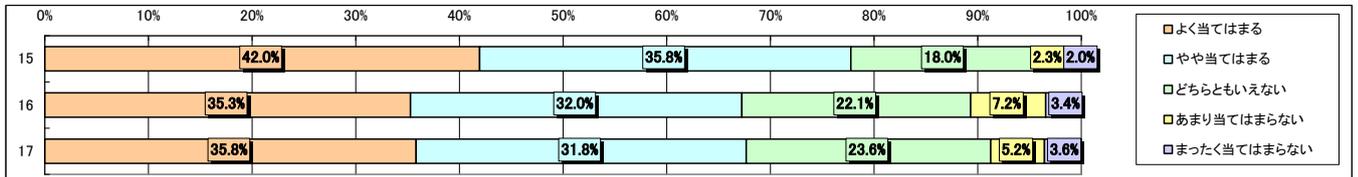
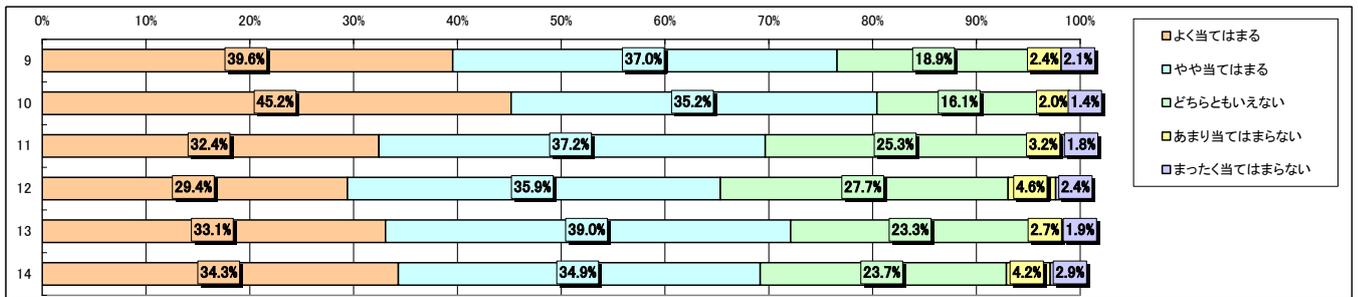
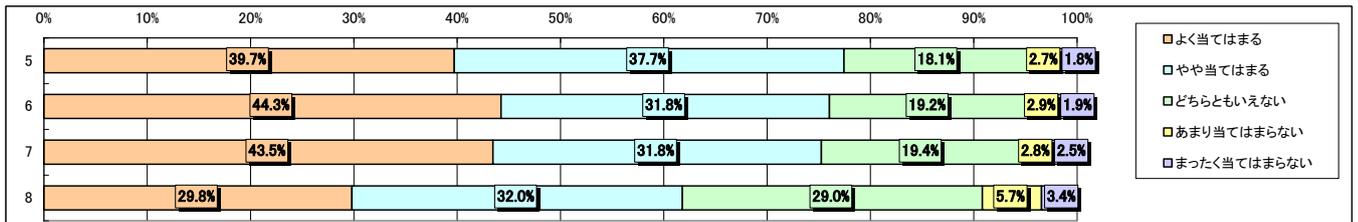
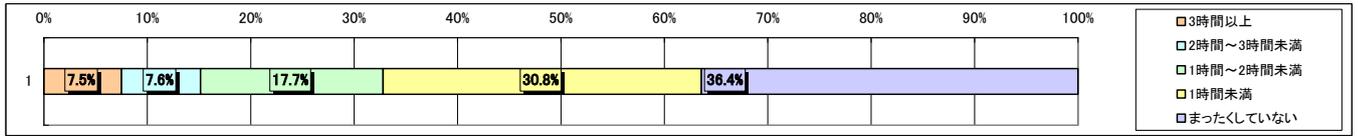
平成30年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 自然科学科目群

回答数(全体): 1664

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	27
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	3
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	9
	4 学生の自主的・発展的な学修内容	※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。	
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	10
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	3
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.8	4
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	3
	10 基本的知識が得られた。	4.2	4
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	6
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	5
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	4
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	3
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	5
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	6
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.9	6
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	9
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	7
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	45.8%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	12.7%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	51.5%	
	その他	4.1%	



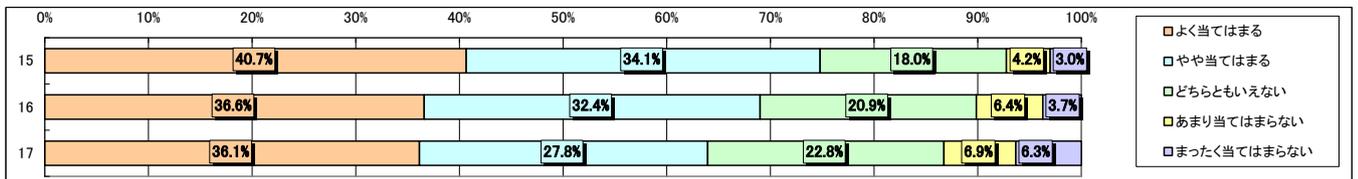
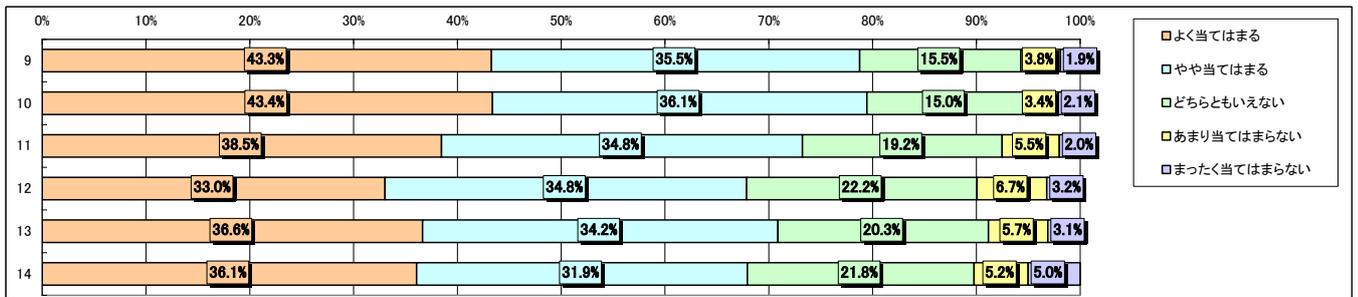
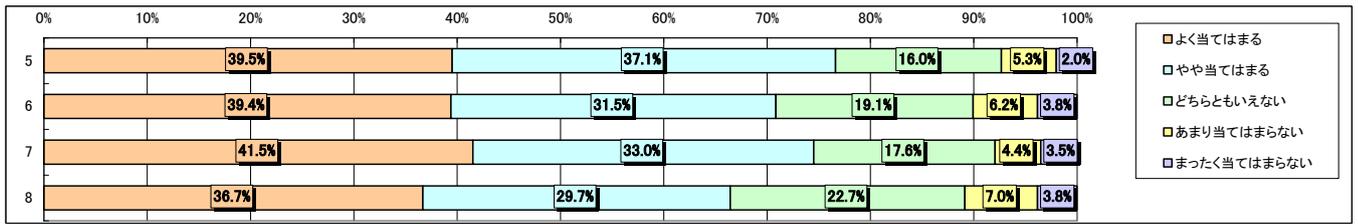
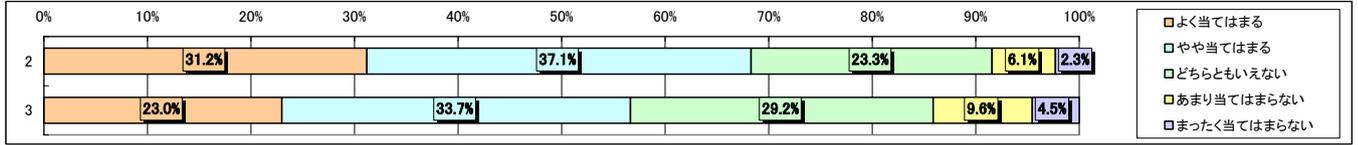
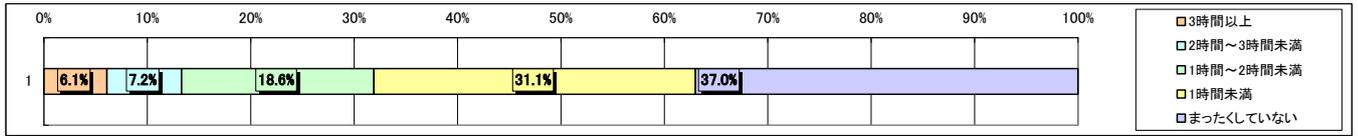
平成30年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 学際科目群

回答数(全体): 998

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.1	14
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	3.9	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.6	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	1
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.0	3
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.0	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	3.9	3
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	0
	10 基本的知識が得られた。	4.2	0
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	0
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	3.9	2
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	2
	14 学問的興味をかきたてられた。	3.9	0
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.1	2
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	3.9	1
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	3.8	2
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.2	2
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.1	2
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	48.1%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	22.5%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	57.0%	
	その他	1.1%	



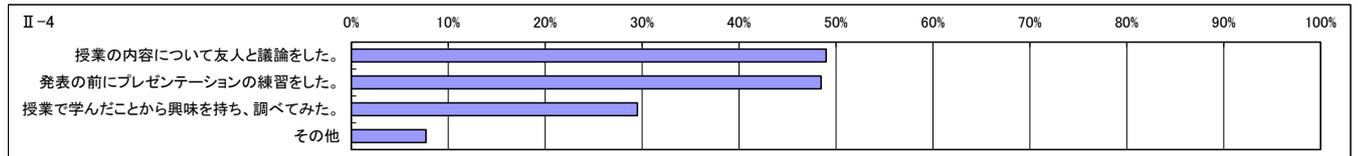
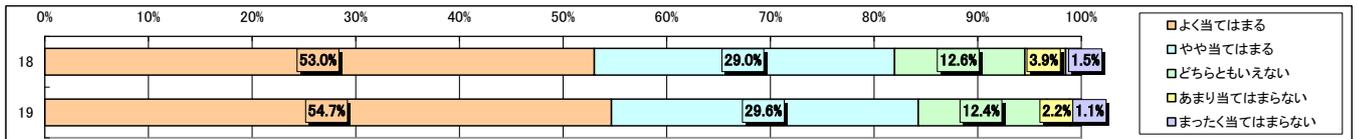
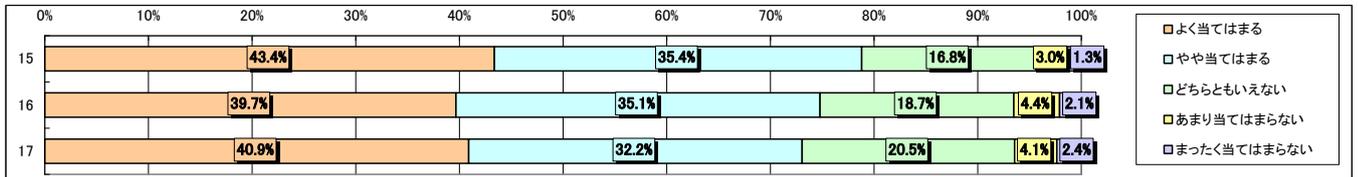
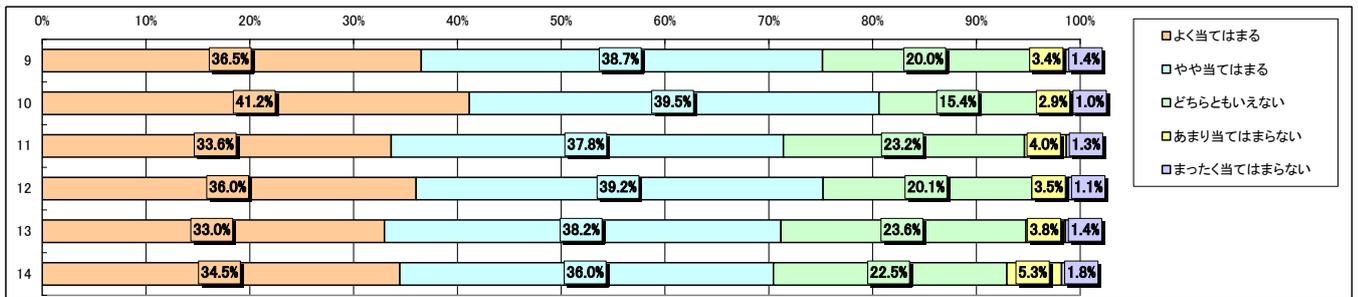
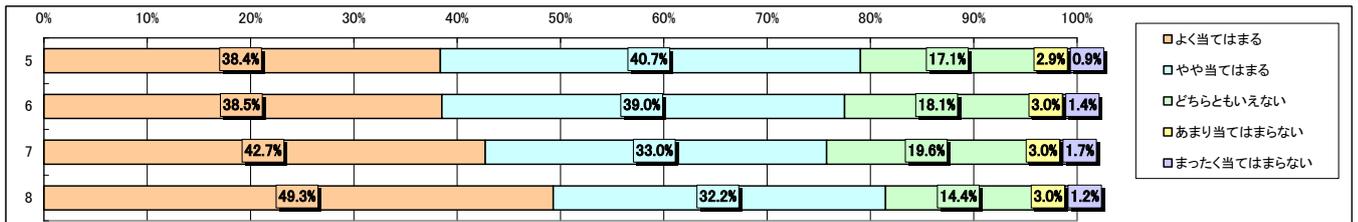
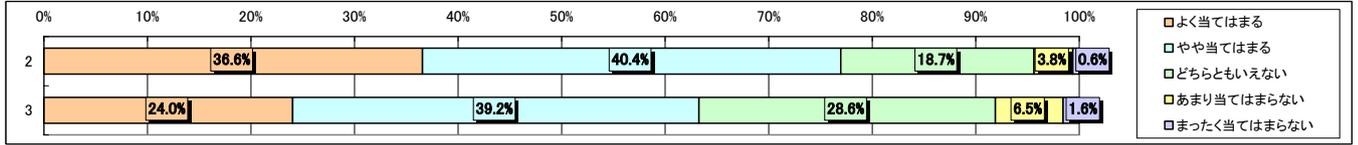
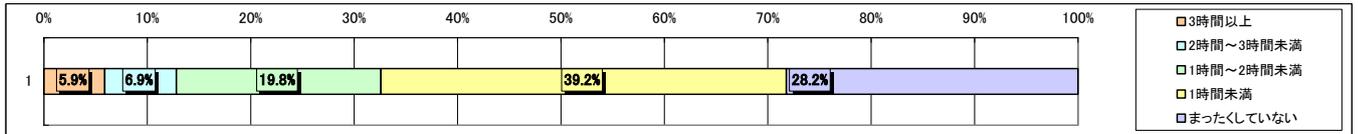
平成30年度 秋学期 学生による授業評価アンケート集計結果

玉川大学

US科目 言語表現科目群

回答数(全体): 2241

分野	この授業に対する学生の学修時間について	この授業の 平均値	無効 回答数
I	1 1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	2.2	32
分野	この授業に対する学生の取り組みについて	この授業の 平均値	無効 回答数
II	2 この授業に積極的に参加した。	4.1	1
	3 この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	3.8	6
	4 学生の自主的・発展的な学修内容 ※【II】-4につきましては、複数回答可のため、集計・分析結果をご確認ください。		
分野	この授業の進め方について	この授業の 平均値	無効 回答数
III	5 各回の授業のねらい・内容は明確であった。	4.1	8
	6 教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	4.1	1
	7 映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	4.1	1
	8 教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	4.3	2
分野	この授業を受けてみて	この授業の 平均値	無効 回答数
IV	9 新しい考え方・発想に触れた。	4.1	1
	10 基本的知識が得られた。	4.2	1
	11 多角的な視点から見る姿勢が身についた。	4.0	2
	12 自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.1	4
	13 科目のもつ学問的意義を読み取れた。	4.0	0
	14 学問的興味をかきたてられた。	4.0	1
分野	この授業を総合的に振り返って	この授業の 平均値	無効 回答数
V	15 授業全体の目標・内容が明確であった。	4.2	0
	16 授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	4.1	0
	17 この授業をほかの学生に薦めたい。	4.1	6
分野	その他	この授業の 平均値	無効 回答数
VI	18 この授業の教室の大きさは適切であった。	4.3	4
	19 この授業の受講者数は適切であった。	4.3	4
集計・ 分析結果	II-4 学生の自主的・発展的な学修内容 (複数回答可)		
	授業の内容について友人と議論をした。	49.0%	
	発表の前にプレゼンテーションの練習をした。	48.5%	
	授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。	29.5%	
	その他	7.7%	



Ⅱ 大学院 FD 活動報告

<文学研究科>

(1) 授業評価の実施

「アカデミック・リテラシー」(宇井)の最終回において、授業を通しての感想と授業で改善してほしい点を自由に記述するように受講生に依頼した。受講生が2名と少なく、匿名状況での授業評価の実施が難しいため、成績評価が終わった後にメールにて授業担当者である宇井に提出するように求めた。宇井のもとに2名から授業評価が送られてきている。

また、「英語教育総合」(工藤)の授業においても、選択式および自由記述式の授業評価アンケートを作成し、最終回に実施した。

両授業ともに、履修学生が少ないながらも、学生が各授業をどう評価しているかがある程度分かった。今後の課題としては、履修人数が数名程度しかない場合の、アンケートの分析方法を検討することなどが挙げられる。

(2) 院生に対する研究倫理教育の実施

「アカデミック・リテラシー」(宇井)においては、授業時に eL CoRE の教材を基に一部抜粋して受講生に研究倫理を説明した。また「英語教育研究方法論」(小田)においては玉川大学研究倫理規程をもとに特に院生の研究計画と関係の深い、アンケートやインタビューにおけるデータの収集(研究協力承諾書)、データの管理について解説と演習を行った。さらに下記(4)の国際学会での発表要旨の作成に当たっては、特に審査用の要旨の匿名性およびオーサーシップ(重複した発表の禁止)などについて指導を行った。

また、「英語教育総合」(工藤)の授業評価において、授業を通して向上したスキルや知識について自由に記述した回答の中に、「研究倫理についての知識」と書いた学生が1名見られた。この回答により、大学院の授業科目を担当する教員間で、学生の研究倫理への意識の向上を確認することができた。

今後の課題として、学生自身が実際にデータ収集などを行うときに、適切なプロセスを踏んでいるかどうかを、客観的に調査することが挙げられる。

(3) 「玉川大学英語教育セミナー」の開催

8月23日に「2018 CELF-ELTama Forum for English Language Teaching」という名称の下、英語教育のフォーラムを実施した。その中で、英語教育専攻の学生の全5名が、自身の研究発表を、口頭発表もしくはポスター発表の形式で行った。修士論文を執筆する途中の段階で、学生が進捗状況を発表し、それに対して、多方面から助言や指導を得ることで、指導担当教員自身の学生指導の点検の良い機会となった。今後の課題として、このセミナーでの学びが、今後、研究および学修のどのような面において活用できるかを検証することが挙げられる。

(4) 研究指導能力の向上

上記(3)のとおり、英語教育専攻の学生の全5名が発表を行った。また、このうち3名の学生は、6月末にマカオで開催された ASIA TEFL という国際学会で発表(口頭発表1名、ポ

スター発表 2 名) を行った。こうした学会での発表に学生が至るまでには、指導担当教員の指導力が大きく貢献しており、これらの発表を通して、さらにそれが研鑽されたと思われる。

12 月に開催された玉川大学学術研究所人文科学研究センター主催の研究会で、人間学専攻の学生が発表を行った際、2 名の教員が参加し、学生の発表を聞き、質問や助言を行うことで、教員自身も研究指導をふりかえる良い機会となった。

「英語教育総合」(工藤)の授業の一環として、1 月にアカデミック・スクエアでの公開発表会を行った。この発表会には、科目担当教員以外にも、5 名程度の教員が参加し、英語教育専攻の学生の発表に対して質問や助言をすることで、大学院の授業科目を担当する教員間での情報の交換の場となった。

今後の課題として、このような学生の発表が、修士論文執筆にどのように繋がるかを分析することで、大学院担当教員の指導の改善に資するかを検討することが挙げられる。

<農学研究科>

活動計画

- (1) 研究分野の再編
- (2) 講義科目の新設によるコースワークの充実
- (3) 専修免許(理科・農業)取得のためのカリキュラム策定
- (4) 学士・修士 5 年一貫教育プログラム(仮称)の導入検討
- (5) 研究指導体制の検討
- (6) 英語による授業、大学院生の学会発表指導の充実
- (7) 授業アンケートの実施と授業の改善

活動計画(1)～(3)について

平成 31 年度入学生からの実施を目指し、農学部 3 学科(学士課程)に基づいて農学研究科の研究分野を再編した。これにより、修士課程研究コース〔植物微生物機能科学、動物昆虫機能科学、生態地球環境科学、応用食品科学の 4 研究分野〕と専修免許状(理科・農業)取得コースを設置した。研究分野の再編に伴い、修士課程研究コースについては履修方法と修了要件を見直すとともに、「環境情報解析」と「発達科学基礎論」を平成 31 年度から新たに開講することとした。専修免許状(理科・農業)取得コースについては、「資源生物学課題研究 I・II(新設、合計 4 単位)」、「科学英語表現(2 単位)」、教科に関する科目(合計 18 単位)および教職科目(合計 6 単位)を履修することにより、修士課程研究コースと同様に 30 単位で理科または農業のいずれか一つの専修免許状が取得できるカリキュラムを策定した。

以上は平成 30 年度 4 月～9 月の農学研究科教務担当者会で立案し、農学研究科会での審議を経て平成 30 年度 11 月の研究科長会にて承認された。

活動計画(4)、(5)について

学士・修士 5 年一貫教育プログラム(仮称)については、農学研究科教務担当者会および農学部主任会にて、導入の是非、導入する際のカリキュラムの策定および選考時期・選考方法についての検討を継続しており、具体案を作成して農学研究科会にて審議する予定である。

D 合教員による博士課程後期の大学院生への研究指導補助、M 合教員による修士課程の大学院生への研究指導補助は、関連する制度が整っておらず本年度も実施には至らなかった。次年

度以降に実施するか否かは教員数と学生数の比率、教員の研究業績や指導実績等をもとに検討する。演習科目を D 合、M 合教員が補助的に担当する試み（15 回の授業のうち 7 回の担当を目安とする）は引き続き継続する。

活動計画（6）、（7）について

昨年度に引き続き、修士課程の大学院生を対象に授業アンケートを行った。専門性の高い講義が行われている反面、バックグラウンドの異なる院生が授業に参加している場合があり、基礎的な知識に大きな差がある場合の対応には課題が残された。一方、大学院生によるプレゼンテーション型の授業や、最新論文をもとにしたディスカッション型の授業が広く実施されていることが確認できた。また、教員による英語プレゼンの指導も広く行われており、これらについては今後も継続する。

<工学研究科>

平成 30 年度工学研究科 FD 活動として、大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進、「専門演習 I」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善および大学院教育活動の質向上を目的とした 2 つの FD 研修会を計画に沿って実施した。以下に活動の報告とその成果および課題についてまとめた。

（1）大学院生による授業評価アンケートの実施と授業改善の推進

- ・実施時期：春・秋学期
- ・対象科目：工学研究科の大学院生が受講している全科目

平成 30 年度春学期および秋学期において、大学院生による授業評価アンケートを実施した。修士課程と博士課程の全院生に履修した科目の授業評価を行ってもらった。各科目の授業評価アンケート結果を授業担当教員にフィードバックし、授業改善に活用してもらった。また、各科目の授業評価アンケート結果を専攻ごとに集計し、教務担当者会に提示・問題の可否等について検討を行った。アンケートの集計結果は、工学研究科会で全教員に報告された。

成果として、授業評価アンケートの集計結果をみると春学期と秋学期の授業科目においては、とくに問題は見出されず、いずれも良好であった。また、授業評価アンケートの実施から評価、公表、改善活用までを実施することができ、この取組みによって各科目の質の確認とともに、改善の推進がみられた。

次年度への課題として、授業改善の記録と効果確認のしくみについては不十分であるため、今後、どのような方法が可能か検討していく。平成 31 年度も授業評価アンケートを実施し、授業の改善活動を継続していく。

（2）「専門演習 I」の実施と効果分析による実践的技術力指導の改善

工学研究科の必修科目である「専門演習 I」は、修士課程 1 年生を対象とし、工学研究科の全教員がその内容と評価に関わる科目である。この科目の狙いは、装置の製作等の実践的な課題による工学の基礎的な知識および技術の修得と、その成果の「大学院技術発表会」における発表・質疑応答を通じた技術者および研究者に必要なコミュニケーション能力の向上である。

今年度の技術発表会は9月20日(木)に開催され、大学院生の発表6件に対して、教員10名、院生9名および学部生3名の計22名の参加者が訪れた。すべての発表について参加した教員および他の学生と活発な質疑応答と審査が行われた。科目の概要および発表会の審査結果は、工学研究科会で全教員に報告された。

成果として、昨年同様に科目の狙い通りの効果が確かめられただけでなく、博士課程のTAを活用した実習指導を強化することによって、研究科全体として継続的に大学院生の実践力強化のための教育方法の改善に努めていくことができた。

次年度への課題として、履修者がより本科目の主旨に合った実際的な課題に取り組むよう、新入生ガイダンス等での指導や説明を改善していく方策について教務担当者会で議論し、実施していくこととなった。

(3) 大学院教育活動の質向上を目的としたFD研修会の実施

1) 知的財産権FD研修会

テーマ：教育・研究上考えるべき倫理と著作権等の取扱

実施日：平成30年6月28日(木) 17:30~18:30

場所：大学8号館第2会議室

講師：木村 友久 先生(国立大学法人山口大学 国際総合科学部 教授、
大学研究推進機構 知的財産センター 副センター長)

工学研究科の多くの教員が本研修会に出席した。教育・研究を職務として遂行する上で、対学生・職員・社会に相對するとき、考慮すべき知識を得ることができ、その運用についての質問があった。

成果として、教員自身の論文や教材の執筆、あるいは学生のレポートや論文指導等において、必要となる著作権の知識を認識できたことが挙げられる。

次年度への課題として、研修会において出席者全員に研修の有効性等の評価を記録媒体で実施していないこと、さらにその結果の検討や活用については未実施であり、次年度のFD活動に実現していく必要がある。

2) 社会発信手法研修会

テーマ：生き残りをかけた、選ばれる大学としての広報活動

実施日：平成30年10月25日(木) 17:30~18:30

場所：大学8号館第2会議室

講師：菊池 泰功 先生(PRクエスト株式会社 代表取締役 広報コンサルタント)

工学研究科の多くの教員および入試広報部など関連部署の職員が出席した。選ばれる大学・大学院になるための広報活動の展開のしかたについて、研究・教育を広報に繋げること、工学系私大・大学院における優秀人材確保(アドミッション)の戦略を共有し、今後の工学研究科の目指すべき広報活動のあり方について学ぶとともに、議論を通して理解を深めた。本学の学部・大学院の特色や研究成果を積極的にアピールし、社会的評価を高めることにより、入りたい(入ってもいい)大学・大学院を目指すことの重要性を共有した。

成果として、講演後の議論では入試・広報・工学部および工学研究科の三者連携体制による広報活動の推進等について前進的な提案があり、入試広報部の職員からも活発な質問があった。今後の広報活動について、教職員が前向きな意識を共有できた。

次年度への課題として、出席者に研修の有効性等の評価を実施しておらず、評価結果の検討や活用も未実施であった。次年度のFD活動では研修の有効性評価と評価結果の活用のし

くみを実現していく必要がある。また、今後講演の内容を参考にしながら、広報活動の具体化を進めていく必要がある。

＜マネジメント研究科＞

(1) 研究科における各コースの内容検証

【報告】

今年度はスクール・マネジメント研究コース、会計学コース、グローバル・ツーリズムコースに所属する大学院生を迎えたことから、大学院生の声をもとにコースのカリキュラムや授業改善に関する検証を行った。

【成果・課題】

特に、会計学コースとグローバル・ツーリズムコースに初めての大学院生を迎えたが、授業や研究指導に対して大学院生からの不満はなく、院生のレベルに合わせた適切な指導がなされたことを確認した。次年度も懇談会ならびに授業評価の回答結果を踏まえて指導内容の適切性を評価していく。

(2) 課題研究セミナーⅠ・Ⅱの指導方法検証

【報告】

平成 29 年度に迎えたスクール・マネジメントコースの院生が学位取得に向けて課題研究に取り組んだ。本学職員である院生に対する指導の難しさ、工夫点を 7 月 27 日に開催された懇談会において互いに共有した。

【成果・課題】

平常の業務と課題研究の取り組みを両立させるのは相当に難しく、研究の進捗が思わしくなかったことを確認した。M1 の終わりに指導教員が決定された時点で事前の課題に取り組ませるなどの工夫が必要であることを認識した。また、PDCA を回す意味で職員の大学院生を指導するための振り返りと改善策を主管部署へ報告し、関係部署で相談していただくことになった。

(3) 大学院生による授業評価アンケートの実施

【報告】

各セメスター終了後に全授業に対する記述式アンケートを実施した。回収したアンケートを担当教員へフィードバックし、授業改善に役立ててもらった。

【成果・課題】

また、記述式アンケートの内容をレビューしたところ、授業に対して特別に不満を感じていることはないのを確認した。授業評価アンケートについては、次年度も継続して実施し、大学院生からの要望を把握するために実施したい。

(4) 教員の研究倫理に関する啓蒙

【報告】

これまでは研究科内で研究倫理に関する啓蒙は十分といえない状況であった。そこで、平成 30 年度は研究倫理の啓蒙活動を試行した。教員の研究倫理に関する啓蒙として、眞嶋ほか「人文・社会科学系のための研究倫理ガイドブック」、慶應義塾大学出版会を購入・配付して指導者としての研究倫理の啓蒙を推進した。

【成果・課題】

次年度は研究指導担当教員の全てに配付をして、改めて研究倫理の啓蒙を深めたい。また、学部講師による研究倫理の啓蒙について、実施の可能性を検討したい。

<教育学研究科>

(1) FD 委員会の開催（年 6 回程度）

- ・年 11 回開催（4/2、5/10、6/27、7/25、8/14、9/26、10/24、11/28、12/19、1/11、2/20）
- 回数を増やしたことにより、全体での動きを共通に把握することができた。

(2) 授業研究のための相互授業見学と研究会（各教員年 3 回を目標）

- ・延べ 21 回の授業見学と事後研究会。13 名中 6 名は 3 回の授業見学を実施。
- 授業後に授業の計画・意図を議論し、それぞれの授業計画を改善していくヒントを多く得られた。各教員が次年度以降の授業の進め方に反映される予定である。

(3) 学期終了後の授業アンケートの実施及び分析

- ・春学期、秋学期の授業アンケートの実施及び分析を実施（8/14、2/20）
- 指導体制は概ね良好であったが、教員による差異があるため、共通化に向けて、議論を継続していくこととした。

(4) カリキュラムの検討

- ・「教育学研究方法」の開講学期について検討。
- 必修科目から選択科目に平成 30 年度入学者から位置づけを変更したが、それ以前の入学者は必修となっている。昼間・夜間両方での開講が必要であるため、担当者の負担が大きい。
- また、教員・学生とも開講学期について意見が一致しなかった。今後も検討を継続する。

(5) その他

- ・修士論文を中心とした評価規準・基準の検討。
- 教員間で評価基準についての相違がある。基準をすりあわせる必要があるが、研究手法が多様であるため、時間をかけて議論していく必要がある。

<教職大学院>

(1) 教職大学院 OBOG フォローアップ研修について

本年度は次の 2 回の日程で実施した。

- ① 6 月 23 日（土） 菅野宏隆樹教授による研究報告
教職大学院 OBOG による実践報告
報告者：SM7 期 星愛実氏
現職 6 期 西田太郎氏
- ② 11 月 29 日（木） 笠原陽子教授による研究報告
教職大学院 OBOG による実践報告
報告者：現職 10 期 鈴木さおり氏
SM6 期 高橋美早樹氏

菅野教授からは数学教育についての原理的な話を、大人でも熱中してしまうような問題を考えることを通して、主体的・対話的で深い学びについてお話しいただいた。笠原教授からは、行政で経験したことをもとに、これからの学校のあり方について共生社会の実現をテーマにお話しいただいた。さらに、例年通りグループに分かれてサークルディスカッションを行った。OBOG からの発表と教授からの発表について、活発な意見交換が行われた。

①成果

毎年のフォローアップ研修が、教職大学院 OBOG の学びの継続として、また年次の異なる大学院生のつながりを作る場として機能していることが本年度も引き続き確認された。また名刺交換や近々の課題を交流しあうサークルディスカッションも好評であった。教職大学院の教員が毎回発表し、その発表についての意見交換を実施することで、本学の講義の質を高める FD としての効果もねらっている。また、来場した OBOG からはアンケートを実施し、大学院のどの講義が教育現場で役立ったかなどについて答えてもらうようにしている。菅野教授からのレクチャーも、今後の学習指導要領の実施に向けて、本教職大学院で追究していくべきテーマであり、有益な FD 活動とすることができた。また、教職大学院 OBOG の実践報告は、現場に出てからの修了生たちが教職大学院での学びをどのように生かしているのか、またどういった点に悩み克服しようとしているのかを、教授陣も知ることができる貴重な場となっている。さらに、サークルディスカッションは教職大学院の講義が OBOG たちのその後の仕事にどのように役立っているか、また今後どのような講義が求められているか等を確認することができた。この場の議論をもとに、各教員も自分たちの講義の内容と方法との改善に努めている。

②課題

OB・OG の参加者がやや少ない点が今後の課題である。メールによる連絡網等を整備し、定期的に情報を流すなどの工夫はしているが、現職として活躍している修了生たちの多忙さもあり、休日のフォローアップに参加しにくい状況もある。

(2) FD 授業研究について

以下の 2 回の授業研究を実施した。

① 4 月 26 日 (木) 15:00~16:40 (担当：酒井徹 教授)

「生徒指導と特別活動の実践と課題」

② 11 月 29 日 (木) 15:00~16:40 (担当：笠原陽子 教授)

「教科授業技術の研究と実践 (中)」

「教育課程編成の研究と実践」

①成果

酒井教授の研究授業では、現職経験の豊富ならでのリアルなデータを提示しながら、具体的な事実在即して考察させていくインパクトのある展開の授業であった。授業後の検討会においては、統計資料へのアクセス方法や提示方法も含めて、幅広い角度からの意見が交換された。笠原教授の各校のグランドデザインをそれぞれに設計させ、必要な要件をもとにその内容を検討した。授業後の検討会においては、講義間の情報の連携をさらに強化していく必要性や用語の定義の問題まで含めて建設的な意見が出された。

全体を通して、①「理論と実践の往還」のための授業づくりや教材開発の具体的な方策について、②新学習指導要領に対応した内容について、③ストレート・マスターの実践経験不足を補う指導法について、④現職教員院生の実践経験を活用した指導法、等々についての議論が活

発になされた。教授陣も毎年必ず授業研究を行い研鑽に努めているという事実が、毎年、教職大学院の院生たちに良い印象を与えている。

②課題

現職院生とストレートマスターとの経験の差異を講義の中でどのように扱っていくかという課題が毎年出されている。

(3) 教授陣に対する調査について

FDの一環として、ストレート・マスターや現職教員院生の学修理解等に関する教員の所感を例年どおり調査した。アンケートは4点法で実施され、全19の項目について得点化している。調査結果は教職大学院会で公表され、データをもとに議論がなされる。今年度のアンケート結果についてはまだ集約途上だが、全教員についての各質問に対する傾向を把握し、昨年度と今年度との比較をしながら、学生の評価が高かった項目と、課題が残る項目とについて検討する予定である。

①成果

例年、ほとんどの項目が3.6以上であり、記述式の内容では「全てが満足」「実践に生かせる内容だった」など、肯定的な記述が多い。

②課題

一部には改善が必要な指摘もなされているため、シラバス全体の内容と重点の置き方等について来年度以降さらに検討し、改善を重ねていくことを共通理解している。

(4) 相互授業参観について

各教員の授業を可能な範囲で相互に自由に参観している。

①成果

その際の学び・感想等を記録として残すようにし、互いの学びを蓄積されることによって次年度へ活かせるようにしている。

②課題

まだ、蓄積が少ないため、今後どのように継続していくかが課題である。

(5) FD委員会における情報交換

毎月の教職大学院会終了後にFD委員会を開催し、院生に関する諸問題、指導方針の確認と教授陣間における連携の取り方、教職大学院のカリキュラムや組織のあり方について検討している。

①成果

メンタルに問題をかかえている院生についての教員の対応、学校課題研究の進捗状況やその適切な指導のあり方、院生が学修しやすい環境の構築、課題の出し方についての基本的な考え方の確認等々について、活発な情報交換がなされ、それぞれの場面での方策についてよりよいあり方を検討することができている。

②課題

特に大きな課題はない。今後も定期的に継続していく予定である。

<脳科学研究科>

- (1) 平成 29 年度に実施した疑似ピアレビューの結果を全教員で共有し議論した上で、効果的な研究指導のあり方を検討し、今後の研究指導に反映することを確認した。また、議論の上、今後の疑似ピアレビューの進め方に関するガイドラインと報告書のフォーマットを策定した。
- (2) 平成 31 年 2 月 13～15 日に開催された玉川大学総合人間科学ワークショップ（ホテルラヴィエ川良；静岡県伊東市）において実施された各大学院生の研究発表に関して、教員全員で評価し、最終日に開催した FD 審査委員会において、評価結果を確認した上で、今後の研究指導へ反映する内容を確認した。また、同発表内容に関して疑似ピアレビューを開始した。年度を超えて 4 月中には完了する予定である。
- (3) 大学院生共通の書籍について、足りない書籍を追加する他、大学院生が利用しやすいところに分散して本棚を配置するなどの環境整備を行った。
- (4) 研究科ウェブにおいて情報発信しながら、研究科内の指導にも役立てるため、研究室紹介のページを追加（2 研究室）、及び更新（1 研究室）した。また、今年度、学術雑誌発表された大学院生の論文に関して、ウェブ上で紹介するための準備を開始した。

Ⅲ 教員研修

新任教員研修会

平成31年度採用の新任教員(助教以上)に対し、大学FD委員会の主催により、関係各部の協力・連携のもと研修会を実施した。この研修会は、今年度で17回目の開催となる。今年度から大学新任助手が一部のプログラムに参加し、総勢28名(うち助手7名)で2日間の研修を行った。

日 時:平成31年3月7日(木) 10:00～17:40 *18:00より、懇親会開催
3月8日(金) 10:00～15:30

場 所:大学教育棟 2014 620教室

対 象:平成31年度採用教員(助教以上)

※「玉川大学の教育理念」および「これからの大学に必要なこと」のみ助手も参加
研修目的:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を理解する。

専任教員としての業務に必要な知識を得る。

到達目標:玉川学園の建学精神、玉川大学の教育理念・目的を他者に説明することができるようになる。

専任教員としての業務を理解し、遂行することができるようになる。

(1) 研修プログラム内容

1日目:3月7日(木)

10:00	開始/研修説明	教学部教育学修支援課
10:05	開催にあたって	小原 芳明 理事長
10:25	新任教員自己紹介	教学部教育学修支援課
10:40	講演「玉川大学の教育理念」	菊池 重雄 高等教育担当理事
12:00	昼食	
13:00	キャンパス・ツアー	人事部人事課
14:20	休憩	
14:30	本学のICTを活用した教育 玉川大学共通アカウントについて	教学部教育学修支援課
15:50	Notes システムと Notes 掲示板の活用	総務部情報基盤システム課
16:10	「UNITAMA 教員業績」について(目的と操作方法)	教学部教務課
16:40	玉川学園のコンプライアンス方針について	監査室
16:55	玉川学園の個人情報保護方針について	総務部総務課
17:15	質疑応答/翌日の予定説明	教学部教育学修支援課
17:25	キャンパス・カード用写真撮影	教育企画部広報課
17:40	終了(一時解散)	
18:00	懇親会	大学FD委員会
20:00	終了	

2日目：3月8日（金）

10:00	本日の研修説明	教育学部教育学修支援課
10:10	教学事項に関する質疑応答	教育学部
	・ 玉川学園の組織機構／玉川大学の概要	教務課
	・ 各種運営担当、担任業務、教務指導・学生指導	学務課
	・ 年間授業計画	授業運営課
	・ 学則・規程等	教育学修支援課
	（授業、休講、補講、試験、成績等）	
	・ 学生ポートフォリオ	
	・ 学生の身分異動	
	・ 授業および成績に関する諸制度	
	・ 教学事務手続要領（研究費、出張（国内外）等）	
	・ 学生支援-学修支援について	
	（ラーニング・コモンズ見学を含む）	
11:50	学生支援-学生指導について	青木 敦男 学生センター長
	・ 学生としてのマナー	
	（服装、自動車・バイク通学、喫煙等）	
	・ 学生の諸問題の早期発見・解決	
	・ ハラスメント	
	・ 学生相談室	
	・ 奨学金	
	・ クラブおよびサークル活動	
12:20	昼食	
13:20	講演「これからの大学に必要なこと」	稲葉 興己 教育学部長
15:00	質疑応答	
15:30	終了	

(2) 配付資料・参考資料

資料No.	資料	担当
なし	平成 31 年度新任教員研修会<研修プログラム>	人事部人事課
	平成 31 年度新任教員研修会 名簿	
	大学教員の勤務について 看護休暇・介護休暇申出書 出勤簿	
	私学共済制度 新規加入者向けリーフレット 学校法人玉川学園 WELBOX 会員の皆様へ 身上異動届	
	小原國芳『全人教育論』	玉川大学出版部
	玉川学園編『愛吟集』	
	「全人」2019 年 3 月号	
1	玉川大学の教育 －教育理念(建学の精神)の引き継ぎ手として－	菊池 重雄 高等教育担当理事
	玉川の教育(玉川学園ホームページ抜粋)	
2	平成 31 年度新任教員研修会 キャンパス・ツアー資料	人事部人事課
	玉川学園案内図(キャンパス・ツアールート)	
3	玉川大学における ICT 活用	教学部教育学修支援課
4	UNITAMA 教員業績について －目的と操作方法－	教学部教務課
5	コンプライアンス方針について	監査室
	コンプライアンスについて(冊子)	
6	学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて	総務部総務課
	個人情報保護法ハンドブック	
	研修受講報告書	
7	学校法人玉川学園組織機構、玉川大学の概要 担当業務等について 学校法人玉川学園組織機構図 玉川学園 在籍者数 総括表	教学部教務課
	ご着任にあたって 各種事務手続きについて	教学部学務課
	平成 31 年度 個人研究費説明会について 平成 31 年度 大学入学式について(ご案内)	
	平成 31 年度 新任教員研修会 教務事項 平成 31 年度 年間授業計画 「授業を通して修得できる力」のコモン・ルーブリック	教学部授業運営課
8	これからの大学に必要なこと	稲葉 興己 教学部長

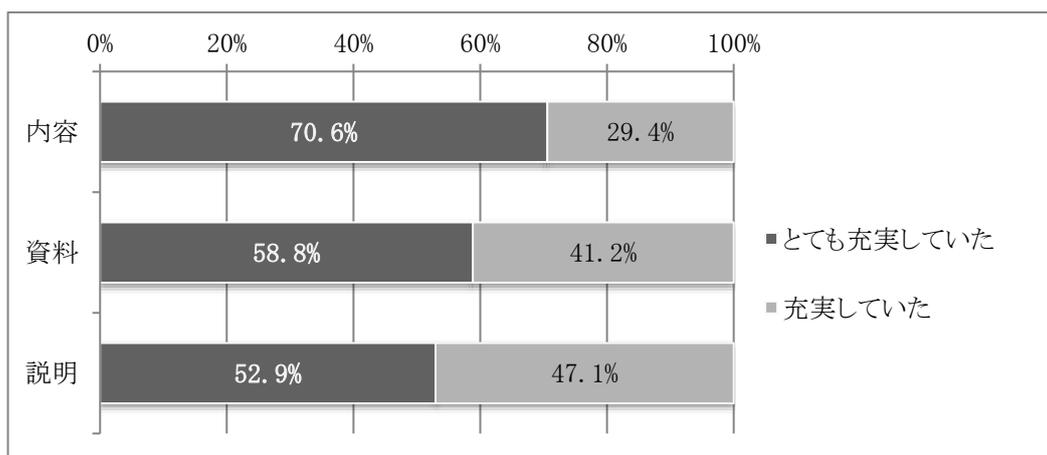
(3) 実施の成果

本学における教育について、高等教育のコンテキストから参加者に理解を促すため、2つの講演「玉川大学の教育－教育理念(建学の精神)の引き継ぎ手として－」そして「これからの大学に必要なこと」を設けた。これにより、専任教員としての業務に必要な、教学事項や学生指導、個人情報保護に関する事項等だけではなく、大学で働く教員に期待されていることが何かを伝えることができた。なお、「これからの大学に必要なこと」では、新たにグループワークの時間を設け、受講者自身が考えている教育理念を共有した。このことにより、教育者としての責任を再認識し、学生の学修意欲を喚起させることを促すことができた。

また、監査室による「玉川学園のコンプライアンス方針について」、総務部総務課による「学校法人玉川学園における個人情報保護の取組みについて」を実施し、教育・研究機関に勤務する教職員として自覚を促すことができた。

上記の結果、受講者から提出された研修受講報告書では、研修内容、資料、説明のすべての項目において、「充実していた」よりも「とても充実していた」と回答する割合が上回った。特に内容面に関しては、70.6%とその結果は著しく、参加者のニーズに沿う充実した内容の研修を実施することができた。

＜報告書データ集計結果 —内容、資料、説明について—＞



なお、今回の研修に参加して良かった点として挙げられたコメントは、次のとおりである。

- ① 学園全体としての概要を知ることができた。
- ② 玉川大学の理念を知ることができて良かった。他の学部学科の先生方とお話することが出来て良かった。
- ③ 玉川学園としての理念、学園全体の組織・運営等に触れることが出来、大きなビジョンの中に自分の職務を位置づけることができた。
- ④ 仕事の外枠が少し具体的にイメージできるようになった。同期の皆さんと打ちとける機会となった。
- ⑤ 大学の教育方針が理解できた。コンプライアンス・情報の漏えいなど改めて確認することができた。授業の取り組み方を考えることのできるチャンスを与えてもらった。
- ⑥ グループワークにより、相互の意見をシェアでき、他学部の先生とディスカッションすることができた。

その上で、改善希望として、次のようなコメントがあった。

- ① シラバスを作る前にお聞きしたかった。
- ② もう少し話し合う時間(ディスカッション)が欲しい。
- ③ 研究環境・研究支援の情報がなかったので欲しい。
- ④ 一方通行のお話が多かったので質問の時間を設けていただけるとありがたく思います。

今後に向けての検討課題も挙げられているが、総体的には本研修会の目的・到達目標は、達成できたと評価できる。また同時に、本研修会は新任教員同士の教育・研究活動に向けた良好な関係構築に役立つものであったと考えられる。

改善希望として挙げられたコメントを踏まえ、次年度の開催に向けた、本研修会の質向上に努めたい。

以上



参 考 资 料

参考資料 1. 大学 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 30 年 4 月 27 日 (金) 17 : 30~19 : 00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室 B
- 議 案 : (1) 会議日程に関する件
(2) 今年度の FD 研修会等に関する件
- 報 告 : (1) 各学部 今年度 FD 活動計画および授業参観計画の提出について
(2) 「平成 29 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書」の配付方法について
(3) 大学教育再生加速プログラム (AP) 平成 29 年度事業報告および平成 30 年度事業計画について
(4) 他大学等提供のシンポジウム等および資料提供について
(5) 授業改善への取り組みについて

第 2 回大学 FD 委員会

- 日 時 : 平成 30 年 7 月 6 日 (金) 17 : 30~19 : 00
- 場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室 A
- 議 案 : (1) 各学部の FD 活動計画に関する件
- 報 告 : (1) 授業参観計画について
(2) 出版部提供 FD 関連書籍について
(3) 私立大学情報教育協会 平成 30 年度 教育改革 ICT 戦略大会について
(4) SPOD フォーラム 2018 について
(5) 内部監査・学生による授業評価アンケートについて

第3回大学FD委員会

- 日時 : 平成30年11月27日(火) 17:30~19:00
- 場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室 A
- 議案 : (1) 大学教育力研修に関する件
(2) 新任教員研修会に関する件
(3) 学生による授業評価アンケート(US科目) アンケート用紙記載事項の変更に関する件
- 報告 : (1) FDer 養成講座について
(2) 国立教育政策研究所 平成30年度教育研究公開シンポジウム
「資質・能力の育成に向けたカリキュラム・マネジメントの推進
- 授業づくりの視点から -」について
(3) 平成30年度産業財産権制度調査研究「小中高等学校において知財創造教育を実施できる人材の養成に必要なテキストに関する調査研究」実証研修の協力について

第4回大学FD委員会

- 日時 : 平成31年1月22日(火) 17:30~18:30
- 場所 : 大学教育棟 2014 793 会議室 A
- 議案 : (1) 大学教育力研修 分科会座長に関する件
- 報告 : (1) FD・授業評価アンケートの結果活用に関する学内監査結果について
(2) ルーブリックの活用に関する教員調査について
(3) 教職課程FD・SD研修会について
(4) 新任教員研修会 懇親会について

参考資料 2. 大学院 FD 委員会の議事内容

第 1 回大学院 FD 委員会

日 時 : 平成 30 年 4 月 25 日 (水) 17 : 30 ~ 18 : 30
場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室 A
議 案 : (1) 各研究科 FD 活動計画に関する件
(2) 大学院研究科交流会に関する件
報 告 : なし

第 2 回大学院 FD 委員会

日 時 : 平成 30 年 8 月 16 日 (木) 10 : 00 ~ 11 : 00
場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室 A
議 案 : (1) 今年度各研究科 FD 活動計画の中間報告に関する件
報 告 : (1) 2019 年度大学院研究科交流会について

第 3 回大学院 FD 委員会

日 時 : 平成 31 年 3 月 22 日 (金) 10 : 00 ~ 11 : 00
場 所 : 大学教育棟 2014 793 会議室 A
議 案 : (1) 今年度各研究科 FD 活動報告に関する件
報 告 : (1) FD・授業評価アンケートの結果活用に関する学内監査結果について

参考資料3. 「授業評価アンケート」用紙

記入日	月	日	回答者学年	①1年	②2年	③3年	④4年	⑤その他
-----	---	---	-------	-----	-----	-----	-----	------

授業科目名	5	4	3	2	1
開講時限	4時間以上	3時間～4時間未満	2時間～3時間未満	1時間～2時間未満	1時間未満
曜日					
限					
担当教員名					

I. この授業に対するあなたの学修時間について

1	1回分の授業外の学修(予習、復習、課題など)にかけた時間	5	4	3	2	1
---	------------------------------	---	---	---	---	---

5	4	3	2	1
よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない

II. この授業に対するあなたの取り組みについて

2	この授業に積極的に参加した。	5	4	3	2	1
3	この授業をもとに授業時間外に自主的・発展的な学修をした。	5	4	3	2	1
4	どのような自主的・発展的な学修をしましたか。 <input type="checkbox"/> 発表の前にプレゼンテーションの練習をした。 <input type="checkbox"/> その他() <input type="checkbox"/> 授業の内容について友人と議論をした。 <input type="checkbox"/> 授業で学んだことから興味を持ち、調べてみた。					

III. この授業の進め方について

5	各回の授業のねらい・内容は明確であった。	5	4	3	2	1
6	教科書、授業レジュメプリント、参考文献などが授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
7	映像視覚教材(ビデオ、書画装置、パワーポイントなど)や板書が授業の理解に役立った。	5	4	3	2	1
8	教員は、効果的に学生の授業参加(質問、意見など)を促していた。	5	4	3	2	1

		5	4	3	2	1
		よく当てはまる	やや当てはまる	どちらともいえない	あまり当てはまらない	まったく当てはまらない
IV. この授業を受けてみて						
9	新しい考え方・発想に触れた。	5	4	3	2	1
10	基本的知識が得られた。	5	4	3	2	1
11	多角的な視点から見る姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
12	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	5	4	3	2	1
13	科目のもつ学問的意義を読み取れた。	5	4	3	2	1
14	学問的興味をかきたてられた。	5	4	3	2	1

V. この授業を総合的に振り返って

15	授業全体の目標・内容が明確であった。	5	4	3	2	1
16	授業全体を通して、授業内容の難易度は適切であった。	5	4	3	2	1
17	この授業をほかの学生に薦めたい。	5	4	3	2	1

VI. その他

18	この授業の教室の大きさは適切であった。	5	4	3	2	1
19	この授業の受講者数は適切であった。	5	4	3	2	1

その他、意見、感想等を記述してください。
ただし、授業改善につながる建設的な意見は構いませんが、授業評価と直接関連しない意見や誹謗中傷は控えてください。

アンケートは以上です。ご協力ありがとうございました。

参考資料 4. 玉川大学FD委員会規程

(平成 15 年 4 月 1 日 制定)

(平成 21 年 4 月 1 日 改正)

(平成 31 年 4 月 1 日 改正)

(目的)

第1条 玉川大学（以下「本大学」という。）教員の、教育研究活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として、大学FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 本委員会は、委員長、委員、事務担当をもって構成する。

- 2 前項の委員長は教学部長とする。
- 3 委員は、各学部のFD担当があたる。
- 4 委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。
- 5 委員長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。
- 6 本委員会には学部ごとの分科会を設けることができる。
- 7 前項による分科会のまとめ役及び委員は学部長が選任する。

(任期)

第3条 委員の任期は1か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第4条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

- 2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第5条 本委員会は、次の事項を審議する。

- (1) 教育研究活動改善の方策に関する事項
- (2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項
- (3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項
- (4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項
- (5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行
- (6) 部会からの報告・審議に関する事項
- (7) その他FDに関連する事項

(分科会)

第6条 各分科会は、FD担当が取りまとめ、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

2 各分科会にはFD活動を円滑に進めるため、FDer（ファカルティ・ディベロッパー）（以下、「FDer」）を置く。FDerはFD担当が兼ねることができる。

（答申）

第7条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

（実施事項の決定）

第8条 前条の答申内容の実施については、大学部長会の議を経て学長が決定する。

（実施事項の運用）

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、教務委員会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。

（事務主管）

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則

この規程は、平成15年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成31年4月1日から施行する。

参考資料5. 玉川大学大学院FD委員会規程

(平成19年4月1日 制定)

(平成29年4月1日 改正)

(目的)

第1条 玉川大学大学院（以下「本大学院」という。）教員の研究教育活動の向上・能力開発に関して恒常的に検討を行い、その質的充実を図ることを目的として大学院FD（ファカルティ・ディベロップメント）（以下「FD」という。）委員会（以下「本委員会」という。）を置く。

(組織)

第2条 本委員会は、委員長並びに委員、アドバイザー及び事務担当をもって構成する。

2 前項の委員長及び委員等は、毎年度当初、学長がこれを委嘱する。

3 学長が必要と認めたときは副委員長を置くことができる。

4 本委員会には研究科（専門職学位課程は専攻）ごとの分科会を設けることができる。

5 前項による分科会のまとめ役は研究科長（教職大学院科長含む）が選任する。

(任期)

第3条 委員の任期は1か年とする。ただし、再任を妨げない。

(運営)

第4条 本委員会は、委員長が招集・開会し、議長となる。

2 委員長が必要と認めた場合は、委員以外の教職員の出席を求め、意見を聴取することができる。

(審議事項)

第5条 本委員会は、次の事項を審議する。

(1) 教育研究活動改善の方策に関する事項

(2) 初任者及び現任者の研修計画の立案・実施に関する事項

(3) 学生による授業評価の実施、結果分析及びフィードバックに関する事項

(4) FDに関する教員への各種コンサルティングに関する事項

(5) 教員のFD活動の指針に関する冊子及びFD活動報告書の刊行

(6) 分科会からの報告・審議に関する事項

(7) その他FDに関連する事項

(分科会)

第6条 各分科会は、本委員会に検討・実施事項を報告しなければならない。

(答申)

第7条 委員長は、本委員会の審議結果を学長に答申しなければならない。

(実施事項の決定)

第8条 前条の答申内容の実施については、大学院研究科長会の議を経て学長が決定する。
(実施事項の運用)

第9条 前条により決定した実施事項に関する実際の運用に関しては、研究科会及び教育研究活動等点検調査委員会との調整を図りながら検討、実施するものとする。
(事務主管)

第10条 本委員会に係る事務主管は、教学部が行う。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、平成29年4月1日から施行する。

平成 30 年度 ファカルティ・ディベロップメント活動報告書

玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

令和元年 7 月 発行

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

令和元年 7 月発行

発行 玉川大学 大学 FD 委員会・大学院 FD 委員会

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

tel : 042-739-8802 (教学部教務課)